
みらくる

H a r r y 英仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みらくる

【Nコード】

N9443F

【作者名】

Harry英仁

【あらすじ】

母親に捨てられた少年野島浩平は、転校してきた南国の小さな町で、不思議な瞳を持つ少女長谷川咲希と出会う。浩平の見る「奇跡」の先にあるものは……。

プロローグ

んしょ、んしょ……

ま、まってよヒロシくん

はやくはやく！ もうすこしだから、ガンバレ！

う、うん、ゴメン……

もう、なんであやまってんだよ

だってわたし、はしるのおそいから……

あ、そっか、ゴメンな

ううん、わたしこそ それよりはやくいこうよ

ああ、もうすぐだぜ！ ほらあそこにもうみえてる！

くらいからよくみえないよ

もうすぐたいようがのぼってくるから、そうしたらみえるよ！

う、うん

さ、いこうぜ！

うん！

………

ひい、ふえ……

さ、ついたぞー！

はあ、はあ……

だ、だいじょうぶ？

うん、ご、ゴメンね

ああ、こっちこそゴメンな もうすぐたいようがでてきそうだったから

わ、わたしはいいよ それよりここでなにするの？ こんなにはやおきして

ああ、まえにいったらろ みせたいものがあるって

う、うん

それをこれからみようってわけだよ！

そ、そうなんだ

そうなんだ！ こっちへきてみろよ

う、うん あれ？

そ、これこれ！

これって、おやしろ？

そう！ こくらへんのうみをまもっているかみさまがいるって、
まえにじーちゃんがいつてたんだ！

へえ、こんなところにあるなんて、しらなかった……

へへへ、すごいだろ！

………

さ、そろそろたいようがのぼってくるぞ！

あっ！

さあ、はじまったぞ！

す、すごい、おやしろがひかっている！ キレイ……

スゲエだろ！ なんてなのかはわからないけど、たいようのひか
りがあたると、おやしろがキラキラひかるんだ！

うん、とってもキレイ！ ヒロシくんありがとう！

………

あ、あれ？

………

あれ、ヒロシくん？

………

ね、ねえヒロシくん、どこにいったの？

………

ねえヒロシくん、どこ？ ヒロシくん！

………

えぐ…… ヒロシくん、ヒロシくん……
……..
えぐ……、ぐすん……、ヒロシくん……、ヒロシくん……
……..

「奇跡って何？」

「え？」

「奇跡って起こると思う？」

「さあ、どうだろうな」

「奇跡って、どんな時に起こるの？」

「さ、さあ」

「奇跡って、何のために起こるの？」

「……..」

「人を幸せにするため？ それとも不幸にするため？」

「……..」

「私、知らない。人を不幸にする奇跡なんか知らない。そんなの、起こってほしくなんかない……」

あなたは「奇跡」を信じますか？

あなたの周りで「奇跡」と呼べるような出来事が起こったことはありますか？

そしてそれは、あなたにとって「よいこと」でしたか？ それとも「わるいこと」でしたか？

この物語には「奇跡」を体験した女の子が登場します。
その女の子は「奇跡」が起こると泣いてしまいました。
女の子に起こった「奇跡」、それは「わるいこと」でした。

でも周りのみんなは気付きませんでした。

女の子が「奇跡」を体験し、そしてずっと泣いていたことを……。

Episode Spring:1 再会

「ふう、やっと着いた」

都会ではまず見られないディーゼル鉄道から降りた俺は、目の前の古びた駅舎を眺める。そして駅舎から出ると、少年時代の思い出に出てくる景色が、まるで再現VTRのように広がっていた。

俺がまだガキだった頃に来た時と全然変わっていない景色。多少古ぼけていたり、「貸店舗」と貼られたシャッターが下ろされていたり、キレイなコンビニができていたりするのは、ちょっとしたご愛嬌。

駅前のロータリーへ出ると、真ん中の植え込みに植えられた大きな桜が目に入る。足元に視線を落とすと桜の花びらが無数に散らばっており、見上げると桜の木はピンク色よりも緑色が多くなっていた。

俺は昨日まで住んでいた所の桜を思い出す……。

「向こうはまだ五分咲きだったのに、さすが南国は咲くのが早いね」

俺……野島浩平^{のじまこうへい}は今、生まれた所から何百キロも離れた九州の南の端っこに立っていた。

ここが俺の新しい生活を送る場所だ。

「こーへー!」

桜を見上げていると、遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。それは聞き覚えのある、どこか懐かしい感じのする声。声のする方へ視線を送ると、ポニーテールの女の子がこっちへ向かって走ってきていた。

「のぞみ!」

俺はこちらへ走ってくる女の子に向けて手を振った。程なくして女の子は桜の木下まで辿り着いた。

「こーへー、久しぶり!」

女の子は俺に向け、笑顔でVサインを作った。

この女の子の名前は「池澤いけざわのぞみ」といって俺のいとこ。詳しく説明すると、俺の母親の妹にあたる人の娘。歳は俺と同じで十六才。性格は至って明るい。

「ゴメンこーへー遅れちゃって！ ちょっと寝坊しちゃった」

「いや俺は全然構わんぞ。今電車で着いたところだし」

「そっか、よかった」

のぞみは申し訳なさそうな表情から、一変して嬉しそうな表情になる。

「でも寝坊ってどういうこと？ もう昼の三時だぞ？」

俺の問いに今度は困ったような表情となる。

「昼寝か？」

「……………」

のぞみは無言で、バツが悪そうに目を泳がせている。

「違うのか？」

するとのぞみは苦笑いを浮べる。何だか様子がおかしい。

「何時から寝て、結果寝坊したんだ？」

しばしの沈黙の後、

「八時……」

「朝の八時？」

徹夜で何かやっていたのであろうか？

するとのぞみは俯き加減で首を振った。

「そっちじゃなくて、その……二十時の方の八時」

のぞみは俯いたまま答えた。

「はぁ？」

どうということだ？

「昨日ね、今日からこーへーが来るからお部屋の掃除してたの。こーへーの使うお部屋ってお姉ちゃんがお嫁に行く時に荷物を整理して以来、誰も部屋に足を踏み入れていなかったの」

整理って、多分お姉さんのいらない荷物を押し込んだだけだろ…

…。どの部屋を割り当てるつもりなのかは知らないけれど。

「だからゴミやホコリ、何だか得体の知れない生物の屍骸とか、全部片付けなきゃいけないわけじゃない。物凄く大変なのよ！」

何だよ、得体の知れない生物って……。

「昨日はね朝の七時から始めたの。掃除っていうか、正直ちよつとした修羅場だった、うん！」

拳を突き上げて力説するのぞみ。よく見るとその腕には絆創膏が数枚貼られていた。

「とにかく色々あって、ようやく終了したのが夜の八時！」
何だか、ヤな予感。

「そして全精力を使い果たした私は、その場で力尽きてしまったの。そして気が付いた時は何ともう昼の二時五十分！」

のぞみ、お前は一体どんな掃除をしていたんだよ？

つーか掃除する前はどんな状況だったのか知りたい……。

「お前、風呂は？」

するとのぞみは一步後退する。

「ハハ……」

そして苦笑い。いかにもバツが悪そうな様子。

「そのまま来たのか？ きったねえな」

「う、うるさいわよ！」

のぞみは頬を膨らませソッポを向いた。さっきから見ていて、よくもここまで表情がコロコロと変わるものである。のぞみと会うのは一年半ぶりだが、こういうところは全く変わっていない。

「……………」

「な、何よう？」

のぞみは口を尖らせる。よく見たら頬が少し赤くなってる。

「お前、相変わらず変わってないなあ」

俺はのぞみに向かってこう言おうと思ったが、やめた。のぞみは

こういう類のことを人から言われるとムキになって怒る。のぞみは「変わっていない」と言われるのが大嫌い。特に胸のことをタブー中のタブー。顔や体格は年齢とともに成長してきてはいるが、胸は相変わらずフラットなままだ。

「べっつに」

俺は笑いをこらえながら、のぞみへ言葉を返す。

「もう何よ、ニヤニヤして！」

俺の反応をみて、のぞみはますます頬を膨らませる。その姿はまさにフグだ！

「そんなことより早く行こうぜ、俺の新生活が始まる所へ！」

「うゝ、ごまかそうとしてるゝ」

俺とのぞみはロータリーを時計回りに歩き始める。しかしのぞみは依然としてふてくされたまま。

「ほらさつと行くぜ。吾郎さんと恭子さんも待ってるんだし、お前も血と汗と涙に汚れた身体を風呂で流したいだろ！」

ポカッ！

俺の後頭部にのぞみのグーパンチが飛んできた。けっこう痛い…。

「もう、何てこと言うのよ！」

のぞみの顔は真っ赤になっていた。

（やっぱ、変わってねえわ……）

俺は後頭部を抑えながら、そう確信した。

「アンタ、四月からは姉さんここに世話になってね」

俺が母にこう素っ気無く言われたのは、三月始めの雪が降る朝だった。

母は俺が六才の時に二度目の離婚をした（らしい）。因みに一度目は俺が生まれる二年も前、母がまだ十七才の時。つまりは母子家庭で、俺と母の二人で暮らしていた。

俺は父親の顔を知らない。離婚する直前まで一緒に暮らしていた

らしいが、俺は全く覚えていない。だから小さい頃、父親参観や運動会の時なんかはよく虐められた。みんなにはいるお父さんが、俺にはいないから……。でも俺は「父親」とはどんな存在か判らなかつたから、周りに何と言われようともピンとこなかった。

母が離婚を決意した理由は、父親の暴力だそうである。事実その暴力により母の左膝は九十度以上曲がらなくなってしまっている。因みに一度目の離婚理由も暴力らしい。

「向こうに行っても、別に心配しなくてもいいからね」

それが母の俺に言った……。俺が最後に聞いた母の言葉。母は見送りをアパートの玄関でスポーツ新聞を片手に済ませた。俺が別れの挨拶をしても、その返事はなかった。

そして俺はこの数日前にのぞみの母である恭子さんから、何故俺が母と別れなければならぬかを教えてくれた。

「浩平君、お母さん、再婚するんだって……」

その一言で、俺は全て理解した。何でも相手は年下のホストらしい。要は年下ホストの気をひくために俺の存在が邪魔になったということ。しかも最初から恭子さんに面倒を見させようと考えていたわけではなく、どこかの施設に入れてしまおうと考えていたらしい。それをみかねた恭子さんが手を挙げたのだ。当然、養育費等はない。むしろ母は妹である恭子さんに多額の借金をしているらしい。

「ゴメンね浩平君。情けない姉で……」

恭子さんは受話器越しに何度もそう言った。でも

正直俺はどうでもよかった。母の事、母が俺を施設に入れようとしていた事、母が俺を恭子さんに押し付けようとした事、母が俺を邪魔者扱いした事。その全てがどうでもいい事だった。

でも俺を拾ってくれた恭子さんをはじめとする池澤家には感謝している。

「フッフフフン」

俺の横を歩くのぞみは鼻歌を歌っている。

「何だか楽しそうだな」

のぞみは一瞬不思議そうな表情を浮べたが、すぐ笑顔に戻る。

「当たり前じゃない。だってこれからずっとこーへーと一緒、晴れて今日から池澤家の一員だよ！ 嬉しくないわけじゃないじゃない！」

俺の言葉に、のぞみは嬉しそうに声を弾ませる。

そして俺とのぞみは歩き続けた。俺の新しい、「俺がいてもいい場所」へ……。

駅前の道を十分程歩くと、海沿いの道へ出た。この道を南へずっと歩いていくと、三階建ての建物がみえてきた。

そして屋上に設置されている看板には「釣り宿 ゆかり」と書かれてあった。

「こーへー、着いたよー」

のぞみはそう言いながら門をくぐる。

この釣り宿、これがのぞみの家であり、俺がこれからお世話になる所である。

「デカくなってる……」

新しい我が家を見た俺の第一印象がそれだった。前にここへ来た時は二階建ての古びた木造の建物だったのに、いつの間にか鉄筋コンクリートの建物になっていた。何でも以前この辺りが舞台となったTVドラマが撮影した際、この「ゆかり」が使用されたのだ。ドラマが終わって後も取材や観光客が押し寄せ、こんな田舎の民宿であるにも関わらず大繁盛をみせたのであった。

「こーへー、早く早く!」

建物をボーッと眺めていると、中からのぞみが手招きしている。

俺はそれに気付き、誘われるように中へと入った。

「これが、あの釣り宿……」

俺は目を疑った。普通釣り宿の玄関はそこらへんの民宿と同じく、民家のそれと大して変わらないはず。しかも「ゆかり」はそれに加えてかなりボロかったはずだ。

「何で釣り宿の玄関にシャンデリアがあるんだよ?」

俺が最後に「ゆかり」を訪れてから数年経った今、「ゆかり」の玄関はちょっとした高級旅館のロビーのようになっていた。

俺はふと視線を足元へ落とす。

やたら足元がフカフカすると思ったら、床が絨毯になっていた。

しかも赤い……。

俺の知っているあのオンボロな「ゆかり」は、オンボロな面影が全く無くなっていた。周りを見渡してみると、いかにも高価そうな絵が飾られていたり、へんてこりんなタヌキの置物があったりと、どこかの社長室のようになっていた。不況不況と言われるこのご時世、「ゆかり」だけバブル時代を満喫しているようだった。

「こーへー、どうしたの？」

俺が周りを見渡してポカンとしていると、のぞみがキョトンとした顔で覗き込んできた。

「あ、いや……随分変わったなって……」

「そうかな？ まあ最近この辺で立て続けにイベント事があったからねえ。特に最近は釣り客だけじゃなくて一般の観光客さんもお見えになるから、色々と整備しなくちゃいけないってわけよ」

のぞみは非常に自慢げな表情。俺は再び足元の真っ赤な絨毯に視線を落とす。

「これでもお父さんとお母さんは、ちょっと物足りないみたいなのと言ってたけれど」

これのどこが物足りないのか聞いてみたいところだ。でも、聞くのがちよつと怖い……。

「行こっか」

のぞみはポカンとしていた俺の手をとり外へと引っ張る。

「おい、行くなってどこへ？」

「どこって母屋に決まってるじゃない」

のぞみは当たり前のように答えた。

「母屋って、この上に住んでるんじゃないのか？」

俺の知っている「ゆかり」は二階が宿泊スペースで、一階が家族の居住スペースになっていたはず。

「うん、二年前に新しく家を建てたの」

のぞみはそう言いながら俺の手を引っ張った。

どうやら「釣り宿ゆかり」は今バブルど真ん中のようなだった。

「いらっしゃい、浩平君」

これまた豪華な母屋の玄関をくぐるとそこにはのぞみの母親で、俺の母の妹にあたる恭子さんが出迎えてくれた。

「お久しぶりです。今日からここでお世話になります」

俺は恭子さんに向かい頭を下げる。

「あらあら、そんなことしなくてもいいのも。これから浩平君は池澤家の一員になるのだから、堅苦しいことは抜きにしましょう」

恭子はそう言ってオホホと笑う。

この恭子さん、もう四十を過ぎているが見た目はとても若く、二十代と間違われるくらいである。のぞみには既に嫁に行った姉がいるが、あと少ししたらおばあちゃんになるかもしれないなんてとても思えない……。恭子さん自身も自分の若さを自覚しているように、のぞみの話によると、たまに鏡を見てニヤニヤしているらしい。

「俺の荷物届いています？」

俺はほとんどの荷物をあらかじめ宅急便で送っていた。今日俺が持ってきたのは身の回りの物を入れたリュックサックのみである。

「ええもう届いているわよ。浩平君の部屋、片付けたばかりだからそのままになっているけれど」

「部屋のことはのぞみから聞きました。色々と大変だったみたいで」

「ええまあ、長い間使っていなかったもので、オホホ……」

恭子さんは苦笑い。先ほどのぞみが言っていたことを恭子さんも体験したようだ。

ん、でもちょっと待てよ？

「恭子さん、一つ聞いてもいいですか？」

「ん、何かしら？」

「この家って二年前に新築したんですよね？」

「そうよ、裏の畑を取って」

「つまりこの家でまだ新しいんですよね？　なのに何でそんな短期間でひどい有様になったんですか？」

「ひどい？」

恭子さんは俺の質問に不思議そうな表情。

「三年分のゴミとかホコリとか、得体の知れない生物の屍骸とか？」
「つか、二年前に新築したのに、何で三年分なんだ？ 今気付いた……。」

俺の質問に対して恭子さんは、

「オホホ……」

笑った、何だ今の間は……

「じゃ、今から浩平君の部屋に案内するわね」

そう言うと、恭子さんは奥へと入っていった。

「さ、浩平君」

「あ、はい」

恭子さんに促され、俺も奥へと進んだ。

「ここよ」

一階奥にある扉の前で恭子さんは立ち止まり、そして扉を開けて中へと入った。俺も恭子さんに続いて中へと入る。

部屋に入った俺は、まず部屋の中を見わたしてみた。

「ここって……」

ここは二年前に新築されたはずだったが、俺はこの部屋に初めて入った気がしなかった。たしかに見覚えのある、懐かしい匂いのする部屋だった。

「ここ、じいちゃんの離れ……」

俺の言葉に、恭子さんはニツコリと微笑む。

「そうよ。家を新築する時に取り壊そうと思ったんだけど、何だか怱びなくてね。結局取り壊さずに新築した家とくつつけることにしたの」

「そうだったんですか」

この離れ、四年前に死んだじいちゃんが使っていた部屋。

じいちゃんはこの辺ではかなり名の知れた漁師だった。元々は息

子である吾郎さんが恭子さんと結婚する際、二人の部屋として建てられたものだったが、じいちゃんが漁で怪我をして足が不自由になって以来、じいちゃんがこの部屋を使うことになったらしい。

俺が小学生の時にここへ来た際、この部屋でよくじいちゃんに遊んでもらった。ここがじいちゃんの離れだと気付いた瞬間、じいちゃんとの思い出が堰を切ったかのように溢れてきた。

「でも、今日はここにお布団敷けないわねえ」

恭子さんが困惑の表情を浮べる。

「え、何ですか？」

「だって荷物まだ片付けきれてないのよ。掃除機もかけてないし」
俺はもう一度部屋をみわたす。

確かに荷物の入った段ボールが積まれたままの状態だが、夜までに片付けられない量じゃない。

「これくらいなら全然大丈夫ですよ。一時間もあれば片付きますよ」

「そうかしら？ 浩平君大丈夫？」

不安気な恭子さんに向かい、俺は笑顔で腕まくりをしてみせる。

すると恭子さんは笑顔をみせてくれた。娘ののぞみと同じく表情がコロコロ変わる人だ。

「それじゃあ、私は夕飯の支度を始めますから、できたら呼びますね」

「わかりました。あの、恭子さん……」

俺は部屋を出ようとした恭子さんを呼び止めた。

恭子さんは一瞬キョトンとした表情をみせたが、すぐ笑顔に戻る。

「……………」

「？」

「い、いえ……、何でもないです、すみません」

すると恭子さんはクスツと小さく笑い、部屋を後にした。

この時、俺が恭子さんに言おうとしたこと、それは感謝の言葉。

親に捨てられたこんな俺を拾ってくれたこと、それについて一言礼が言いたかった。

でも恭子さんの笑顔を見た時、喉まで上がってきていたその言葉が、何故か急にすっこんでしまった。

「今日から池澤家の一員だよ！」

そして俺は、ここへ来る途中に聞いたのぞみの言葉を思い出した。

マッハで部屋を片付けたつもりだったが、段ボールに入った荷物を整理し掃除機をかけ終わった頃、外はもう真っ暗になっていた。最後の段ボールの束をゴミ捨て場に持っていたところで、俺を呼ぶ恭子さんの声が聞こえてきた。

とても腹が減った……。

そう言えば昼前に駅の立ち食いソバ屋でかけそばを食べて以来何も食べていない。俺は一目散に母屋へと向かった。

夕食は居間で俺と恭子さんとのぞみの三人。今晚吾郎さんおじさんは夜釣りのお客さんがいるため帰ってこないそうであった。これにより吾郎さんへの挨拶は明日以降にずれこみそうだ。

夕食が終わり風呂に入った後部屋に戻った。のぞみが一緒にTVを観ようと誘ってくれたが、明日から新しい学校へ行くための準備をしなければいけなかったので断らさせてもらった。

俺は部屋に戻ると段ボールから出しておいた教科書類を確認し、本棚へと整理する。のぞみによると明日は始業式だけだから教科書は使わないそうだが、部屋の隅に本を山積みしているのはちょっと格好悪い……。

「あらや、入らねえや」

本の整理を続けていると困ったことが起きた。教科書類はだいぶ整理できたが、俺が持ってきた雑誌やマンガ類がおさまりきらなかったのだ。何せ私物の殆どを捨てずに持ってきたのだから、本類だけでもかなりの量がある。

「しょうがないな。残りは紐でくくって押入れに入れとこうか」

俺は残りの本類を紐でくくり、押入れへと入れた。押入れは事前のぞみたちが片付けてくれたのだろう、布団が一组と衣装ケース

が二つあるだけだった。

「ついでに布団も出しておくか」

布団は持ってこなかったものでこっちで用意してもらった。ここは一応旅館なので布団類は山程あるらしい。

俺は押入れから布団をベッドへと運び出す。ちゃんと干してくれていたようで、「お日様の匂い」がした。

ドサッ

布団を持ち上げた時、俺の足元に何かが落ちた。布団をベッドに置いてから確認してみると一冊の古い本が落ちていた。

「何だこれ？」

俺は本を手に取り押入れの奥を覗いてみる。すると奥の方にこれと同じような古本が二、三冊あった。おそらくのぞみたちが押入れの物を整理した際に搬出し忘れたものだろう。

俺は手に取った本の表紙を見てみる。

『海美子姫』
うんみこひめ

海美子姫……。そういえばこの本、見覚えがある。確か昔じいちゃんに読んでもらったことがある。この辺に伝わる民話かなんかで、内容は確か……、

「こーへー！」

「うわっ！」

パジャマ姿ののぞみがいきなりドアを開けて入ってきた。

「な、何でそんなビックリするかな」

部屋に入ってきたのぞみは俺の反応に少し驚いていた。

「あのなあ、ノックもしないでいきなり入ってきたら、誰だってビックリするだろうが」

するとのぞみは口をとがらせる。

「えー、私ノックしたよ。ノックしても返事がないから、仕方なく入ったんだよ」

「え、あ、そうなのか？ わ、ワリい……」

全然気付かなかった……。

「もう、しょうがないんだから」

するとのぞみは手に持っていた物を俺の前に出す。

「明日始業式だから、こーへーの新しい制服持ってきたの」

のぞみが持ってきてくれたもの、それは俺の真新しい制服だった。

「おお、サンキュ！」

俺はのぞみから制服を受け取る。そう言えば制服のことをすっかり忘れていた。

「始業式は八時四十分からだから、八時に家出るからね。くれぐれも寝坊しないでね」

のぞみは人差し指を俺の顔の前に突き出してくる。

「わかってるよ！ のぞみもな！」

「私は寝坊なんかしないもーん！」

ウソ付け。今日してたじゃねえか……。

「じゃ、私はそろそろ寝るね。おやすみっ」

のぞみは手を振りながら部屋を後にする。相変わらず楽しそうなヤツだ。

「ったく、どんな内容か思い出せなくなっちゃったじゃねえかよ」

俺は海美子姫の本を押入れへと戻し、ベッドへと潜り込んだ。

遂に、明日から新しい学園生活のスタートだ！

Episode Spring:3 出会い

「あゝっ、遅刻しちゃうー!」

「早くしろよ! もうマジでヤバいつて!」

案の定、のぞみは寝坊した……。

俺は目覚まし時計をセットして眠っていたのだが、初登校前夜の緊張のためか目覚まし時計が鳴る前にパツチり覚めてしまった。

トイレを済ませて顔を洗いに洗面所へ向かう時、廊下でのぞみとすれ違った。挨拶をすると眠たそうな声ではあったが返事をかえしてきた。

その後部屋に戻り真新しい制服に袖を通し、再び部屋を出る。するとトイレの前で恭子さんが困った様子で立っていた。

「おはようございます、恭子さん」

「あら、おはようございます」

俺の顔を見ると一瞬笑顔を見せるが、その表情は曇ったまま。

「どうかしたんですか?」

俺は恭子さんに何かあったのか訊ねてみる。

「ええ、実はのぞみがちょっと困ったことになってしましまして……」

「え? のぞみがどうかしたんですか?」

すると恭子さんはトイレの扉へ視線を向けた。

……………

「何でトイレの中で二度寝しちゃうんだよ! このバカ!」

「あゝ、バカって言ったゝ!」

最悪だった……。

のぞみは朝が非常に弱い。朝起きて夢と現実の狭間をゆらゆら揺れながらトイレへと入った。そしてこともあろうにトイレの最中に

眠ってしまったのだ。のぞみの姿がみえないことに気付いた恭子さんがまさかと思いトイレに耳をあてると、扉の向こうから気持ちのよさそうな寝息が聞こえてきたことで発覚した。その後俺と恭子さん二人で扉を必死で叩いた結果、三十分後ようやく目を覚まし、現在に至る！

「ちよっとこーへー、おいていかないでよー」

「おいていくか！　つーか、俺は学校の場所わかんねえから、行きたくても行けないんだよ！　頼むから早くしろって！」

玄関で待っていると、食パンを喰えたままというベタな格好で制服姿ののぞみが駆けてきた。

「やっと来たか！　行くぞ！」

「お母さん、いつてきまーすっ！」

俺とのぞみは自転車にまたがり、慌しく出発。因みに俺の自転車は吾郎さんのお古を譲り受けたもの。

「行ってらっしゃい」

この慌しい朝、恭子さんだけが落ち着いていた。

「急げ、急げ！」

俺とのぞみは自転車で海岸沿いの道を激走！　車の間をすり抜けたり、赤信号でも突っ切る。俺ものぞみも最早「遅刻」の二文字を回避するために形振り構わぬ想い一心だった。

「なあのだみつ、間に合いそうなのか？」

「け、けっこうヤバいけど、このペース保っていったらギリギリセーフかなっ！　あ、次の角右に曲がって！」

俺とのぞみは必死にペダルをこぐ。お互い始業式早々遅刻するわけにはいかないのだ！

角を曲がった後、しばらくすると道の向こうに学校らしき建物が見えてきた。時間は……八時二十八分。何とか間に合いそうだ。しかしすれ違う同じ制服を着た生徒たちはみんな走っているから、かなりギリギリの様子だ。

「こーへー、自転車置き場こっちだから！」

先に校門をくぐったのぞみが俺に向かって叫ぶ。言われなくても自転車に乗っている奴等みんな同じ方向に向かっていているから一目瞭然だ。俺はのぞみの後姿を追ひ左へターンする。

「よっしゃ、間に合った！」

その時、

「危ない！」

と、誰かが叫んだ。

ギリギリセーフだったことによる達成感に浸っていた俺は、前をよく見ていなかったのだ。要は油断していたわけだ。俺の自転車の前には一人の女子生徒が立っていたのだ。

「だーっ！」

俺はあわてて自転車のハンドルを切る！　しかし……、

ガッシャーン！

目の前の人を瞬時にかわせるスーパーテクニックなど当然持っている筈もなく、バランスを崩した俺は盛大にクラッシュしてしまった。

「い、いってて……」

クラッシュした時に肩を思い切り痛打してしまった……。つか、人通りの多い校門前で大クラッシュを演じてしまったかなりの取り巻きができてしまった。痛い以上に、恥ずかしい……。

「あーちくしょう！　新品の制服が……」

俺は立ち上がって自転車を起こす。そして制服についた泥をはらった。その間、通りすがりの生徒数人が心配そうに声をかけてきてくれたりした。

「そういえば！」

俺はハッと思い出し周りを見回す。あのぶつかりそうになった女子生徒は大丈夫なのだろうか？

「あれ？」

するとそれらしき女子生徒はどこにもいなかった。周囲の生徒に

訊ねてみても結局判らなかった。

「こーへー！」

すると遠くからのぞみの声が聞こえてきた。

もつとよく女子生徒のことを探したかったが、間もなく予鈴も鳴ったので俺は急いでのぞみの元へと走った。

「へー、それは災難だったね」

体育館での始業式が終わった後、教室へと向かう廊下でのぞみが校門での出来事を訊ねてきた。何だかムカムカしていた俺は事情をテキトーに伝えた。

「でも大したことなくてよかったね」

「まだ肩が痛いぞ……」

「気のせいだって！」

のぞみは自信ありげにグーサインをみせる。痛いってのは俺なのに何の自信だよ……。

「あんな、少しは『大丈夫？』とか心配の言葉をかけようとかそういうのはないのか？」

俺はのぞみを横目で睨む。

「いや大丈夫だと思ったから。別に骨が折れて飛び出ているわけでもなし、肉が裂けて血がドバーツと出ているわけでもなし」

するとのぞみはキョトンとした顔でR指定級の返答をする。

「そんな状態の人間が普通に学校の廊下を歩けるか！」

「えー、でもこの間磯釣りのお客さんで磯から転げ落ちた人がいて、太ももの骨がみえるくらい肉が裂けてて血がドバーツと出てる人がいたけど、普通に自分で車運転して帰っていったよ」

「そんな超人と一緒にするな！」

「お母さんが大丈夫かって聞いたら、『職業柄、こんなの日常茶飯事です』って」

「知らねーよ！」

何だよ、何の職業に就いてんだよその人！

「つーか、どこいったんだろ？ 今日が初登校だから名前とか全然わからんし……」

「あ、教室着いたよ！」

俺がブツブツ言っていると、のぞみが俺の袖を引っ張る。いつの間にか教室前まで来てしまっていたようだ。

俺はそのままのぞみに引っ張られる形で、これから学校生活を過ごす教室の中へと入った。

俺とのぞみは同じクラスだった。何でも俺とのぞみが同じクラスになったのは偶然ではない。見知らぬ土地の学校に来た俺に対する学校側の配慮によるもので、要は同じクラスに馴染みの人間がいることで俺の精神的負担を軽減しようというものらしい。

「なあ、のぞみ、俺の席ってどこだ？」

「えっと、ちょっと待ってね」

のぞみは鞆から始業式の時に配られたプリントを取り出す。

「こーへーは男子の八番だから、この列の一番後ろだね。因みに私は、廊下側の一番前！」

「女子の一番か。まあ名前が池澤だからな」

「うん、でも一番前はヤだな……」

「反対に一番後ろは居眠りしててもバレないぞ」

「あゝ、ずるい！」

しかし我ながら何という低レベルな会話だ……。

すると教室の扉がガラガラという音を立てて開いた。

「あ、先生が来た。こーへー、また後で」

「おう！」

担任の教師が来たので俺とのぞみはそれぞれの席に着く。教室にいる他の生徒たちも一斉に各々の席へと向かう。正面をみると俺たちの担任は二十代後半と思われる女性教師。けっこう美人だ！

俺は心の中で弓引きガッツポーズ！

その時、

「……………」

俺の隣の席に誰かが座った。普段は大して気にもしないのだが、担任が来て教室内がそこそ静まり返っていたので、その音が妙に耳についた。

俺は思わず横目でチラリと見てみた。

「……！」

俺は思わず声を上げそうになり、手で口元を押さえる。

俺は横に座っている人物を見てドキッとした。今朝校門前で危うく自転車で轢きそうになった女子生徒らしき人が、俺の隣にいたからである。あの時は一瞬しかその顔はみていないが、何故か脳裏に焼きついて離れない瞳をしていた。

「あの時の、女子だ……」

まだ横顔しか見ていないが、いつしかそれは確信に変わっていた。
「……………」

この女子生徒、席に着いてから前を向くことはなくずっと下を向いている。その視線は机のどこを見ているのかは判らない。

何故だか判らないが、俺はこの女子生徒が気になった。俺は視線を女子生徒から離せないでいる。

「……君。野島浩平君」

「え……」

誰かが俺の名を呼んだ。俺はハッとなって視線を前方へ戻す。すると教壇で担任が困惑の表情を浮べていた。

「どうしたの？ 呼んでいるのに全然聞いてくれなくて」

「え、あ、そうなんですか？ す、すみません……」

どうやら担任はさっきから俺の名前を呼んでいたらしい。クラス中の視線が俺の方へ集まっていた。

「で、何すか？」

すると担任はますます顔をしかめた。

「うーん、先生の話全然聞いてくれていなかったのね……。今はクラスメイトの自己紹介タイムで、次が野島君の番なんだけれど」

俺の気付かない間にそんなコーナーが進行していたらしい。教室のあちらこちらでクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「ちゃんと聞いていて下さいね。それじゃ野島君、改めてお願いします」

担任は苦笑いをしながら再び俺に振ってきた。

そして俺は立ち上がり、

「みなさんはじめまして。野島浩平といいます。よろしくお願いします」

と、至って無難な自己紹介をして席に着いた。

その後自己紹介タイムは進行していき女子の番となる。トップバッターのぞみは明るく元気な女の子をイメージさせるような自己紹介。のぞみらしいといえばのぞみらしい。

俺の後の男子同様、女子の自己紹介も聞き流していたが、ある人物の自己紹介だけは非常に興味があつた。それは勿論俺の隣の女子生徒。そして遂にその順番がまわってきた。

「橋本さんありがとう。それじゃあ次、長谷川さんお願いします」

担任に促されると、俺の隣の女子生徒は立ち上がった。

「長谷川……咲希はせがわ さきです。よろしく……お願いします」

か細い声で自己紹介を終えると、うつむいたまま静かに席に着いた。

「長谷川 咲希か……」

俺は再び横目でこっそり隣を見る。長谷川咲希は自己紹介の時と同じく、ずっと机のどこかを見つめている。その瞳はとても深く、そしてその底に何かが眠っているようであつた。

そしていつの間にか自己紹介は終わり、またホームルーム自体も終了して、下校となった。

初登校日、これにて終了というわけである。

学校からの帰り道、のぞみは自己紹介の時のことを訊ねてきたが、ボーッとしていたと適当に答えてはぐらかした。

「変なの……」

のぞみの言う通りだった。自分でも意識するくらい俺は変だ。何故だか判らないけれど、あの長谷川咲希という女子生徒のことが気になって仕方がない。ホームルームが終わった後、のぞみが俺の席にやってきて話しているうちに、長谷川咲希の姿は見えなくなっていた。校門を出るまでそれとなく探してみたが、結局見つけることはできなかった。

「……………」

何でだ、何でこんなにも気になるんだ？

俺とのぞみは自転車をこぎながら海岸沿いの道へと出る。俺はのぞみの他愛もない話に相槌をうっているが、実際のところ頭の中は長谷川咲希のことで一杯だ。

その後しばらく海岸沿いの道を走っていると、

「あっ！」

のぞみがいきなり声を上げ、自転車を止めた。

「どうしたんだ？」

「ゴメン、今日部活の顧問の所に行かなきゃいけないの忘れてた！」

「顧問？」

のぞみは吹奏楽部に入っている。因みに楽器はトランペットだ。

「ゴメンこーへー、先に帰っててくれないかな？ 帰り道はこの海

岸沿いの道ずっと真っ直ぐ走ったらいいから」

のぞみは顔の前で手を合わせ、申し訳なさそうな表情。

「ああ、俺は全然構わんぞ。道も今朝通ったのを覚えてるし」

「じゃ、大丈夫ね。また後で！」

のぞみはそう言い残すと、自転車の向きを変えて来た道に戻っていった。俺はのぞみの姿が見えなくなるまで手を振った。

のぞみと分かれた俺は海岸沿いの道をゆっくりと走る。今日は風が殆どなく、春の海はベタ凪だ。遠くの方には小島がぼんやりと見えている。確か「田島^{たのしま}」だったっけ。何故か巨大なサボテンが自生

している島だよな。

自転車で走りながら田島を眺める俺の視線の隅に何か動くものが入った。俺は自転車を止め、そしてその動くものが何かを確認する。「人か……」

俺が自転車を走らせている海岸沿いの道の向こう側、つまり下の砂浜に人影があった。

「つか。あれって」

俺はその人影に見覚えがあった。その人物はうちの学校の制服を女子生徒。

「長谷川咲希！」

長谷川咲希は砂浜から俺のいる道の方へと向かっている。そして俺の目の前にある砂浜と道を結ぶ階段を上がり、俺の前に姿を見せた。

「……………」

長谷川咲希は俺の存在に気づき、視線をこちらへと向ける。

「よ、よお……」

突然の対面に慌てた俺は、何ともぎこちなく会釈をした。

「……………」

俺の顔を見てはいるものの、会釈には無反応。

「俺のこと覚えてる？ 同じクラスで席が隣同士の野島だよ。確か、長谷川さんだったよね？」

とりあえず、会話を振ってみる。

「そ、そーいや今朝校門の所でも会ったよな？ 俺が危うく轢きそうになって、ケガしなかった？」

「……………」

全く反応がない……。ただ俺を見つめているだけで、表情は全く変わらない。

「い、いや、あの……」

もう言葉が浮かんでこない。意外と口下手だな俺って。

「……………」

俺は彼女の視線に圧倒されていた。何故かは判らないけれど、彼女の顔を見ていると言葉が出てこなくなる。そしてその瞳はどこまでも深いものに感じられる。俺は今初めて長谷川咲希の顔を真正面で見ているが、その瞳は教室で見た横顔のものよりも深く深く感じられた。

「同じ……」

不意に長谷川咲希の唇が動く。

「あなた、私と、同じ瞳、してる……」

「同じ、瞳？」

俺はその言葉の意味が全く判らなかった。同じ瞳って……、

「なぜ」

「えっ？」

スッ……

俺が呆然としていると、長谷川咲希は俺の横をすり抜けていった。そして俺が自転車走ってきた道の反対側を歩き、去っていく。

「な、何なんだ？」

俺はその言葉の意味が判らず、ただ後姿を見送ることしかできないでいた……。

Episode Spring:4 瞳

「あなた、私と、同じ瞳、してる……」

家に帰ってから俺はずっとその言葉の意味を考えていた。食事の時も、のぞみたちと談笑している時も、トイレの時も風呂の時も、心の端っこのどこかにその言葉はあった。

長谷川咲希……、彼女は一体何者？

夜も更け電気の消えた真っ暗な部屋の中で、俺は眠れずにいる。時計を見るともう日付が変わっている。明日も学校だからもう寝たいのだが、やっぱり彼女のことを気になって目が冴えてしまっている。

俺の頭から離れないのは言葉だけではなかった。

あの瞳だ。何故かは判らないけれど、俺は彼女の瞳が気になっていた。目を逸らそうとしても逃れることができない。それどころか自分からあの瞳に引き付けられ、そして吸い込まれそうになるのだ。うーん、気になる……。

ま、まさか、恋しちゃった？

……………

うーん、何か違うよな。

……………

結局俺は殆ど眠ることなく朝を迎えてしまった。

目覚ましのアラームが鳴る前にスイッチをオフにする。そして制服へと着替え洗面所へと向かった。

洗面所へと続く廊下で恭子さんと会う。

「あ、おはようございます」

「おはようございます。あら……」

「ん、何すか？」

「目元、すごいクマになってますよ」

「え？」

俺は洗面所の鏡で自分の顔を確認してみる。
ホントだ……。殆ど眠れてなかったからなあ。

「どうかしたんですか？」

鏡には恭子さんの心配そうな表情が俺の後ろに映っている。

「え？ いや何でもないですよ」

俺は鏡越しに笑顔をつくってみせる。

「ならいいんですけれど」

すると恭子さんの表情も緩む。

「おふあよ」

のぞみも起きてきた。昨日の朝と同じく寝ぼけ顔だ。

「おーい、もうトイレで寝るなよ」

「ふああいい……。って、もう寝ないもん！」

どうやらパツチリ起きたようだ。

その後俺とのぞみは朝食を済ませ学校へと向かった。自転車で昨日と同じ道を昨日と同じように走る。ただ今日は昨日と違い時間的な余裕がある。

今日は健康診断と進路指導ガイダンスがあるので、まだ授業は行わない。高校二年の一学期に進路相談と言われても全然ピンとこないのだが、これのおかげで今日も昼までなのだから、まあ話くらいは聞いておこう。

「健康診断、やだな……」

学校に着いてからのぞみがポツリと呟く。

「何が？ 体重か？」

「それもあるけど……。何か全体的に。だって健康診断って、男のお医者さんに裸見られちゃうんだよ」

そうか、健康診断の医者ってそんな羨ましいポジションなのか！

「俺も医者目指そうかな……」

「え、こーへー何か言った？」

「いや、何でもないぞ」

危うくのぞみにドン引きされるところだった。

健康診断は何事もなく終わり、ガイダンスもテキストに聞き流しているだけだった。ガイダンス終了後、今日はのぞみの部活もないので一緒に帰ることにした。

「少し太ってたー、おまけに去年から背が全然伸びてない！」

自転車置き場に行くまでの間、俺はのぞみのボヤキを延々聞かされていた。

「このままじゃヤバイ！ 夏に向けてダイエットしなきゃ！」

とのぞみが一人血気盛んに意気込んでいる。俺には別にどうでもいい話だ。

「じゃ、帰ろうぜ」

俺とのぞみは自転車を手で押しながら校門へと向かう。人通りが多いので乗ると人にぶつかりそうになるので少し危ない。

「あ……」

校門にさしかかった時、俺は思わず自転車を止めた。

何故なら、そこにあの長谷川咲希が静かに佇んでいたからだ。

「……………」

長谷川咲希はまるで誰かを待っているかのように、その場で留まっている。

「どうかしたの？」

急に立ち止まった俺に対し、のぞみは不思議そうな表情。

「え、いや……」

リアクションに困った俺は目を逸らす。

その時、逸らした視線が長谷川咲希の方へと向き、偶然にも彼女と目が合ってしまった。

「……………」

俺と目が合っても、彼女の表情が変わることはない。

「長谷川さんがどうかしたの？」

のぞみは俺の視線の先にあるものを辿ったのだろう。横から訊ねてきた。

「いや、別に。あの子のこと知ってんのか？」

俺はのぞみに何気なく長谷川咲希について聞いてみる。俺は長谷川咲希を知ってから、ずっと彼女のことを気になっていた。しかし俺は長谷川咲希がどのような人物か全く知らない。

「うーん、一年の時も同じクラスだったけれど、よくわかんないなあ。私もあんまり話したことないし、それに……」

「それに？」

するとのぞみが俺の耳元に顔を近づけてきた。

「長谷川さんって私たちより一つ年上なの。何でも一年の時に殆ど学校に来なくて留年しちゃったんですって」

「留年？」

「うん、だから接しにくくて……。何となくだけれど」

そう言っのぞみは苦笑いを浮べる。昔から人見知りを全くしないことで有名(?)なのぞみが接しにくいと言うのだから、一般人はかなりカラミ辛いだろう。それに一つ年上……、言われてみれば、確かに俺たちよりも大人っぽいな。

「あ……」

のぞみが声を上げる。

「どうした？」

「こーへー、後ろ」

のぞみの言葉に、俺は振り返った。

すると、そこには……、

「……………」

一度見たら頭から離れない、あの深い瞳の持ち主。長谷川咲希が、そこにいた。

突然の対面に俺は戸惑う。彼女は俺の瞳をずっと見据えている。

「え、え？」

俺の横で、望みが状況を把握できずにいる。尤も、今の状況が把

握できていないのは俺も同じだが。

「……………」

長谷川咲希は無言で俺の瞳を見続ける。俺は彼女の顔を見ていたが、どこにその焦点を合わせていいのか判らなかった。もし彼女の瞳に焦点を合わせると、あの深い瞳にずると引きずりこまれてしまいそうな感じがする。

「あ、あの」

とにかく俺はこの不思議な状況を打開したかった。だから何か言おうとした。でも肝心の言葉が見つからない。

俺は本当に不思議だった。自分で言うのもなんだけれど、前の学校では女子にそこそこの人気があったと思う。だから女子を前にすると緊張して何も話せなくなるような男ではない。なのに、今長谷川咲希を前にして、全く言葉が出てこない。

「同じ……」

しばらくの沈黙の後、長谷川咲希が口を開く。

「やっぱり、同じ……」

俺には彼女の言っていることの意味が全く判らない。同じって、一体何が？

「こ、こーへー……」

のぞみが心配そうに声をかけてくる。のぞみは俺と長谷川咲希の一挙手一投足を、まさに固唾を飲んで見守っていた。

「……………」

ずっと俺の瞳を見据えていた長谷川咲希であったが、しばらくして視線を下に落とす。俺は彼女の表情を伺おうと、合わせて視線を下げてみた。

「え？」

彼女の表情を見た時、俺は戸惑った。俺の顔を見つめている時いたって無表情だったのに、今の表情はとても苦痛に満ちたもののように見えたのだ。

「どうして……」

「えっ」

長谷川咲希は突然口を開いた。

「どうして、どうして……」

そして彼女は顔を上げ、再び無表情で俺の瞳を見つめる。

「あなた、私と、同じ瞳、している」

長谷川咲希は俺に聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟く。

「あなた、私と、同じ……」

「え、な、何が？」

俺には何のことかさっぱり。勿論、俺の横にいるのぞみも同じだ。

「あなた……」

突然、長谷川咲希の表情が曇る。

「あなた、昔、大切な人、失ったこと、あるでしょ……」

「……え？」

大切な人って、一体、どういう意味なんだ？

判らない、全く判らない。

しばらくその場に沈黙が流れる。何だか周りがザワザワしている

感じがする。

「そう、やっぱり、そうだったのね……」

「え、や、やっぱりって？」

俺は思わず声を上げる。自分の心の中にある疑問の絡まりを抑え

きれなくなったからだ。

「やっぱり、あなたも、失っていたのね。大切な人……」

「な、なあ、それってどういう……」

俺が長谷川咲希に言葉の意味を問い詰めようとした、その時。

「こーへーっ！」

突然のぞみが声を上げた。

俺はその声に思わず反応し、のぞみの方へ振り向いた。

その時、

「えっ」

俺の目の前をキラキラと光る雫が横切った。

「こ、こーへー……」

振り向くと、のぞみが何とも言いようなない表情で俺の顔を見ている。のぞみの後ろには、何故かちょっとした人だかりができていた。

「ど、どうしたんだよ」

俺がのぞみに言葉をかけようとした時、

キラッ……

またしても雫が俺の視線を横切る。

俺は地面を見つめる。すると雫が次々と地面に落ちていった。

「え……」

俺はまさかと思い、自分の頬に手をあててみる。

「こーへー……」

のぞみが何か言っていたが、何を言ったのか俺には聞き取れなかった。

「これ、涙？ 俺、泣いているのか？……」

手をあてると、俺の頬はとても湿っていた。

そう俺は泣いていた。瞳から溢れ出た涙は俺の頬を湿らせ、そして頬をつたい雫となって地面へと滑り落ちていく。

「何で俺、泣いているんだよ？ なあ、なあ、何でだよ！」

涙は止めようと思っても、何度も何度も拭いてみても、枯れることなく溢れ続けるのだ。

そう、まるで大切な人を失ってしまった時のように……、

Episode Spring:5 過去

夜……。

真っ暗な部屋の中で、俺はベッドの上で横になりずっと天井を見つめていた。校門での出来事から帰ってきて以来このまま。のぞみが恭子さんに校門での出来事を話したのか、陽が暮れても誰もこの部屋にはやって来なかった。

見つめる天井はどこまでも無機質。それは俺の心の中と同じ。真っ暗でそれ以外何も感じなかった。

「あなた、昔、大切な人、失ったこと、あるでしょ」

俺はこの言葉の意味を、ずっと自分に問い詰め続けていた。

俺は昔、大切な人を失ったことがあるのか……。俺は自分の心の中の扉という扉を全て開け放つ。しかし思い当たる人物はまるでいなかった。

顔も覚えていない父親、俺を邪魔者扱いした母親。俺の人生の中でいなくなってしまった人はいる。しかしそれらはとても「大切な人」とよべるような存在ではない。

俺にはあの言葉の意味が判らない。でもあの時、俺は確かに泣いていた。永遠に止まらないのかと思うくらい、俺の瞳からは涙が溢れ続けたのだ。悲しいという感情は無かった。でも俺は泣いていた。何か悲しみと苦しみが混ざり合ったような、そんな涙だった……。

家までの帰り道、のぞみが俺にしきりに話しかけてきた。内容は殆ど覚えていないが、ある一言だけは覚えている。

「こーへーは私たちの家族なのよ!」

家族……。

俺にはよく判らないものだ。この池澤家が俺の居ていい場所なのは実感している。でも俺が池澤家の家族であるという実感はない……。そもそも俺には家族というものがどういうものか判らない。

俺は家族というものを知らないから……。

「……………」

何度考えてみても、あの時俺が流した涙の意味は判らない、俺には……、

ガチャ……

その時、部屋の扉が開いた。

「こーへー……」

のぞみの声がして、のぞみのものらしき足音が部屋の中へと入ってくる。

「ゴメン、勝手に入ってきたちゃって」

のぞみはそう言うと言の上座る。俺は視線を合わせていないが、のぞみは俺のことをみつめているのは判る。

「こーへー、気分はどう？ 大丈夫……かな？」

のぞみは言葉を選びながら俺に話しかけてくる。

「あの、夕飯のカレーの残り、キッチンにあるから……。温めて持ってこようかな？」

「……………」

「後、お風呂も残してるから。いつでもいいよ、お父さんも夜遅いから」

「……………」

「……………」

そして、しばらく部屋に沈黙が流れる。

「はは……」

困惑したのかのぞみは苦笑い。元々活発な性格であるのぞみには、今のこの状況は耐えられないものなのだろう。

俺もただ黙っていたわけじゃない。昼にあんなことになって、のぞみには済まないと思っている。

でも今の俺はこれ以上ないというくらいの疑問を抱いていた。俺はその疑問をのぞみに訊ねたい。でも俺はできなかった。

怖いのだ、俺が訊ねたことの答えを聞くことが、知ることが……。
「こーへー、気にしてるんだ、校門でのこと」

「……………」

「あの時長谷川さん言ってたよね。こーへーは昔、大切な人を失ったことあるって」

そしてのぞみは視線を畳に落とす。

「実はね……、お母さんに聞いてみたんだ、昔こーへーに……不幸なことがあったのかなって。私の知っている限りじゃそんなこと思いついたらなかったし、お母さんなら知っているかなって。ごめん、勝手にこんなことしちゃって」

のぞみはとても申し訳なさそうな様子。おそらく俺の過去を勝手に詮索してしまった後ろめたさがそうさせているのだろう。

しかし別にそれに対する怒りなどはわいてこない。むしろ俺も知りたい。俺に昔何があったのかを。

何故なら、

俺には七歳以前の記憶や思い出がない。六歳までの俺の記憶が、すっぽりと抜け落ちていたのだった。

「それで、どうだったんだ……」

俺は視線だけをのぞみへ向ける。

するとのぞみは静かに首を振った。

「判らないって。こーへーの父親も考えたんだけど、もう離婚しちゃってるし、あんまりいい人じゃなかったみたいだから「失った」ってわけじゃないし、おばあちゃんは私たちが生まれる前に亡くなったし……」

それはのぞみの言うとおりだった。俺の父の父親は絶えず暴力を振るっていたらしいから「大切」なわけがない。じいちゃんが死んだ時は確かに悲しかった。しかしじいちゃんや漁師一筋に生きて寿

命をまっとうした。だからちょっと違うような気がする。

「お父さんも多分知らないだろうって。お父さん、こーへーのお父さんのこと嫌いだったから」

「そうか……」

「で、でもね、こーへー」

のぞみは立ち上がり、顔を近づけてきた。

「私はね、そんなことどうでもいいと思うの。確かにこーへーは昔辛いことがあったかもしれない。でも今は私たちがいるじゃない！

今は私やお父さんやお母さんがこーへーの家族なの！ 私たちはもう立派な家族なんだよ。だから、もう……」

のぞみの声は段々とかすれ、涙声になっていた。あの元気で活発なのぞみが泣いている、俺のために……。

あののぞみを泣かすなんて、俺は最低だ。

でも、でも俺は知りたい。

長谷川咲希の言葉の意味が、あの時俺が流した涙の理由、そして俺の過去が、知りたい！……

結局昨晚は殆ど眠れなかった。今日が日曜でなかったらかなりヤバかった。

明け方にトイレで部屋を出た際、廊下でのぞみとばったり出くわした。よく見るとのぞみの目は真っ赤に充血している。どうやらのぞみも眠れていないようだ。俺はのぞみに対し「悪い」という気持ちでいっぱいだった。

「外に出てみよっか？」

トイレついでに洗顔を終えた俺にのぞみがそう誘ってきた。俺は少し躊躇したが、俺が答えを出す前にのぞみは俺の腕を引っ張り、強引に外へと連れ出された。

明け方。外はもう空が白み始めている。気温もそんなに上がっておらず、まだ少し肌寒い。今日は漁が休みのため、目の前に広がる海に漁火は見えない。

「砂浜に降りてみよっか？」

海岸沿いの道を歩いているとのぞみがそう切り出してきた。しかもまた俺が答える前に腕を引っ張られた。

「今ちょうど干潮だから、いつもより砂浜が広いね」

砂浜を歩きながらのぞみが話す。ここに来るまで俺は一言もしやべっていない。何か切り出そうとしても、のぞみの真っ赤に充血した目を見ると申し訳ないという気持ちでいっぱいになり、結局何もしやべることができなくなってしまったのだ。

そしてのぞみも昨日のことを気にしているのかいつもに比べて口数が少なく、たまにしゃべっても言葉を選んでるのが丸判り。のぞみとは出会ってから長いが、こんなのぞみを見るのは初めてだ。

「こーへー、座ろっか」

「ああ……」

のぞみに促され、俺とのぞみは砂浜に腰を下ろした。

座ってからしばらくの間沈黙が続く、

そして……、

「ねえ、こーへー」

その声に俺は無言で振り向く。

「海って好き？」

「……………」

「私は好きだな。特にこの海は。砂浜はきれいだし、海岸線が入り組んでいないから海が遠くまで見えるし、向こうの田島は夕陽が沈む時すごくきれいだし」

俺は視線を海へと移す。波打ち際から少し先に、こちら辺で田島と呼ばれる小島が浮かんでいた。

「私よくここに来るんだ。遠くまで青くて、何だかい匂いがして、ここに来ると落ち着くんだ……」

「……………」

「だから、嫌なことや悲しいことがあったらここへ来るんだ。最近じゃ中学の時バスケット部のエースにコクツてあえなく撃沈した時……」

ハハッ」

それは初耳だった。

「ねえこーへー、知ってる？ 私の名前の由来」

のぞみの名前の由来、そういえば知らない。のぞみは自分の名前をいつも平仮名で書くから由来と言われてもピンとこない。

「私の名前、私いつも平仮名だけれど、本当はちゃんとした漢字の書き方もあるんだよ。希望の「望」を書いてその後「海」で「望海」。海を望む……。私が生まれた時、産婦人科の窓からずっと海の方を見ていたんだって。それを聞いたおじいちゃんがこの名前にしようって」

のぞみは少し笑いながら話す。その笑顔は作ったようなものではなく、本当の笑顔だった。

「それをお母さんから聞いた時、思わず笑っちゃった。私その頃から海が好きだったんだなあって……」

のぞみは目を細め、そして海の方を見つめている。

「だからさ、こーへーもさ、私みたいにこの海を見て、忘れちゃいなよ！ 今までの辛いこととか悲しいこと」

そしてのぞみは俺の方へと向き直り、瞳を見据える。

「人は生きていく中で、いっぱい嫌なことがあると思うよ。でもそれをいつまでも気にしていたら、いつまでたっても前に進むことができないよ。過去のこと縛られていたらずっとそこにいなきやいけなくて、前に進めなくて、そのうち前を見ることを諦めて拒んでしまう……」

「……………」

「でも、こーへーはそうじゃだめ！ そんなことさせない！ そのため、こーへーはここにいろの。私たちと一緒にいろの！」
のぞみは俺の瞳を見据えたまま、訴えるような口調で話す。

何だかのぞみはいつの間にか俺なんかよりもずっとずっと成長していた。あの活発な性格の裏にはこのような意識があったのだ。

それに比べて俺は、なんて情けないんだ……。

「こーへーは前に進んでいくの！」

のぞみの声は俺の心の中にまで響く。しかしそれはすぐにかき消されてしまう。

のぞみ、ごめん……。俺はまだ、進めそうにもない……。

瞳が……。あのどこまでも深い瞳が、俺を容赦なく引きずり込もうとしているのだから。

「そろそろ干潮だね」

俺の横に座って海を眺めていたのぞみが話す。

「ねえ、こーへー、知ってる？ あのだうはね、干潮の時歩いて渡れるんだよ」

それは俺も昔じいちゃんから聞いたことがある。干潮の時この砂浜から田島にかけて一筋の道ができるのだという。地元には周知の事実で、釣り人はこの間に島へと渡り磯釣りを楽しむらしい。

「昔はね、干潮になったら田島までちゃんとした道が出てきたんだけれど、今は大潮の干潮の時でないとして出てこなくなっちゃったの。

お父さんの話によると、地球温暖化が原因なんだって」

のぞみは残念そうに話す。

「お父さんとかはけっこう心配してたけれど、私にはあんまり関係ないかな？ だって私は田島に渡りたくても渡れないから……。知

ってる？ 田島には何か訳ありの女神様がいて、女性が島へ渡ると

不幸なことが起きるって。何でも未婚の女性は行き遅れちゃうんですって！」

女神様が奉られているっていう話はじいちゃんに聞いたことあるが、行き遅れるとかいう話は初耳だ……。つーかどうでもいい話だ。

「実際二十数年前に近所の島田さん家の智子さんが、男の人と密会をするのに島へ渡っちゃったんだって。そうしたらその男の人にふられちゃって、その後も男運に恵まれずに行き遅れちゃって、四十五歳を過ぎても未婚独身なんだって！ コワイよねえ……」

どっからそんなくだらない情報を得てるんだよ……。つーか何な

んだその全くありがたみのないご利益は？

その時、楽しそうに（？）話をしていたのぞみが急に立ち上がった。

「誰か、島から渡ってくる？」

のぞみの声に俺も田島の方を向く。最初は釣り人じゃないのかと思ったが、間もなくそうではないことが判った。田島の砂浜から海の中へ入っていかうとする人影はスカートを履いていたからだ。

「あ、あの人女の人だよ。大変、あの人智子おぼさんみたいに行き遅れちゃうよ！」

のぞみはそう言いながら俺の横でピョンピョン飛び跳ねる。

「つかそんな問題じゃねーだろ！ それにいちいち行き遅れた人の実名を出すな！」

「でも大丈夫かな？ まだ完全に潮が引いてないから、けっこう海水が残っていると思うんだけど」

それはのぞみの言うとおりだった。潮は完全に引いておらず、浅の海とはいえ海水はまだ残っている。事実海を渡る女性は腰の辺りまで海水に浸かり、危なっかしい足取りでこちらへと向かってきていた。

「でも誰だろう？ もしかして昨日から島にいたのかな？」

確かに、今島から戻ってくるということは、前の干潮時に島に渡ったということ。その女性はたまによろけながらこちらへと近づいてくる。

俺はその女性の姿をじっと見つめる。そして近づいてくるにつれて女性の表情が確認できるようになってきた。

「あ、あれは！」

俺は頭で理解する前に海の方へと走り出していた。そして海の中へと入りこちらへと近づいてくる女性の元へと向かった。

波に足を取られながらも、俺は海の中を必死になって走った。そして俺は女性の前で立ち止まった。

「はあ、はあ……」

慣れない海中ダッシュで息を切らせた俺だが、息を整えるのも早々に顔を上げる。

そして俺の目の前にいる女性は……、

「ど、どうして、ここに、いるの？」

「それはこっちのセリフだよ、長谷川咲希さん！」

太ももまで海水に浸かった状態で、俺たちは再び瞳を合わせた。長谷川咲希……。田島から渡ってきた女性の正体は彼女だった。

「あの、名字か、下の名前か、どっちかにしてください……。フルネームで呼ばれるのは、不自然な気がします……」

彼女は少し困ったような表情をしていた。

「じゃ、じゃあ長谷川さん、とりあえず砂浜へ移動しようぜ。今一番不自然なのは、このシチュエーションだよ」

俺はのぞみが呆然と突っ立っている砂浜を指差す。

「そうですね……」

しばらくの間があった後、彼女はジャバジャバと音を立てて動き出した。

「……………」

朝の砂浜、俺とのぞみ、そして長谷川は向かい合っていた。俺のズボンと長谷川咲希のスカートから、海水が雫ととってポタポタと滴り落ちている。

「あ、あの……」

まずのぞみが口を開く。

「長谷川さん、何でこんな時間に田島にいたのかな？ 知ってるよね、島の伝説」

恐ろしいってほどでもないが……、

のぞみの問いかけに、長谷川は表情を変えることなく頷く。

「いつから、いたの？」

「昨日の、夕方から……」

長谷川の回答にのぞみは少し驚いていた。あんな何もない島で女子高生がたった一人で一晚過ごそうなんて普通考えない。

「で、何してたの？ あんな何もない所で」

何故かのぞみは長谷川に詰め寄るような形で問いかけていた。しかもものぞみの眉間にはシワが寄っている。

「……………」

長谷川は、今度は何も答えない。そしてさっきまでの無表情が、まるで困惑しているように見えた。

「おい、のぞみ……」

「こーへーはちょっと黙ってて！ ねえ、何してたの？」
のぞみはさらに詰め寄る。何だか怖いぞ……。

「言えません……」

詰め寄ってくるのぞみに困り果てたのか、長谷川は視線からのぞみを外す。

「何だよ？」

「言えません……」

「何だよ！」

「い、言えません……」

のぞみはさらにさらに詰め寄る。

「おいのぞみ、もうよせって！」

俺はこれ以上ほっとけないと思い、のぞみと長谷川の間に入る。

長谷川はかなり困惑している様子で、のぞみは顔が紅潮していた。

「もういいだろ、本人が言いたくなっていって……何を……。何興奮してんだ！」

「そ、そんなんじゃないもん！」

俺はのぞみを後ろへ下げる。本人は否定していたが明らかに冷静さを失っている。こんなのぞみを見るのは初めてだ。

「ご、ごめんなさい、野島君……」

長谷川は俺に向かって頭を下げる。

「何で謝るんだよ。何か俺に悪いことでもしたのか？」

「そ、そういうわけでは……」

「じゃ、別にいいだろ」

俺は長谷川に向かって笑みをみせる。

「なあ、俺は別にあんたが田島で何をしていたかなんて興味ない」

俺は表情を戻し、長谷川の瞳を見据える。

「でも俺はあんたに用がないわけじゃない。むしろ聞きたいことが山ほどあるんだ」

「……………」

長谷川は俺の言葉に俯いてしまう。しかしすぐに顔を上げ、俺の瞳を見る。

「じゃ、一つ聞いていいか？ 山ほどある中で一番の質問」

「はい……」

長谷川の返事に、俺はずっと胸につつかえていたことを訊ねる。

「昨日の校門のこと、覚えているよな？ あの時こう言ったよな？
あなたも、大切な人、失ったことある……って」

「……………」

長谷川の瞳が少し動く。まるでどこまでも深い湖に小石を投げ込んだ時にできる小さな波紋のようだった。

「なあこれはあくまでも俺の推測だ。もし違ってたら謝るよ。はっきり言ってシヤレになんねえから」

「……………」

「でも聞くぞ。あなたってことはさ、長谷川も昔大切な人を失ったことあるのか？」

俺の言葉に長谷川の瞳が大きく揺らぐ。湖に大きな石を投げ込んだ時の波紋のように。

「俺が昨晚全然眠れなかったのは、長谷川の瞳が気になって気になってしょうがなかったからなんだ。俺が昨日校門で涙を流した時、長谷川の瞳が涙越しに目に入った。その時、長谷川の瞳は……、何か、泣いているように見えたんだ」

俺が言葉を投げかける毎に、長谷川の瞳は揺らぎ続ける。

「それで今朝、鏡で自分の顔を見た時、気付いたんだ。同じだってってこと……。あの時長谷川は瞳いっぱい悲しみを含んでいた……」

「……………」

「長谷川と初めて会った時からずっと気になっていた。それは自分と同じ瞳をしていたから、俺と同じ悲しい瞳……。どこまでも深く、底が知れないくらい悲しみの過去を経験した瞳だってことに気付いたんだ」

俺は揺らぎ続ける長谷川の瞳をじっと見据える。でも長谷川も揺らぐ瞳で俺の瞳を見据え続けていた。

「でも、俺には判らなかった。俺自身の過去が……。俺は、俺の過去が知りたい。もし俺の考えが正しければ、長谷川は俺と同じく過去に大切な人を失くしたことがあるということ」

「……………」

「なあ教えてくれないか。昔、何があったのかを」

俺の言葉に長谷川は瞳を曇らせ顔を伏せる。まるで涙が出るのをこらえている様だ。でもそれは俺も同じ。俺は自分の過去にふれようとした時、涙が溢れそうになるのだ。

「……わ、わからない」

聞こえるか聞こえないかくらいの声で、長谷川は話しはじめる。

「野島君の言うとおり、私も昔、大切な人を、失った……。とても、とても、悲しかった……」

「やっぱり……」

俺は思わず顔を伏せてしまった。

そしてここから長谷川の語気が少し強くなる。

「でも、でもそれは、私だけに起きた、悲しい出来事……。私と野島君は、同じ瞳を、しています。私も、初めて会った時から、それを感じました。私と同じ、悲しい過去を、経験しているって……。でも、それは結果がそうであって、そこまでのプロセスは、違うと思います……」

「プロセス？」

俺が顔を上げると、そこには長谷川の瞳があった。

「同じくらいの悲しみを、経験していても、悲しみの過程まで、同じになるなんて、ありません」

「そ、それは……」

俺が話そうとする前に、長谷川が言葉を被せてくる。

「ありません……。奇跡でも、起きない、かぎり……」

「き、奇跡？」

俺は長谷川の言った「奇跡」という言葉の意味が理解できなかった。

そして俺はその意味を訊ねるため口を開こうとした、その時……。早朝の砂浜にパンツという乾いた音が響いた。

横を向くと、のぞみが平手を振りかざしていた。

今のパンツという乾いた音、それはのぞみが長谷川の頬を張ったものであった。

「もう、もういい加減にして！」

のぞみの瞳には怒りと、涙がいっぱいに溢れている。

「もうこれ以上、こーへーのことを苦しめないで！　お願いだから……」

のぞみの言葉に、長谷川は張られた頬を手で押さえるだけで、何も答えなかった。

「昔何があったか知らないけれど、あなたの過去の話にこーへーを巻き込まないで！」

のぞみは今の感情を全て吐き出すかのように叫んだ。それとともに瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「こーへーはね、前に進むの！　悔しいけれど、こーへーの悲しい気持ち、わかってあげられなくてすごく悔しいけれど……、でも、でもこーへーは前に進むの！　だから今ここにいるの！」

のぞみの言葉が俺の胸に突き刺さる。そして知らない間にのぞみの心を傷つけていたという事実を知った。俺はとてつもない嫌悪感に襲われた……。

のぞみの心からの叫びに、長谷川は頬を押さえたまま、何も言わなかった。顔を伏せ、言われるがままであった。

のぞみはそんな長谷川の態度に苛ついているようにもみえた。

「もう……、こーへー行こっ！」

のぞみはいきなり俺の腕を取り、海岸沿いの道へと通じる階段へと引っ張った。

後ろ髪を引かれる思いではあったが、俺はのぞみの手を振り解かなかった。今それをやったら、のぞみと俺の関係が一気に崩れていってしまいそうで怖かったから……。

「……………」

のぞみに手を引っ張られている中、俺は長谷川の瞳を一瞬捉えた。それは、とてもとても、悲しげな瞳……。

少女には抱えきれないくらい、悲しみの色を滲ませていた。

一カ月後……。

遠くに田島をのぞむ展望台に、俺はいた。

砂浜での対峙からもう一ヶ月。どんな凄いことに出くわしてもすぐに忘れてしまう俺だが、あの時のことはまるで昨日のことに覚えていた。

というか、忘れようと思っても忘れることができない出来事だった。

あれ以来、俺は長谷川咲希と話すことはなかった。席は隣だったが、翌日の月曜日にホームルームで学級委員に立候補したのぞみが席替えを強行。俺と長谷川は席が離れてしまった。

また俺が話す機会を作ろうとしても、のぞみがいつも俺にくっついていたので、それもできなかった。

そして放課後、のぞみがいらないのを見計らって長谷川を探してみても、いつの間にかいなくなっていた。俺は校内を隈なく探してみたがどこにもその影はない。俺は校内を出て学校周辺を探検がてらに色々探してみることにした。この展望台もその途中に見つけた場所。初めて来た時は随分遠くまで来てしまったと感じたが、実際は学校から自転車ですごく程度の所だった。

俺は手すりにもたれかかりながら遠くに浮かぶ田島を眺める。入学してからはや一ヶ月でもうすぐゴールデンウィーク。何だかあつという間に過ぎた感じがする。平日は学校、休日は釣り宿の手伝いという生活サイクル。学校では、まだちょっと話す程度だが友達もできた。でもものぞみがいいつも一緒だから、男子よりも女子と話す機会の方が多かった。

「田島……、田島の行き遅れ伝説……か」

田島を眺めているうちに、俺はあの時のぞみが言っていたことを思い出した。田島にまつわる伝説、この辺りではけっこう有名な話

のようで、クラスの人間も大体知っているようであった。

「まあくだらないことほど、興味と関心をひくんだろうな。特にこんな田舎じゃ」

俺はそんな独り言を呟きながら、しばらく展望台で海を眺め続けていた。

「ただいま」

太陽が西へ傾いた頃、俺は家へと帰ってきた。

「おう、浩平！」

玄関で後ろから俺を呼ぶ声が聞こえてきたので振り向くと、釣り道具を抱えた吾郎叔父さんがいた。

「あ、吾郎さん。今帰りですか？」

「おう、今日は久しぶりの大漁だったぞ！」

吾郎さんは釣り宿の主人であり、釣り船「ゆかり丸」の船長。隔日毎に昼釣りと夜釣りで出船している。時には丸一日海の上つてこともある。

「あれ、今日のぞみはどうした？」

「今日も部活です。GW明けに学内発表会があるそうなんデ」

「あゝ、そういやそんなこと言ってたっけ」

吾郎さん、娘の晴れの舞台くらい覚えておいてくださいよ……。

「じゃあ浩平、俺はちょっと一眠りするわ。そうだ、明日のお客さん、夜釣りから朝に変更になったってカミさんに伝えといてくれる？」

吾郎さんは眠そうに大アクビをしながら玄関へと入ってくる。

「あ、そうだ」

靴を脱いだところで吾郎さんは振り返る。

「浩平にお客さんだぞ」

「え？」

その言葉に俺は外の方へ振り返る。

するとそこには……

「野島君、気付くの、遅いです……」

長谷川咲希が寂しそうな表情で立っていた。

ザー……、ザー……

夕風が周りの桜の葉を揺らす。

遠くに田島を望む展望台に、俺と長谷川はいた。

「遠い……です」

展望台に着いて、長谷川の第一声がこれだった。

確かに徒歩でここまで来るのは遠いな……。でもそろそろのぞみが部活から帰ってくる時間だし、誰にも干渉されない場所で思いつくのは、この展望台だけだった。

「ま、まあいいじゃないか。あ、そのベンチに座って」

俺は奥にある古いベンチを指差した。

長谷川は表情を変えることなく、そのベンチに座った。

「野島君は座らないのですか？」

俺は長谷川の後ろ、展望台の手すりにもたれかかっている。

「あ、いや、別に深い意味はないから。で、用って何なんだ？」

俺の言葉の後、しばらくの間があった。長谷川とはあまり接触したことはないが、この独特の「間」には慣れてしまった。

「あの、ごめんなさい……」

長谷川の不意な謝罪に、俺は面食らった。

「あの、池澤さんとのこと……」

「のぞみが？」

「はい、それに、野島君にも、ひどいことを、言ってしまった」

「ひどいこと？ お、俺は別にどうもないぞ。どっちかって言うと、訳わかんないほうだけだよ」

俺は頭をポリポリ掻く。

長谷川が気にしているのは、どうやらあの砂浜での一件のようだ。「もののぞみは大変だったな。あの後のぞみの部屋でカンヅメだよ。まあ俺がこっちへ来てから、ずっと俺のこと気にかけてくれてたか

らさ……」

のぞみが俺のことをずっと心配してくれている。のぞみの気持ちを俺はヒシヒシと感じている。

でも、俺は結局のところ過去を振り切ることができずにいる。のぞみには申し訳ないと思うけれど、俺にとって自分の見えない過去は、とてもとても重いものだった。

「どうして？」

いつの間にか長谷川はこちらに振り向いて、俺の顔をじっと見ていた。

「な、何が？」

「どうしてなんですか？ どうして、そこまで、自分の過去に、こだわるんですか？」

長谷川はあの瞳で俺の瞳を見つめる。まるで俺の本心を全て見透かしているように感じた。

「だって、先月、あんなことがあって、池澤さんのことも、とても傷つけてしまって……。でも、野島君、全然振り切れていない……」

確かに俺は迷っていた。過去を忘れ池澤家の人たちと共に歩んでいくか。それとも、自分の過去を知るために戻っていくか。

俺はどう進んでいいか、迷っていた……。

「どうしてですか？ どうして、そこまで、自分の過去に、こだわるんですか？ だって、辛いじゃないですか、辛い過去を、いつまでもひきずって。あの時、池澤さんが言っていたように、前に進んでいけば、もう瞳を、悲しみに染めることは、ないのに……」

俺を見つめる長谷川の瞳は、大きく揺らいでいた。その瞳は悲しみと、そして疑問の色を孕んでいた。

「それは……、よく判らないんだ。よく判らないけれど、俺にはとても重いんだ……。自分が自分の過去を知らないっていうことは」

「……………」

「何故なら、俺は大切なものを失っているから。大切な記憶を……」
俺は言葉を出すたびに、自分の中から何かがこみ上げてくるのを

感じていた。

「のぞみはさ、昔の嫌なことなんか忘れてしまえっていうけれど、俺にとって過去を忘れるってことはとても苦痛なんだ」

「野島君……」

俺は心の中からこみ上げてくるものを、吐き出すように話し続ける。

「俺はみんなが当たり前のように持っている、覚えている記憶がない。俺には小学校以前の記憶がない……。だから、みんな昔の思い出を楽しそうに話しているのを見るのが辛かった。思い出があるっていうことは、それまで生きてきた証があるっていうこと。でも、俺にはそんな小さい時の思い出がないから、まるで昨日生まれたみたいな感覚で自分に奥行きを感じられなくて……。ずっとずっとコンプレックス感じていたんだ」

すると長谷川がベンチから立ち、手すりにもたれる俺の横に立つ。

「野島君……、過去を背負って生きていくということは、とても辛いことです。でも、過去を捨てるという行為も、とても辛いことです。それは、今までの自分の歩んできた路を、自ら否定することなんだから……」

そして長谷川は顔を伏せ、話を続ける。

「私も、野島君のようなことではないけれど、辛い過去が、あります」

「……………」

「そして、その過去を、私は、今もまだ、引きずっています……」
長谷川の言葉、それは先ほどの俺と同じように、心から溢れてくる何かを吐き出しているようだった。

「何故なら、もう同じ苦しみを、味わいたくないからです。私にとって、過去を忘れるということは、とても辛く、悲しいことです……」

長谷川は地面を見つめながら、淡々と続ける。その瞳には輝きなどなかった。そこにあるのは、底の知れない暗黒だった。

「だから、私は……、野島君に、前に進めとは、言えません。言える資格なんて、ないから……」

俺も、長谷川にそんなことを言える資格なんかない。

「でも、でも、私は、野島君に、野島君には、前に、進んでほしい……」

長谷川は手すりを離れ、俺の正面に向き直った。そして俺の瞳をじっと見据えた。

「私は、こんな自分が、嫌いです。過去を振り払うことを恐れ、そして前に進もうとしない自分が……。だから、だから、私と同じような瞳をした野島君が、とても、とても辛い……。本当はこんなこと、いう資格なんてないけれど、野島君には、自分の辛い過去を糧にして、前に進んでいってほしい……」

その時、長谷川の瞳から大粒の涙が零れ落ちた。まるで自分が持つ辛い過去に対する想いが、心の堤防を決壊したように……。

涙は長谷川の頬をつたい、地面に雫となって落ちていく。

その時、俺の心の堤防も決壊した。

「長谷川、俺も、俺も同じ気持ちだよ」

「え……」

「俺も、長谷川が自分と同じ瞳をしていると知った時、何だか判らないけれど、辛かった……。俺も辛い過去なんか忘れちゃえって言える立場じゃないから」

この時、俺は自分の頬を涙がつたうのを感じた。でも俺は言葉を止めなかった。

止めたくなかった。

「でも、でも、そんなのはウソだ！」

「の、野島君……」

「そんな理由、ウソだ！ 本当の理由は、ただ怖いだけなんだ。今まで前に進んだことがないから、進もうと思ったことがないから」

「……」
「頭では、ちゃんと判っている。何いつまで昔のことにこだわって

んだって。本当に大切にしなければいけないのは今なんだってことも。自分がどうしていいか判らないなんてことはない。答えはもうずっと前から出ているんだ！　なのに、なのに……」

言葉とともに、俺の瞳から涙がとめどなく溢れてくる。でも止まれないなんて思わない。止まってしまったら、自分の想いを解放できなくなると思ったから。

「本当は、前に進んでいきたい。でも、進めない。進んでいくことが、怖いんだ……」

俺は頭を抱え、その場に座り込んでしまった。もう、立っていられなくなった。

「野島君……」

すると長谷川が俺に向けて手を差し伸べてきた。

「私とじゃ、だめですか？」

長谷川の言葉に、俺は顔を上げる。そこには長谷川の決意に満ちた瞳があった。

「私も、怖いです……。野島君と同じように、前に進んでいくことが」

「長谷川……」

「私も、判っていました。野島君と、同じように。前に進んでいくということが、私の答え。でも、それはとても怖いこと。そんなこと、したことから……」

長谷川の瞳は一瞬潤むものの、そこから涙は出てこない。

「でも、私は、野島君となら、進んでいけるかもしれない。もしかしたら……」

俺は長谷川の手を取り立ち上がる。そして再び自分の瞳を長谷川の瞳と重ねる。

「もしかしたら、二人で、進んでいこうとしたら、一人でいるよりも、少しは、怖くないかと、思います」

「長谷川、お前……」

「私も、野島君も、前に進んで行きたいって思っているから、きっ

と、進んでいけると、思います。もし、辛いことがあって、立ち止まること、あるとしたら、お互い支えあって、辛いことを共有して、そして、また進んでいきましょう」

最後に、長谷川は今まで見たことのないような笑みを見せた。そういうえば長谷川の笑顔なんてもの、初めて見た。

長谷川の言葉に、俺は思わず目を反らず。何だか愛の告白をされたようで、何だか照れくさかった。

長谷川はそんな俺の顔を不思議そうな表情で覗き込む。

「い、いや何でもなし。そ、そうだな、二人とも同じ想いなら、乗り越えていけるかもな」

「うん！」

長谷川の笑顔を横目で見ながら、俺は再び手すりにもたれかかる。この時、俺は長谷川にウソをついていた。

本当は判らなかった。俺は本当に自分の過去を乗り越えていけるかを。でも、俺には長谷川の提案をのむ以外、選択肢はなかった。

俺と長谷川が同じ瞳をしているなら、もしかしたら長谷川は俺のことを頼っているのではないか？

長谷川も過去の呪縛から逃れたいため、俺に助けを求めているのではないか？

そう考えると、俺には断ることなどできなかった。同じ瞳を持つ者同士、見捨てるようなことはとてもできない。

そして俺が自分の過去へ辿り着くためには、長谷川が必要なのかもしれない。

サー……………

海からの潮風が展望台の木々を優しく揺らす。その風は、心地よくて暖かい。

一ヶ月前、俺がこの地へやって来た時よりも、風は暖かくなっていた。

もう夏が近い…………。

俺は海の方へ振り向く。

俺が見た海と空は、初めてこの展望台から見た景色に比べて、濃く、深く、澄みわたっていた……。

Episode Summer..1 ともだち

キンコンカンコン……

終業チャイムが鳴って先生が教室から出ていくと、それまで静かだった教室内が一気に騒がしくなる。

外はセミが声高らかに大合唱。もうすっかり夏だ。

「やっと終わった。これで解放されるわ」

俺は机の上のものを片付けると、ゆっくりと席を立った。

今日で一週間続いた学期末テストが終わった。意外にもこの高校は県下有数の進学校で、授業についていくにはかなりの学力が要求される。だからテストの内容も、前の高校とは比べ物にならないくらいに難しい。

「お疲れこーへー！ テストどうだった？」

席を立ったところで、のぞみが俺の方へ近付いてきた。

ぶっちゃけ、今までろくに勉強なんかしたことのない俺は、テストはテキトーに受けていこうと考えていた。しかし俺のそんな考えを、学級委員で実は優等生であるのぞみが見逃さなかった。テスト期間中、俺はのぞみの部屋に「監禁」され、テスト範囲を吐く程詰め込まれた。まさに一生分勉強した気分だ……。

「まあ、俺にしてはよくできたほうだな」

俺はそう言って軽く笑う。事実のぞみのおかげで自己最高点をマークできそうだ。

「何といっても家庭教師がよかったからな！」

のぞみは満面の笑みを見せて胸を張る。こいつはおだてられるとその気になるのだ。

「ありがとうな。のぞみのおかげでいい結果になりそうだ」

「へへ」

「でもこれでやっと、最凶の鬼畜家庭教師から解放されることになったわけだ！」

「へへ」

褒めてねえよ……。

「おい浩平！」

のぞみと一緒に自転車置き場へ来た所で、後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

「あ、ポケ村だ」

俺より先にのぞみが声がした方を指差す。

俺を呼んだのはクラスメイトの村田健一。むらたけんいち数人の見知ったクラスメイトと一緒にこちらへ向かってきた。

「ケン、テストどうだった？」

「まあまあかな？ でもこの高校始まって以来の天才である俺にかかれば、赤子の手を捻るようなものだけだな！」

……この村田健一、通称ケンは自らを「天才」と名乗っているが、これはあくまで「自称」。本当の成績は下から数えた方が早くその名を見付けることができる程。

よくあれでこの高校受かったな。というのはのぞみの印象だ。

「いや、これで俺たちは晴れてテストから解放されたわけだ。もう俺たちの青春を邪魔するものはなくなったわけだ！ もうすぐ夏休みだ、思いっきりはじけるぞーっ！」

ケンは人通りの多い自転車置き場で、派手に飛び上がってガッツポーズ。迷惑この上ない。

ケンはこんな感じで、明るく元気な高校生。おまけにかなりのお調子者だ。クラスのムードメーカーと言えば聞こえはいいが、実際は無駄に騒がしいだけ。そしていつも突拍子もないことを考えたり、またそれを実行したりするので、ついたあだ名が「ポケ村君」という非常に不名誉なものだったりする。

「ポケ村君、あなたうるさいですよ」

「そうですよ」

ケンの後ろから何とも間延びした声。同じくクラスメイトの野早

兄妹だった。

「美奈ちゃん、テストお疲れ〜」

「池澤さんお疲れさまです、おほほほ〜」
のぞみと野早妹が笑いあう。

「池澤さん、私に劳いの言葉はないんですか〜?」

「え、あつ、隆君もお疲れ!」

「はい、お疲れさまです〜」

野早兄にもものぞみは笑顔。ただ今度は苦笑いだ……。

この野早兄妹、実は双子。兄妹だが同じ学年で同じクラスだ。兄の名前は隆で妹の名前は美奈。性格はどちらも天然というか、浮世離れしているというか……、何だか掴みにくい。でも接してみたらけっこういい奴らなので、今は兄妹揃ってツルんでいる。

「ねえもうみんな終わりでしょ? だったら一緒に帰りましょ!」
のぞみが笑顔でみんなを誘う。答えは聞くまでもなく、満場一致だ!

そしてもう一人、俺たちとツルんでいる女子がいた。

その人物は俺たちより先に校門前にいた。

「よっ!」

俺が声をかけると、その女子は俺たちの方へ視線を向けた。

「浩平君、お疲れさまです」

「おうお疲れ! 咲希」

俺が右手を挙げると、咲希は目を細めた。

そう、俺たちとツルんでいるもう一人の女子とは、長谷川咲希なのだ。

「長谷川さん、あなたどこへ行っていたのですか〜。私たち探しましたよ〜」

俺の後ろから美奈が訊ねる。

「私、自転車じゃなくて、歩いて登校しているので、ここで待っていました」

「おい美奈、何を今更言ってた。一緒に帰る時は、ずっとこの形

態だろうが」

俺の突っ込みに、兄の隆がオホホと笑う。
ずっとって言っても、当然最初からこのメンツが揃ったわけではない。

一番最初は俺とのぞみだけだった。そこへ何かとトラブルを起こしては学級委員であるのぞみにとっちめられていたケンが加わり、その後のぞみが美奈と仲良くなった。美奈と仲良くなるということは同時に隆とも仲良くなるということになるので、兄妹揃ってメンツに加わった。

俺たちのグループ形成は、ここまでは順調。問題は咲希だった。元々俺と咲希はGW前の一件から繋がりがあり、あの展望台で会ったりしていたのだが、逆にのぞみは砂浜での一件から咲希のことが気に入らない。だから仲良くするどころか、俺と咲希を引き離そうと必死だった。

でも俺は咲希をグループの中にどうしても入れたかった。元来咲希は友達と呼べるような存在はいないようだし、そして何より過去を克服して前に進んでいくためには、友達というものが必要ではないかと俺は考えた。

ケンや野早兄妹はすんなりいったが、やはりのぞみの説得は困難を極めた。しかし俺たちの粘り強い説得と、恭子さんの力添えもあり、のぞみと咲希の間で話し合いを持たせた。そしてようやく二人の関係は雪解けを迎えたのだった。めでたしめでたし。

と、いうわけでもなかった……。

「私、何だか、話し辛いです。池澤さんと……」

ある時、咲希は俺にこんなことを漏らした。ようやく和解して同じグループ内にいるが、二人の間には見えない壁があった。

というより、のぞみが咲希に対して一方的に壁を作っているようだった。

のぞみはやはり砂浜での一件を気にしているのか、のぞみから咲

希に話しかけるということは殆どない。それどころか俺が咲希に話しかけようとすると、のぞみの執拗なブロックを受ける始末だ。

俺はこののぞみの態度に少し困惑していた。何故ここまで咲希のことを避けるのか？ まあ大きな原因はやはり砂浜での一件なのだろうが……。

「あっ……」

「こーへー、早く行こっ！」

事実、今も俺と咲希が並んで歩こうとするのを、のぞみは無理矢理入ってきて間を割る。

「おいのぞみ！ 歩くの速いって！」

「気にしない気にしない！ 私お腹すいちゃったから早く行こっ！ ほら、みんなも速度上げて！」

のぞみはそう言いながら俺の手を引っ張り、周りを気にせずになズンと歩いていく。自転車を手で押しながら歩いているからバランスが悪い……。

「おい、コラのぞみ！」

俺はバランスを崩しながらやっとの思いでついていく。

「……………、オホホホ」

隆が何か言ったようだったが、自転車のバランスを保つのに必死だったか、俺には最後の笑い声しか聞こえなかった……。

Episode Summer 2 ゆめ

「奇跡って何ですか？」

「え？」

「奇跡って起こると思いますか？」

「さあ、どうだろうな」

「奇跡って、どんな時に起こるものなのですか？」

「さ、さあ」

「奇跡って、何のために起こるのですか？」

「……………」

「人を幸せにするためですか？ それとも不幸にするためですか？」

「……………」

「私、いません。人を不幸にする奇跡なんか……。そんなの、起こってほしくありません」

一学期の中間テストが終わって一週間くらい経った頃。

あの展望台で、俺と咲希の間でこのようなやり取りがあった。

奇跡……。咲希からこの言葉を聞いたのはこれが二度目。一度目はあの砂浜で会った時。

あの時、俺には「奇跡」という言葉の意味が判らなかった。という気にも留めていなかった。

しかしその言葉は再び咲希の口から出る。普通なら気にも留めず、ただ聞き流すだけのこと。

しかし俺は何故か気になっていた。その時の咲希の瞳はいつもよりも深く、そして哀しく感じられたから……。

それだけではなかった。あの時、今まで感じたことのない「何か」が瞳に含まれていることを、俺は感じた。

そしてその「何か」が、言い様のない憎しみであることに俺は気

付いた。

咲希は奇跡を憎んでいる？

何故なのか？ それを導き出すためには、咲希の過去は避けては通れない。

それは同時に、自分の過去と直面することでもあった。

ミーンミーンミーン……………

「おまたせ、浩平君」

「おう、俺も今来たところだ」

一学期終業式前日の夕方、俺は咲希と展望台で会う約束をしていた。

俺は咲希の姿を見つけると、俺のいる展望台の手すりの方へ手招きをする。咲希は額の汗をハンカチで拭いながら、こちらへとやって来る。

「でも珍しいな。咲希の方が後に来るなんて」

今まで俺と咲希は何度かここであっているが、大概咲希の方が先に展望台に到着している。俺の方が先に到着したのは今回が初めてだ。

「ええ、ちょっと、その……」

すると咲希は何故か表情を曇らせる。

「ん、どうかしたのか？」

「ええ、実はここへ来る途中、学校の前を通ったのですが、そこで池澤さんに、出会って……」

のぞみに？ 二人の間に何かあったのだろうか？

「池澤さんは、部活の帰りだったそうなのですが、浩平君の居場所を、訊ねられて……」

俺は咲希の言葉に思わずハツとなる。俺がこの展望台に来ていることは、咲希以外の人間には秘密なのだ。ここは俺の秘密基地のような場所だから、あんまり教えたくないのだ。

「前に浩平君、この展望台のこと、誰にも話しちゃダメって、言っ

てたから……」

「ああ、そうだったな。要はのぞみを煙に巻くので時間がかかったと」

「はい。けっこうしつこく、聞かれましたから……」

咲希は軽くため息をつく。この様子じゃ、けっこうのぞみに絡みつかれたみたいだ。

「ああん、悪かったな」

「いえ、私は、大丈夫ですので……。それより、本題に、入りましょう」

すると咲希の表情が一変。あのどこまでも深い色が咲希の瞳に宿る。

実は今日展望台で会おうと切り出してきたのは咲希の方だった。俺に話したいことがあると……。

「私、夢を見たんです。一週間ほどを前に……」

「夢？」

「はい、その内容を、聞いて頂けますか？」

咲希の言葉に、俺は無言で首を縦に振る。

何となくだが、俺には判る。こういう時の咲希は、俺にとっても重要なことを意味している。

俺は一度頭を軽く振ってから、咲希の方へ向き直る。俺と咲希の瞳が重なり合った時、咲希は夢の内容を語り始めた。

「気が付くと、私は、田島が見える砂浜に、一人で立っていました」

「田島の見える砂浜……。ってことはうちの近所ってことかな？」

「おそらく……。私は、そこではらく田島を見ていました。すると、私の横を、ボロボロの着物を着た一組の若い男女が、通り過ぎていきました」

「若い、男女？」

咲希が話すこと……。夢の話とはいえ、俺は全く掴めない。しかしそんな俺をよそに咲希は話を続ける。

「二人は、私の横切ると、海の中へ、入っていきました。よく見る

と、砂浜から田島へ、一本の路が伸びていて、二人はその路を、辿っていききました……」

「田島へ……」

「はい……。そして私は、まるで二人に吸い寄せられるかのように、田島へと続く路を、進みだしたのです」

何故？ 俺は咲希に訊ねようとしたが思いとどまった。

所詮夢で見た話など荒唐無稽に決まっている。そんなこと訊ねてもまともな答えは返ってこないだろう。

しかしそれ以上に咲希の瞳は、俺が言葉を発することを許してくれないような、そんな見えない威圧感を漂わせていた。

咲希の話は続く……。

「路を進んで、田島に入って、二人の姿を見つけました。私は、二人を追いました。すると目の前に、崖が現れました。すると二人は、崖の前で、座り込んでしまいました」

「そ、それで、どうなったんだ？」

「はい、私は、二人に近付いてみました。女性は、とても辛そうな表情をしていました。そしてよく見ると、女性のお腹の辺りに、黒いシミがありました。それは、血でした……」

咲希の瞳が一瞬揺らぐ。

「女性は、腹部に傷を負っているようで、かなりの重傷でした。男性が女性に、何かを懸命に言っているようでしたが、私には聞こえなくて、判りませんでした……」

すると咲希は俺から視線を外し俯いてしまう。その表情はとても悲しく、辛そうだった。

「どうしたんだ？」

咲希の様子に、俺は思わず駆け寄ろうとする。しかしその前に咲希は話しを続ける。

「その時でした。女性は、男性の耳元で、何かを囁きました。そして女性は、男性の頬に、キスをしました……」

咲希の口から意外な言葉が出たため、俺は思わず身を乗り出す。

「キスをしたんです、そうしたら……」

「そうしたら？」

押し倒したのか？

「変な想像、しないでください」

咲希から返ってきたのは、今まで聞いたことのない低い声でのツコミ。

鋭い……。

「表情で判ります。気をつけて下さい」

うん、気をつけよう。色んな意味で……。

「で、どうなったんだ？ その二人は」

「はい、消えてしまいました……」

「えっ？」

消えた？ それってどういうことだ？

「消えてしまったのです。男性が、まるで最初から、そこにいなかったかのように、消えて無くなってしまったのです……」

咲希はまるで現実にした話のように、とても悲しそうな表情をしていた。

「消えて無くなったって、ほ、本当かよ……」

「はい……。そして男性がいなくなった後、女性は立ち上がり、来た路を、戻りはじめました。私は、女性を追いました。すると、すぐに砂浜へでました。いつの間にか、田島へと続いていた路が、なくなっていました……」

「女性はどこに行ったんだ？」

「はい、女性は、海の中にいました。私は止めようと思い、海の中へと入りました。でも、すぐ足がつかなくなり、怖くなって戻ってしまいました。でもその女性は、時折波にのまれながら、海の中を進んでいました。そして最後には、その姿が、見えなくなっていました……」

その時俺の足元で、ポタポタと何かが滴り落ちる音が聞こえた。視線を落とすと、水滴のようなものが地面に滴り落ちている。

「さ、咲希、お前……」

その水滴は、咲希の瞳から溢れ出て、そして流れ落ちた涙の雫だった。

「ごめんなさい、浩平君……」

俺には全然判らなかった。

何故この夢の話をして、咲希は涙を流すのか……。それ以前に、何故咲希がこの話を俺にしたのかすらも判らない。

「ごめんなさい。でも、でも、涙が止まらないんです。夢から目覚めた時も、私は泣いていました。全然、涙が、止まらないんです……」

咲希は時折目頭を押さえながら話す。でも、涙は咲希の瞳から止め処なく流れ続ける。

ギョッ

咲希は俺のシャツの袖を掴み、そして軽く引っ張った。

「さ、咲希」

ギョッ！

今度は強く引っ張ってきた。

「浩平君、私、わたし、怖い……」

咲希の瞳から大粒の涙が零れる。その溢れる涙には悲しみと苦しみ、そして恐怖を含んでいる感じがした。

そして何より、咲希の声は、震えていた……。

「ずっとずっと、この夢を見るの。見たくないと思っていても、必ずこの夢を見てしまう。こんな、こんな悲しい夢！」

「咲希！」

俺は思わず咲希の身体を抱き寄せる。咲希は声だけでなく、身体も震えていた。泣いているから震えているのではない。得体の知れない恐怖に襲われているような、どうにかなくなってしまいたいような、そんな震え方だった

「怖い……」

咲希はまるで俺に救いを求めているかのように、全身を俺に預け

てくる。

「咲希……」

今の俺には、震える咲希の身体を抱きしめてやることしかできない。

何故なんだ？

何故咲希は「奇跡」という言葉を口にしたのか？

何故咲希はそんな夢を見るのか？

何故咲希は夢のことを俺に話したのか？

何故咲希はここまで恐怖に震えるのか？

咲希と出会ってから、今まで色々なことがあった。

でも何一つ解決していない。謎が謎を呼ぶ状況だ。

何か、逃れようない何かにズルズルと引き込まれていくような気がする。

……………

いや、むしろ、

俺はその何かに、自ら進んで触れようとしているだろうか……。

俺たちは一体、どこへ向かっているのか？

そんなこと、俺にも咲希にも判らない。

なにも、わからなかった……。

Episode Summer 3 海美子姫

展望台での一件後、俺は咲希と別れ家へと戻った。

「ただいま」

家に行くと、廊下でのぞみと出くわした。

「こーへー、どこ行ってたの？」

「散歩」

展望台に行っていることは秘密にしているので、テキトーに答える。

「ホントに。どの辺散歩してるわけ？ ちっとも見かけないよ」

つか、訊ねられる度この答えしかしていないと、さすがに勘ぐられるな……。

「本当だ。見かけないのは、散歩のコースが俺の気分次第だからだよ」

俺はテキトーにあしらってその場を後にする。

しかしのぞみは納得できない表情。

「こーへー……」

俺が部屋に戻ろうとした時、のぞみは何か言いかけたようだが、俺は振り向かなかった。

「さてと……」

部屋の電気をつけ、俺は押入れの前へと向かう。そして押入れを開けた。

展望台で咲希から聞いた夢の話。その話を聞いた俺は、あることを思い出した。

それはかなり昔の話で、田島が舞台となった男女の不思議な話……。

「あつた、これだ」

俺は押入れの中から、薄汚いある一冊の本を取り出した。

「これだ、海美子姫……」

俺は本についたホコリを払い、表紙を開く。

そして読んでいくにつれ、俺の中に眠っていた記憶の断片が、まるでジグソーパズルのように一つの形となって現れてきた。

『海美子姫』

.....

昔、とある小さな漁村に成せいという若くて美しい女がいた。

成は以前漁師の父と共に暮らしていたが、前の嵐で父は亡くなり、今は一人で生活をしていた。

そんなある日のこと、沖合いに浮かぶ田島の巫女が、成の暮らす村へとやってきた。

巫女によると、最近海の悪神様の機嫌が非常に悪く、そのせいでこの地に天変地異が襲うとのこと。

その悪神様の怒りを鎮めるには、若い女を生贄として捧げなければならぬ。

そしてその生贄として白羽の矢を立てられたのが成だった。

その話を聞かされた成は当然躊躇った。勿論恐怖もあったが、それ以上に躊躇う理由があった。

成には由三よしぞうという恋人がいたのだ。

由三は成を救うために田島へと渡り、悪神様を退治する。

その後悪神様は巫女の手により浄化され、「海美子姫」という美しい女神となり海の平和をいつまでも見守り続けた。

.....

読み終わった俺は、静かに本を閉じる。

何だか典型的な勧善懲悪モノの昔話だ……。

「何読んでんだ？」

「うわっ」

突然後ろから声が聞こえ、俺は思わず振り返る。するとそこには

吾郎叔父さんが立っていた。

「どうしたんだ浩平。ノックしたのに全然返事なくて」

「あ、そうなんですか？ すみません、ちょっと本を読んでいて」

「何だそれ、エロ本か？」

「こんな薄汚いエロ本があったらヤですよ！ これですよ、これ」

俺は海美子姫の本を吾郎さんに手渡した。

「これは……」

「知ってるんですか？」

吾郎さんは本のページをペラペラと数枚めくってみせる。何かを思い出しているようだった。

「ああ、これってこの地方に伝わる魔女の奇跡伝説だろ？」

「え、奇跡？」

俺は「奇跡」という言葉に思わず反応してしまった。咲希との一件もあり、「奇跡」という言葉には敏感になってしまっている。

そんな俺の様子を目の当たりにした吾郎さんは、苦笑いを浮かべた。

「何驚いてんだよ。この辺じゃ有名な話だぜ」

俺はこの辺の人間じゃないから、その話のことは知らない。

「どんな話なんです？ その伝説ってのは」

吾郎さんは俺のベッドの上に座り、本を見つめながら話し始める。

「田島に古い神社があるって話、浩平は知っているか？」

その話なら昔じいちゃんに聞かされたことがある。田島には今は誰も住んでいない小さな神社があると。

「俺はその神社ってのはお目にかかったことはないんだが、昔々その神社にはな、一人の巫女さんが住んでいたんだ」

巫女……。海美子姫にも出てきた巫女のことか？

「それで？」

俺は続きが聞きたく、吾郎さんを急かす。

「その巫女さんはな、いつも変な占いや儀式をやっていたんで、村のみんなから気味悪がられていたんだけど、その巫女の予言がよ

く当たるってことで、ある面では信仰の対象にもなっていたんだ」
「そうなんですか？」

「ああ。んである日のこと、その巫女はこの地をとんでもない天変地異が襲うって予言したんだ」

天変地異？　ここまでは海美子姫の内容とほぼ同じだ。

「それで当時の村長が巫女に相談したところ、巫女は海を鎮める護摩行を行う必要がある。そしてそれには若い女を生贄として捧げなければならぬと言ったんだ」

「生贄……」

「そうだ。んでその生贄に村の若い女が選ばれたんだが、実はその女には婚約者がいたんだ」

生贄に選ばれた女と、婚約者の男。その二人が海美子姫に登場する成と由三というわけか。

「それで、婚約者の男はどうしたんですか？」

「ああ、生贄の話を聞いた男は、怒って巫女を殺してしまったんだ」
「こ、殺しちゃったんですか？」

本を見終わったのか、吾郎さんは俺に海美子姫の本を手渡す。

「問題はその後だ。巫女は死ぬ間際、生贄の女に呪いをかけてしまったんだ」

呪い？　何か話が急展開だ……。

「それを知った村人たちは動揺した。さっきも言ったが巫女は村人たちから気味悪がられていたからな。一部の人間が、呪いを受けてしまった女も殺そうとしたんだ」

「何かひどい話ですね。それでどうなったんですか？」

「女は婚約者の男と一緒に田島まで逃げた。しかし追ってきた村人たちに婚約者の男は殺された。女を守るためにね」

ここらへんが海美子姫の本と違ふところか。本ではハッピーエンドっぽく描かれているが、この話ではバッドエンドだ。

「女の方はどうなったんですか？」

すると吾郎さんの目が輝きだす。何だ？

「ここからが凄いだって。村人たちが逃げた女を追っている時、突然大地震が起きたんだ」

「地震ですか？　じゃあ巫女の予言ってのは」

「ああ、ピッタリの中したってわけだ。しかも地震が起きたことにより大津波が発生。しかもそれが村の方へ向かってきた！」

まさに最悪の状況だ。その時の村はさぞパニック状態であつたろう。

「さあさあ！　そして大津波が村に襲いかかろうとしていた、その時！」

吾郎さん、ちょっとテンション上がり過ぎですよ……。

「巫女に呪いを受けた女が田島の崖の上に立っていた。そして女はまるで大津波に自らを捧げるかのごとく、海へと飛び込んだ！」

「飛び込んだ？」

「そうしたらだ、不思議なことに今まさに村へ襲いかかろうとしていた大津波が、跡形もなく消え去ってしまった」

おいおいマジかよ。つまり……、

「巫女の予言どおり、女が生贄になることで津波を防いだってことですか？」

俺の言葉に吾郎さんは頷く。

「そうだな。事実他の地域で大地震と大津波があつて、物凄い被害が出たっていう記録が残っているんだけど、田島周辺の地域には地震に関する記録しか残っていないんだ」

俺は突拍子のない話に言葉を失う。

んなアホな……。

「その後自らの命と引き換えに村を守った女の霊を慰めるため、女の霊を海美子姫と名づけ、田島に小さな祠を建てたそうだな。尤も、今となつてはその祠がどこにあるのか判らないんだけれどな」

「え、そうなんですか？　村を救ったのに……」

「人はな、恨み事はいつまでも根に持つけれど、受けた恩は時間が経つにつれて忘れていくものなんだよ。あ、俺は違うけどな！」

吾郎さんは慌てて言い直す。俺はそんなこと考えてもいなかったけど……。

「それから、現在に至るってカンジなんですか？」

「ああ、確か明治時代に外国の民俗学者がこの地方を訪れた際、この話を聞いて魔女の奇跡伝と名付けたらしい。何でも呪いを受けた女の追われ方が、ヨーロッパの魔女狩りのそれと似ているらしくてな」

吾郎さんの話が本当なら、これがこの地域に伝わる伝説の真相というわけだ。

と、いうことは……。

俺は海美子姫の本を見つめる。

「じゃあ、この本は……」

「その本はな、俺の親父が書いたんだよ」

「へっ、じいちゃんが？」

「それはな、昔親父がこの地域の昔話をするために大地震の民話を元にして書いたものなんだ。俺もガキの頃はよく読んでもらったぞ」
そして吾郎さんは立ち上がった。

「浩平、俺そろそろ明日の出船準備するから、ちょっと手伝ってくれねえか？ そうだ、俺はそもそもそれを言いに来たんだ！」

「そ、そうだったんですか。判りました」

俺は吾郎さんに続いて部屋を出て行く。海美子姫の本はベッドの上に置いていった。

奇跡……。

普段ならそうそう聞くことのない言葉を、俺は立て続けに聞いていた。

俺は不思議に思う。何故俺の周辺でこんなに奇跡という言葉が出てくるのか。

咲希の言葉。咲希の夢。海美子姫。魔女……。

この時の俺は、ただただ不思議に思うしかなかった。

Episode Summer..4 お誘い

「いやっほーい！ ついに、ついに夏休みだーっ！」
「……………」

俺の横でケンが飛び上がってガッツポーズしている。終業式からこれで三十三回目……。

夏休みになってテンションが上がるのは判るが、俺の横でこうテンションを上げられるのは、かなり恥ずかしい。

終業式から終わってから、俺はケンと一緒に駅前の商店街へとやって来た。

その目的とは……、
「なあ、何で俺がお前の水着選びに付き合わされなきゃなんないんだよ……」

「何言ってるんだよ。こんなの男同士でないと選べるわけねえだろ」
「訳判んねえよ。自分の水着くらい自分で選べよ」

「まあそう言うなって！ せっかくの夏休み、仲良くショッピングしようじゃないの！ お互いカノジョもいないわけだしさ！」

そう言っただけでケンは無理矢理肩を組んでくる。暑苦しいし気持ち悪い。

「つか、地味に気にしていることを……。」

「ささ、仲良くショッピング」

ケンは必要以上にくっついてくる。これでは周囲にあらぬ印象を与えてしまいかねない。

それはマズい！ とてもマズい！

「おい、暑苦しい！ 離れろって！」

俺は思い切りケンを振り払う。

「おわっ！」

するとケンはバランスを崩しながら俺の身体から離れる。
バランスの崩し方がやや大げさに見えたが……。

その時、

「あ、コラ！」

「きゃっ」

「おおっ！」

バランスを崩してよろけたケンは、偶然通りかかった人にぶつかってしまった。

「ああ、すみません！　だ、大丈夫ですか？」

ケンはぶつかってしまった人に頭を下げて謝る。俺もすぐに二人へと駆け寄り、ケンがぶつかった人に頭を下げた。

「いえいえ、大丈夫です。気になさらないで」

ケンがぶつかったのは四十代くらいの女性で、見るからに優しそうなカンジの人だった。

「あの、もしよろしければ……これ、お願いします」

女性は手に持っていた紙を俺とケンに一枚ずつ手渡し、軽く会釈をした後その場を去っていった。

「よかったな、優しそうな人で。ったく、気をつけろよ」

俺はケンの頭を小突く。

「ああ、悪い悪い。で、これ何だ？」

俺とケンは女性からもらった紙に目を通す。

『行方不明になった中井浩君についての情報をお願いします』

「行方不明？」

俺が紙に書かれていることを流し読みしていると、

「あゝ、これね」

ケンは何か思い出したようだ。

「ケン、知っているのか？」

「ああ、十年くらい前にな、この近くに住んでいる小学一年生の男の子が、突然姿を消してしまったんだ」

「姿を、消した？」

誘拐か？ 小学一年ってことは家出じゃないよな。

「俺もガキだったからよく覚えてないけれど、昔すごい搜索されてさ、TV取材がいっぱい来たり変な霊能者のオッサンも来たりして、けっこうな騒ぎになってたんだぜ」

「で、今もこんなビラが配られているってことは？」

するとケンは無言で首を振る。

「なるほどね……」

俺は再びビラに視線を落とす。

「失踪当時七歳か。十年前で七歳ってことはさ、俺らと同じ年って
ころか？」

するとケンは再び首を振る。

「いや、確か違ったと思うぞ。これって確かオリンピックと同じ年に起きたはずだから、俺たちより一つ上。その時まだ俺らは幼稚園だよ」

「一つ、年上……」

俺は立ち止まり、手に持ったビラを熟読する。

するとケンが再び肩を組んくる。

「何黙々と読んでんだよ！ 今日水着を買いに来たんだぞ！ ほら、行くぞ！」

そして俺はケンに引きずられるような格好で近くのショップへ。

「ったく……」

俺は手に持ったビラをカバンの中へと押し込み、ケンの買い物に付き合うこととなった。

「いやー、いい水着みつけたわー。店員さんの話によると今渋谷で大流行の最新水着！ これさえあれば今年の夏はモテモテだぜ！」

商店街からの帰り道、俺の横でケンが買ったばかりの水着の入った紙袋に頬擦りしている。

はつきり言って鬱陶しい……。

つーかこんなド田舎の洋品店に、渋谷で大流行の最新水着が置いてあるわけがないだろ！

一応今年の春まで街にいた俺から見れば、ケンが買った水着は最新どころか型遅れもいいところの代物だ。

「この水着を着た褐色の肌をした俺に、ビーチの女性はもうメロメロ！ いやーっ、た、たまんねえーっ！ グラマーなお姉さんに逆ナンされたらどうしょっ？」

今ケンの頭の中は、グラマーなお姉さんとのひと夏のあま〜い経験（妄想）で埋め尽くされている。

ある意味、とても幸せなヤツだ……。

「しかも、おまけでこんなものまでもらっちゃったしね！」

ケンは頬擦りしていた紙袋から二枚の紙切れを取り出す。

「何だよそれ？」

「映画のチケットだよ。隣町の映画館でやってるやつだ」

俺はケンにチケットを見せてもらおう。それは隣町の映画館の特別優待券だった。

そしてもっとよく見てみると、俺はあることに気付く。

「これ、期限が明日までじゃねーかよ」

「余ってたんだってさ。何でも最初はガラガラ抽選の景品だったらしいんだけど、誰も当ててくれなくて困ってたんだってさ」

何と本末転倒な……。

「で、そのチケットどうするんだ？」

するとケンは俺の肩に手をまわしてくる。

まさか……、

「そんなの、決まってるじゃないか！」

お、俺っすか？

「いいだろ？ どうせ暇だろ？」

「まあ、今吾郎さんの船がドックに入っているから、暇っちゃあ、暇だけど」

するとケンが俺に抱きついてきた！

「おお、心の友よ!」

「だぁ、やめんかい!」

俺はとっさにケンの身体を振り払った。
すると……、

グシャッ

「ふがつ!」

何かが潰れた様な音に振り向くと、ケンが地面に顔面から突っ込んでいた。その姿はまさに名古屋のシャチホコだ。

「おいケン、大丈夫か!」

「ふ、ふへ……」

というわけで(?!)、明日俺はケンと一緒に映画を観に行くことになった。

……

……

……

……ちゃん……

……いちゃん……

……

……

……おにいちゃん……

……おにいちゃん……

……おにいちゃん……

……

ふと、目が覚めた。

部屋の中は薄っすらと明るい。時計を見ると六時をまわったところ

ろだった。

耳をすませると遠くからセミの鳴き声が聞こえてくる。もう夏の太陽はだいぶ昇ってきているようだ。

「……………」

俺はベッドから身体を起こす。早朝なのに、何故か頭が冴えている。

俺は、夢を見ていた。どんな夢かは思い出せないけれど、小さな女の子の声が聞こえたことはかすかに覚えていた。

その女の子は、何かを言っていたような気がするが、内容までは思い出せない。

「うん……、頭がクラクラするな」

俺は頭を二、三回ポンポンと叩く。

「顔洗ってくるか」

俺は洗面所へ向かうべく部屋を出る。

そして顔を洗い、洗面所を出たところでのぞみと出くわす。

「あ、こーへー、おはよ……」

のぞみは俺の顔をじっと見つめる。

「な、何だよ？」

「こーへー、もしかして寝不足？」

「何で？」

「だって目、まっ赤だよ」

俺は洗面所へと戻り、鏡で自分の顔を見してみる。

「あれ、ホントだ」

するとのぞみが鏡に映りこんできた。

「こーへー、今日何か予定ある？」

「何で？ 何かあるんか？」

するとのぞみは急にもじもじし始める。トイレに行きたいのか？
「別に、特に何もないんだけど、今日ヒマだし、付き合ってくれないかなーって」

要はデートのお誘いってことか……。

俺はのぞみの方へ向き直る。

「悪いけど、今日はケンの先約が入っているんだ」

「え、どこ行くのさ？」

「隣の映画館で映画観てくる」

そして俺は洗面所から出る。するとのぞみが俺の後ろにくっついてきた。

「ねえねえ、私もついていっちゃ駄目？」

「悪いけれど、チケットは二枚しかないらしいんだ」

するとのぞみは露骨に残念そうな表情を浮かべる。

「そういうことだ。ちゃんとお土産買ってきてやるから、いい子でお留守番してろよ」

俺はそう言い残し、部屋へと戻った。

「うゝ、子供扱いするなゝ！」

着替え中、ドアの向こうからのぞみの声が聞こえてきた。

のぞみ、そういうこと言うヤツは子供なんだぞ……。

「もう、そろそろだな」

俺は腕時計へ視線を落とす。ケンとの待ち合わせの時刻が近づいてきた。

ケンが待ち合わせ場所に指定してきたのは、駅の正面玄関。ケンは時間ギリギリに合わせてくるタイプだが、俺は十分前行動タイプだ。

家を出る時、一緒に行けなかったのぞみは頬をふくらませていた。そしてその姿を見た恭子さんは苦笑いである。

やっぱりのぞみを置いてけぼりにしたのは悪かったかな……。今度何かしら埋め合わせをしておこう。

そんなことを考えていると、

「おーい、浩平！」

商店街の向こうからケンが走ってこちらへと向かってきた。

「ギリギリセーフ！」

全力で走ってきたのか、ケンは肩を上下させて息切れをしていた。
「ほら、汗拭けよ」

俺はカバンからハンドタオルを取り出してケンに渡す。

「サンキュー、いやあ暑い暑い!」

ケンの言う通り、今日は暑い。出かける前TVの天気予報をチラ観してきたが、今日はこの夏一番の暑さになるそうだ」

「ほら、とっとと駅の中へ入ろうぜ、ちょっと冷房きいてるだろ」

俺は駅舎の中へ入ろうとする、するとケンに肩を掴まれる。

「どうした?」

するとケンの表情は一気に曇った。

「あのさ、実はな……、俺急用ができちゃってさ、映画行けなくなっちゃったんだよ。ホント悪い!」

ケンはそう言い、手を合わせて深々と頭を下げた。

「マジでスマン!」

「ああ、まあしょうがないよな……。いいよ気にすんなって」

俺はケンの肩をポンと叩く。

「スマン! お詫びにこれやるよ」

ケンはポケットから映画のチケットを取り出し、俺に手渡してきた。

「いいのか?」

「勿論だ! 好きに使ってくれ」

そしてケンは二、三回大きく深呼吸をする。

「じゃ、俺行くわ。この埋め合わせはいつか必ずするから! じゃあな!」

そう言い残すと、ケンは再び物凄い勢いで商店街の方へ走っていった。

俺は声をかけようとしたが、もうその時にはケンの姿は見えなくなっていた。

あいつ意外と俊足なんだ……。

ケンが去ってしまった後、一人残された俺はこれからどうするか考えてみた。

「折角のチケットだからな。無駄にしたくはないよな」

俺は商店街の中を歩きながら色々考える。

「誰か誘ってみるか」

そして最終的に浮かんできた人物は、やっぱりというか何というか、のぞみの顔だった。

「のぞみ、家にいるかな」

俺は商店街を通り抜けて家へと向かう。映画の前に昼飯を済ませる予定していたから、上映時間までまだ余裕がある。

この商店街、実は海沿いの道への近道であり、駅前の広い道を通るより早く家まで到着することができる。これもこっちへ引っ越してきてから気付いたことだ。

そして、しばらく歩いていると、

「あれ？」

ゲーセン横にあるたこ焼き屋の屋台前に、見覚えのある後姿があった。

正直、この見覚えのある後姿を、こんな所でお目にかかれるとは思っていなかったのも、俺は内心驚いていた。

俺はその後姿へと近づき、声をかけてみる。

「さ、咲希？」

するとその人は振り返る。

「……浩平君？……」

思った通り、その後ろ姿は咲希のものであった。手にはたこ焼きの折、口には青海苔のついた爪楊枝が咥えられている。

「ど、どうしたんですか？　こんなところで……」

咲希は突然声をかけられ、少し慌てている様子だ。

「そ、それはこっちのセリフだ。そっちこそ何やってんだよ」

すると咲希は手に持っているたこ焼きの折を、俺の方へ差し出してくる。

「たこ焼き……」

咲希、それは見れば判る……。

俺はたこ焼きの折へと視線を移す。

……………

「つて、おい！」

「ど、どうしたのですか？」

「な、何だよこれ？ 三十個以上あるじゃないか！」

咲希が持っているたこ焼きの折、それは四十個は入ろうかという特大サイズ。おまけにたこ焼き自体も普通サイズと比べて一回りデカイぞ……。

「ここ、元祖たこ焼き総本店。玉も大きくて、とても美味しいです。実は私、たこ焼きが、大好きなんです」

言い終わると咲希はたこ焼きを食べ始める。我慢できないのか、その様子はまるでお預けの解けた犬のようだ……。

「わけわかんねえよ。大体何が元祖で総本店だよ？ たこ焼きは関西発祥だろうが！」

「浩平君、細かいこと気にしすぎですね」

俺が呆れて頭を掻いている間、咲希はたこ焼きを次々と口へと運ぶ。いつの間にか折にあったたこ焼きの数は半分以下となっていた。

「それ、もしかして全部食う気か？」

「はい、大好物ですから」

即答だよ……。

心なしか今の咲希はいつもよりテキパキしている気がする。

「つーかこのクソ暑い中、よく食えるよな」

「はい、大好物ですから」

「胸焼けとかしないのか？」

「はい、大好物ですから」

「喉渴かないのか？」

「はい、大好物ですから」

「何で全然汗かいていないんだ？」

「はい、好物ですから」

最早答えじゃなくなってきた。

俺はたこ焼きに夢中になる咲希の表情を見つめる。

その表情は幸せそうな雰囲気 に溢れている。たこ焼き一つ口へ運ぶ度に、咲希は小さな笑顔をこぼす。思えばこんな表情を見たのは初めてかもしれない。

「どうしたのですか？」

咲希が俺の視線に気付く。

「え、いや別に……。ささ、どうぞたこ焼きを続けて下さい」

「はい、もう終わりました」

「……えっ？」

咲希の手元を見ると、たこ焼きの折がいつの間にか空っぽになっていた。

咲希はその空になった折を屋台横のゴミ箱に捨てる。

「それで、どうしたのですか？」

立ち尽くす俺に咲希が訊ねてくる。

……あ、いかん。思わず口が半開きになってしまっていた。

「い、いや別に。家に帰る途中で偶然姿が見えたからさ」

「そうなんですか？」

「ああ、咲希は何しに商店街へ？」

「たこ焼き」

愚問だった。失礼しました……。

何か、俺の知らない咲希の一面を見てしまったような気がする。

「わ、わかった。咲希が楽しいなら、俺はそれでいいよ……」

「はい？」

答えになってないな、俺。

ああ、何かこの場に居辛くなってきた。間がもたねえよ……。

「じゃ、じゃあ俺そろそろ行くわ」

「あ、はい。さようなら」

そして俺は家へ帰るべく、踵を返す。

「……………」

その時、俺の中である一つの考えが生まれる。そして俺は瞬時に判断して実行する。

「なあ咲希、これから暇か？」

Episode Summer:5 デート

何やかんやで、俺は咲希を映画に誘ってしまっていた。

咲希と商店街で出会ってから約一時間後、俺と咲希は隣町の駅前にいた。隣町とは言っても、ここは田舎。電車で三十分以上かかる。しかし三月までは、隣町へ行くのに十分もかからなかった街で生活していた俺にとって、これはちょっとしたカルチャーショックだった。

「えーと、映画館は……」

俺は駅前の案内板で映画館の場所を探す。ここは一応「市」なので、駅前が開けており人通りも多い。

「こっちです」

俺が案内板と睨めっこしていると、咲希が俺の手を引っ張る。

「知ってるのか？」

すると咲希は頷く。最初から聞けばよかったな。

「ここから歩いて、十分程です」

「そうなんだ、行ったことあるのか？」

「地元ですから……」

まあ隣町とはいえ、地元には変わらないか。

俺は咲希に映画館までの道を任せることにし、案内板の前から離れた。

咲希の言う通り、駅から歩いて十分くらいの所に目的地の映画館があった。映画館は駅前から続くアーケードの中にあり、周りには色々なお店が軒を連ねている。

「田舎だからもっとボロいのを想像していたけれど、意外と小綺麗だな」

「はい、一昨年改装したそうで……」

俺は映画館前の上映予定表と映画のチケットを確認する。上映時

刻まであと三十分くらいある。

「中途半端に時間が余ってるな。なあ、どうする?」

俺は咲希の方へ振り返った。
すると、

「あれ、いない?」

先程までそこにいたはずの咲希の姿がない。

「おい、咲希ーっ!」

俺は辺りを見回してみる。咲希はともかく、俺はこの辺りには全く土地勘がない。はぐれてしまったら厄介だ。

「おい! 咲希どこだーっ!」

俺は道の真ん中まで出て咲希の姿を捜す。

すると向こうの方に、テクテクと歩いていく咲希らしき後姿を発見。

この短時間に何であんな遠くへ行けるんだ?

俺は見失わないよう、咲希の後を追いかける。

「おい、待って!」

俺が咲希の背中に追いついた時、咲希は急に立ち止まった。

「おい、いきなりどこに行くんだよ。はぐれたらどうすんだよ?」

「……………」

咲希は俺の言葉に全く無反応。

一体いきなり何だってんだ?

俺は咲希の立ち止まった向こう側を見る。

「……あ」

そこには頭にハチマキをまき、楽しそうに踊っているタコの絵があった。

「あの、たこ焼き三十個入り二折、お願いします。あ、青海苔は普通、鯉節は大盛で」

……………」

咲希さん、マジっすか?

パクパク……

「……………」

パクパクパク……

「……………」

パクパクパクパク……

「……………」

パクパクパクパクパク……

「あのさあ、咲希」

「ふあい？」

……………

「いや、悪い。何でもないや」

たこ焼きを購入してからずっとこんな調子である。咲希はたこ焼き屋から映画館に戻るまでに一折完食し、映画館の休憩所でもう二折目に手をつけている。

「あのさあ、せめて座席に着くまでガマンできないのか？」

「はい、大好物ですから」

つまり、できないってことか。

咲希は俺に視線を向けることなく、たこ焼きに集中している。しかもここまで飲み物を全く飲まず食べている。見てみると胸焼けしてくる絵ヅラだ……。

パクパクパク……

「……………」

俺はここで、ちょっとしたイタズラを思いつく。

それは、

「一個頂き！」

俺は咲希のたこ焼きの折から、たこ焼きを一つ摘んで口の中へと入れた。

「うーん、外はカリカリ、中は生地がトロ〜リとしているな。そして青海苔と甘辛いソースのコンビネーションが絶妙だな」

実際の所、味は普通だったが、あえて大袈裟に言ってみる。

その時、俺は刃のように鋭く突き刺さるような視線を感じた。
咲希が俺のことをジッと見ている。

「さ、咲希？」

見ている、というより明らかに睨み付けている。まるで俺が親の仇になったかのような……。

「許さない……」

咲希の周りの空気が、ゴゴゴ……と音を立てて蠢いているような気がした。

「許さない」

何で二度言うか……。

しかしとてつもなくヤバイ雰囲気だってことは理解できるぞ。

「そ、そんな怒るなって！　そ、そうだ、あとで俺がたこ焼きおごってやるからさ！」

俺はとっさにそんなことを言ってみる。

でも、こんなんでおさまるような雰囲気じゃないよなあ……。

「え、ホントですか？」

すると咲希の瞳から怒りの炎が消えた。逆に瞳が潤み始め、頬が紅潮している。

「……………」

「どうしたのですか？」

「い、いや、何でもないです」

たこ焼きのパワー、恐るべし！

その後、俺たちは座席に着いて映画を鑑賞した。

映画はどこにでもあるような恋愛モノの洋画。主人公とヒロインが偶然に出会い、くっついたり離れたりを繰り返すものの最後はくっつき、めでたくハッピーエンドとなった。

これをケンと観に来ることになっていたら、周りの客にあらぬ想像をされていたことであろう。

よくよく考えると、俺と咲希が二人で遊ぶなんてことは初めてだ。

春に出会ってから、展望台で一緒にいることはあっても、遊んでいるという感覚はなかった。今こうやって咲希と映画を観に来ているという状況が、まるで別次元の物語のように感じられた。

上映中、俺は隣の座席に座っている咲希を何度か見た。咲希は俺が売店で買ってやったたこ焼きを片手にスクリーンの方を向いていた。

暗くてよく判らなかったが、その時の咲希の瞳は、とても楽しそうなものに見えた。つい数時間前に咲希と商店街で偶然会った俺は咲希の喜怒哀楽のうち「哀」の部分しか見ることができなかった。しかし俺はこの数時間の間に残りの感情を見ることができたのだ。

こうして見ると、咲希はどこにでもいる普通の女の子。俺と同じく、悲しい過去を背負って生きているなんて、とても見えなかった。

「浩平君」

「へっ？」

不意に名前を呼ばれる。

「あの、映画、終わりましたよ」

気が付くと、場内は明るくなっていた。周りの観客も座席を立ち上がっている。

「あ、ああ、そうだな。行くか」

「はい」

俺たちも席を立ち、場内を後にする。

「せっかくここまで来たんだから、この辺ブラブラしていこうぜ」
「そうですね」

映画館から出た俺たちは、アーケード内を散策することにした。
俺は初めての場所だし、何があるかな？
ぐうぐう……

「……………」

どうやら行き先は決定したようだ。

「なあ咲希」

「……はい」

「あれだけたこ焼きを食べて、まだお腹がなるのか？」

俺の横で咲希がお腹に手をあてていた……。

「それとこれとは、別ですから……」

咲希は俯き加減でボソツと呟く。所謂別腹ってやつですか。

「すみません……」

「いいよ別に。俺だって朝から何も食ってねえし」

でも腹が減ったという感覚はない。咲希のたこ焼きを食べている姿を見ていると、お腹いっぱいになってしまったのだ。

「あそこの喫茶店に入ろうぜ」

俺は左手にある喫茶店を指差す。咲希も頷き、俺たちは喫茶店へと入った。メニューは俺がカレーライスで、咲希がピラフだった。喫茶店を出た後、俺たちはゲーセンやペットショップに入ったりした。

特にペットショップでは子犬を抱っこさせてもらったりする。

「このトイプードル、可愛いですね」

「そうだな、ぬいぐるみみたいだ」

咲希は生後三ヶ月程のトイプードルを抱き寄せる。

「食べたら美味しいでしょうか？」

「食うな！」

「冗談です」

この時、かなりシニールではあるが、俺は咲希の冗談を初めて聞いた。

そんなことをやっているうちに、太陽はだんだんと傾いてくる。

「そろそろ帰ろうか」

「もぐもぐ……、そうですね」

アーケード近くの公園のベンチで、俺は咲希にそう促す。

咲希はこの日何箱目かのたこ焼きを食べながら立ち上がった。

「あの、どうして、私を、誘ったのですか？」

「え？……」

帰りの電車を待つホームで、咲希が俺に訊ねてきた。

「村田君が急用で行けなくなった、というのは判りますが、でも、私なんかより、池澤さんとかの方が、楽しかったのでは、ないですか？」

咲希はやや目を伏せながら訊ねてくる。

「すみません、変なこと、聞いてしまつて。でも、その……」

咲希の表情には何故か不安が伺える。視線もあっちへ行ったりこっちへ行ったりしている。

「今日、私と一緒に、楽しかった……ですか？」

「……」

何故咲希がこんなことを聞いてきたのか、俺にはよく判らない。遊びに行つて、こんなこと聞いてくるヤツなんて、今までいなかった。

でも、俺は……、

「もうすぐ電車来るな」

「はい……」

……

……

「ああ、楽しかったよ」

「え……」

俺が答えると、咲希は俺の顔を見る。見ると咲希の口は半開きになっていた。

「ホント言うとき、最初はのぞみを誘おうかなって考えてたんだ。でもその途中で咲希を見つけてさ、何かさ、夢中でたこ焼き食っている姿を見たら、誘ってみたくなったんだよ」

咲希は恥ずかしいのか、頬を赤くして目を伏せた。

「とにかく、今日一日楽しかった。それは嘘じゃないよ」

そして咲希は再び俺の顔に視線を合わせてくる。瞳が少し潤んでいるように見えた。

その瞳には。悲しみや苦しみといった感情は、全く感じることはない。

「ありがとうございます、浩平君」

咲希は俺が今まで見たことのない、満面の笑みを見せてくれた。それは幸せ……。

今咲希の瞳から感じるのは、誰もが普通に持っている、ごくごくありふれた感情。

俺は今日咲希を誘って良かったと思う。今日だけで咲希の色々な面を見ることができた。

昨日までの咲希は悲しみと苦しみがいっぱいで、支えていないと壊れてしまいそうだった。

でも、今日の咲希は、

たこ焼きを食べている時は、とても子供っぽくて、

楽しくて笑っている時は、とても可愛くて、

怒った時は、とても怖く始末に負えなくて、

そして今俺の横で満面の笑みを見せてくれた咲希は、とても愛らしくて、

俺の中にあつた、長谷川咲希のイメージが変化していった。

そして、

帰りの電車がホームへ滑り込んでいく中、俺は自分の中に一つの想いが形成されたことを感じたのだった。

Episode Summer:6

ケンの提案

.....

.....

.....

.....ちゃん.....

.....いちゃん.....

.....おにいちゃん.....

.....おにい.....ちゃん.....

.....

.....

.....

「.....」

まただ、

また夢の中で、誰かの声が聞こえた。

夢自体はよく覚えていない。真っ白っていうか、何も感じないというか、とにかくそんな夢。

でもそんな夢の中で、その誰かの声がしたということだけは、はつきりと覚えている。

それは大人の声じゃない。少年……、いやもっと幼い声だ。

おにいちゃん

夢の中の声は、そう言っていたような気がする……。

俺は右手で頭を掻き筆る。

最近こんな夢ばかり見ている気がする。何もない、感じないところで誰かの声が聞こえるという夢。見始めた時は声すらもおぼろげであったが、それは次第に鮮明なものとなってきていた。

とても、とても不思議な夢……。

この夢以外に、もう一つ不思議なことがある。

俺がこの夢を見た時、決まって枕元がかすかに湿っている。以前のぞみに目が赤くなっていることを指摘され、その湿りが「涙」であることに気付いた。

何故？……

今俺の頭の中はこの言葉でいっぱいになっている。一生懸命考えてみるけれど、答えは出ない、出るわけがなかった。

夢の中の声は「おにいちゃん」と言っている気がする。

しかし俺には従妹はいても妹はいない。俺は一人っ子だし、母親の前の旦那に子供がいたという話は聞いていない。尤もいたとしても、今の俺には全く関係ない。

俺はベッドに横になったまま、天井を見上げて考える。

あまりに不思議で、考えが纏まらない。

全てが、判らない……。

夢……、夢の中の声……、俺の涙……、

「むにゃむにゃ、おれは、うーぱーるーぱー……」

俺の横で眠る、ケンの見ている夢と寝言の意味……、

……………

……って！

「だーっ！」

俺は驚きのあまりベッドから転げ落ちた。

「な、な、な、なんで、ケンが！」

何でケンが俺の横で寝てるんだ！　いつから俺のベッドに潜り込んだ！　少なくとも俺は昨晚一人でベッドに入っただろ！

「ちょっと、どうしたのこーへー？」

俺の絶叫を聞きつけたのか、のぞみがやってきて、

ガチャ

ノックもなしにドアを開け放った。

「……………」

「……………」

のぞみと目が合う。

その瞬間、のぞみの身体が鉄の塊のように動かなくなった。

あゝあ、見ちまったよ……。

「こ、こ……」

そしてのぞみの声が震えだしたかと思うと、

「お母さん！ こ、こーへーが、こーへーがつ！」

叫びながら部屋を飛び出してしまった。

そう、のぞみの眼に飛び込んだのは、一つのベッドで肌を寄せ合
って横になる二人の男という、おそらく誤解率100%の絵ヅラ……。

「こーへーが、こーへーが、ホモにいつ！」

んなこと大声で叫ぶなっつうの！

「なんだ、そういうことだったんだ。よかった」

俺の右横で、のぞみが安堵の表情を浮かべる。

そして俺の左横には、頭を抑えたケンが座っていた。

「ったく、お前がバカなことをするから」

ケンが頭を抑えているのは、俺が思いつきりゲンコツを喰らわ
せてやったからである。

「悪かったよ。つーか、強く殴り過ぎだぞ」

「あなた自業自得ですよ」

「あなたやっぱりボケ村君ですよ、オホホホ」

テーブルを挟んだ向かい側で、野早兄妹が飄々と笑っている。

そしてその野早兄妹に挟まれる形で、咲希が座っていた。

事の顛末はこうだ。

実は今日、ケン、野早兄妹、咲希がうちに泊り込みで遊びに来る
ことになっていた。その集合時間はお昼だったのだが、何故かケン

だけが朝早くやって来たのだ。吾郎さんは早朝から仕事をしているため、玄関は開いておりケンはそこから中へと入る。そして俺の部屋を見つけたのだった。

ここでケンは別に働かせなくてもいい頭を働かせた。まだ寝ている俺を驚かせよう考え、俺の横に潜り込んできたのだ。

しかしここでケンは痛恨のミス(?)を犯す。俺の布団に潜り込んだ瞬間、急に眠くなってしまい、そのまま俺と同じく夢の中へと旅立ってしまった……。

その後俺が目を覚まし、二人で横になっている姿をのぞみに目撃され、現在に至る。

「でも、よかったです。浩平君が、ガチホモじゃなくて」

咲希、そんな言葉をさらっと言わないでくれ。

つか、そんなはしたない言葉どこで覚えた？

「もし、その相手が、村田君だったならば……」

咲希は恐怖に瞳を潤ませ、顔を伏せる。

咲希、そんな気色の悪い想像はせんでくれ。頼むから……。

「ったく、のぞみもあんな大声出してんじゃねえよ！」

「だって、びっくりしたんだもん！」

いくらなんでも従兄をホモ呼ばわりしないでくれ。全くそそっかしい奴だ。

そんなやり取りを野早兄妹はオホホホと笑いながら見ている。

こういう時、この笑い声を聞くと、何かイラッとするな……。

「……………」

そして野早兄妹の間から、何かが突き刺さってくる。それは咲希の視線だった。ちらっと見てみると、咲希は安心と不安が入り混じったような表情をしていた。

俺は咲希に声をかけようとしたが、何故か躊躇った。

何だか複雑な気分だった。

さっきまでは野早兄妹と同じように殆ど気にはならなかったのに、今は違う。

その視線が俺の心に深く突き刺さって、とてもモヤモヤして、イライラしている。

俺は今、何をしたい？ 咲希に何を言いたい？

それすら判らないほど、今の俺は考えが纏まらない。

ただ一つ……、

「俺はガチホモじゃねえ！」

これだけは明確に伝えたかった……。

「えっ、田島へ行くの？」

みんなで作った素麺を食べた後の居間にのぞみの声が響く。

因みにこれを提案したのは、やっぱりケンだった。

「おう、ずっと家の中にもつまんないからさ、外でパーッとしようじゃねえの！」

するとのぞみが口を尖らせる。

「だ、だからって、別に田島でなくても……」

「何言ってるんだよ。こちら辺で、ガーツとバーツとハジけられる場所って、田島くらいしかないじゃんか！」

ケンはオーバリアクションで話す。エアコンの効いた部屋でも暑苦しいヤツだ。

そんなケンの提案に、のぞみは顔をしかめる。明らかにケンの提案に対し拒絶反応を示していた。

のぞみは活発な性格で、決してインドア派ではない。のぞみとて夏の青空の下でハジけたいはずだ。

のぞみがケンの提案で問題にしているのは、ハジける場所なのだ。「まさかお前、田島の変な伝説を真に受けているんじゃないやねえだろうな？」

ケンのはのぞみの様子を見て、ニヤリと笑い訊ねてくる。何だか嫌らしい笑顔だ……。

するとのぞみはうーっと唸り、黙り込んでしまう。どうやら凶星のようだ。

田島に伝わる変な伝説。それは未婚の女性が田島へ渡ると、その女性は一生結婚できなくなるという、通称「田島の行き遅れ伝説」のぞみはこのしょうもない伝説を信じているのだ。

「あんなモン、ただの迷信だって。何マジに信じてるんだよ！」

「だ、だって智子おばさんが」

のぞみの言う智子おばさんとは、独身時に田島へと渡ってしまい、その影響からか今も独身の女性のこと。のぞみは智子おばさんが結婚できないのは、田島へ渡ってしまったからだと思っているのだ。

俺はその智子おばさんって人に会ったことはないのだが、噂は耳に入ってくる。

その噂を纏めると、俺は「結婚できないのは本人に問題があるのでは？」という結論に至った。

智子おばさん、ごめんなさい……。

のぞみが情けない声を上げると、ケンは一瞬鼻で一笑。

「智子おばさんって、あの人はいい年こいてアイドルの追っかけなんかやってるから、男が近付かないんだって！」

「あの人、十代前半の美少年が好きですからね」

「必然的に行き遅れたんですよ、オホホホ」

みんな言いたい放題だ。智子おばさんて人、そんなに有名なのか？

「あの人は、変態です……」

咲希、お前もボソッと酷いこと言うな……。

咲希ですらここまで言うんだから、智子おばさんって相当アレな人なんだろうな。

「つーわけで、これから田島へ行くぞ！ 泳いだり、磯で魚捕ったり、砂浜で恋バナしたり！ うーん青春だねー！」

ケンは立ち上がり、玄関の方へと走っていく。忙しくて騒がしいヤツだ。

「どうするよ？」

居間には俺とのぞみと野早兄妹、そして咲希が残された。

「私、行かないからね！ 絶対に！」

のぞみは田島行きを頑なに拒否。その姿を見て野早兄妹はニヤニヤしている。

「こーへーも、行かないよね？」

「え、俺？」

のぞみの問いかけに、俺は真剣に悩んだ。田島の行き遅れ伝説なんて、男の俺には何の関係もない。だからといって、のぞみを置いていくのも気が引ける。前に咲希と観に行った映画のチケットのこともあるし、ケンの提案を蹴るのもなあ……。

そんな感じで、行くかどうか決めあぐねていた、その時、

「私、行きます」

咲希はそう言い、席を立つ。

「お、おい咲希」

俺は咲希の後を追う。咲希は立ち止まることなく居間を出て行く。
「……………」

咲希は俺に視線を送る。その瞳は、あのどこまでも深く引き込まれそうな……、

そう、あの瞳だ。

咲希はその瞳で俺に何かを語りかけてくる。

否、訴えかけてきている。

俺はその瞳のチカラに引っ張られるように、咲希の後へと続いていった。

Episode Summer:7 肝だめし

ケンの思いつきにより田島へ渡ることとなった俺たち。

ただ昼間はちょうど満潮の時刻と重なっていたため、とても徒歩で田島へは渡れなかった。

そこで次の干潮の時刻、つまり夜から田島へと渡り、「肝だめし」をやることになった。

因みに肝だめしをやろうと言い出してきたのは、当然ケンだった。

そして太陽がすっかり沈んだ夜、

俺たちは田島へと渡るため砂浜に立つ。

俺はみんなを見る。

ケンは揚々、野早兄妹は飄々、のぞみは恐々としている。

ただ一人、咲希だけは無表情で心持が読めない。

「みんな気をつけてな。特に西側の磯場は危ないから、絶対に近付いちゃ駄目だぞ」

砂浜まで付き添ってくれた吾郎さんが、俺たちにそう告げる。当然のことながら無人島である田島には外灯はないので真っ暗。下手に動けば笑えない状況に陥ってしまうだろう。まあそれが一番心配なのは言うまでもなくケンなのだが……。

「はい、判ってますって！ さあみんな、田島へ向かってレッツゴーッ！」

ケンは吾郎さんに手を振ると、砂浜から田島へ伸びる路を全力疾走で駆けていった。

こいつバカだ！

「こら、待ってっ！」

俺はケンに向かって叫ぶが、一瞬でもうかなり遠くまで行ってしまった。

「あ、こーへー、追いかけなきゃ！」

のぞみが暗闇にまぎれて見えなくなってしまったケンの後姿を指す。

「そうだな。じゃ吾郎さん行ってきます。潮が満ちてくる前には帰ってくるんで!」

「おう、気をつけてな!」

俺たちは吾郎さんに見送られ、田島へとのびる路を進み始めた。

そして路を進み田島へ辿り着こうとした頃、途中で転んだのか全身砂まみれでうな垂れているケンを発見した。

こいつ、やっぱりポケ村君だ……。

田島の砂浜に到着してから、肝だめしの概要がケンより発表される。

まずここにいるメンバーでくじ引きを行い二人一組となる。そして砂浜から島の奥へと進んでいき、中央部にある田島のシンボル巨大サボテンまで行く。そこから外海側の砂浜へと降り、砂浜沿いにスタート地点まで戻ってくるというルートだ。このルート、多少木々が茂ってはいるものの、全体的に見通しが良く道に迷う恐れはないらしい。

「まあルートはこんなもんでしょ!」

ケンは身体についた砂を払いながら説明する。さっきまで半ベソ状態だったのに。

「うえーん、私もう結婚できなくなっちゃうのかな」

今度のはのぞみが半ベソ状態だった。

「おい池澤、何肝だめしと違う所で怖がってるんだよ!」

まあだったら何で来たんだという話だが、のぞみの性格からしてたった一人でお留守番のほうが嫌なんだろうな。

「オホホホ」

急に野早兄妹が揃って笑い出す。

「何だよ、急に笑い出すなよ」

「野島君は鈍いですね、オホホホ」

な、何言ってやがんだ？

「おい浩平、くじ引きするぞ！」

ケンが俺の方へとやってくる。いつの間に作ったのか、ケンは紙製のくじを持っている。

「浩平から順番に引いてくれ」

俺は頷き、ケンの拳に握られたくじの一つを掴む。くだらないことでも、くじ引きの瞬間はやっぱり緊張するな。

「じゃ俺、これな」

俺はケンの拳からくじを一つ引き抜く。そして野早兄妹、咲希、のぞみの順番で次々くじを引いていった。

俺は自分の引いたくじを見てみる。するとそこには「2」と書かれていた。

「ケン、俺2番だ」

「うん、そのくじに書かれた番号の者同士がペアを組むんだ。んでそれがスタートする順番でもあるからな」

ケンの言葉に、みんな自分の引いたくじとにらめっこ。

「私、3番！」

「俺は1番か」

「1番です」

「3番です、オホホホ」

「2番、です……」

各々が自分の番号を口に出し、パートナーが誰なのか確認する。

そして肝だめしのペアと順番が決定する。

トップバッターはケンと隆。見事に男同士だった。

「な、何で男同士……」

ケンはまたしてもうな垂れた。合掌……。

そして次は俺と咲希。まあ無難な線だ。

最後はのぞみと美奈。こちらは女同士だ。

「よ、よろしくね、美奈ちゃん」

「オホホホ」

俺はまだうな垂れているケンの肩をポンポンと叩く。

「落ち込む気持ちも判るけれど、ちゃっちゃと進めていこうぜ。潮が満ちてきたら帰れなくなるんだからな」

「わ、判ってるよ。しかし、何でよりによって野郎とペアなんか……」

さっきまではしゃいでいたケンだったが、くじ引きを境にすっかりトーンダウンしてしまった。

ケンは映画のチケット当ててしまったばかりに、今年のくじ運全部使っちゃったんだな。合掌……。

「ボケ村君、怖がって私に抱きついてきたりしないで下さいね」
隆がオホホホと笑いながらケンに向かって話す。

「んな気色の悪いことするか！　つーかボケ村って言うな！」

「オホホホ」

「オホホじゃねえ！」

バカだこいつら……。

「いいから早く行けっての！　時間ねえんだから」

俺はケンと隆の背中を押した。

「判ってるよ！　行くぞ隆！」

「暗いからって変なことしないで下さいね」

「するかっ！」

「オホホホ」

そんなバカなやり取りをしながら、二人は島の奥へと消えていった。

二人がスタートしてから十五分間隔で、俺と咲希のペア、のぞみと美奈のペアが発券する。

しばらくの間、俺たちは砂浜で揃って待つこととなる。

「ねえこーへー」

後ろからのぞみが声をかけてきた。

「こーへー、怖くないの？」

俺は振り向かなかったが、のぞみの声は震えていたので、また半

ベソになっているのだろう。

「別に。田島に何か出るなんて聞いたことねえし」

「でもさ、見るからに何かいそうだよ。奥の方、まるで別世界だよ」
確かに砂浜から奥へと伸びる道は真っ暗闇で何も見えない。もう
ケンたちの姿は確認できない。

「まあ、大丈夫だって。なあ咲希」

何だか俺もちょっと不安になってきたぞ……。

俺は咲希に話を振ってみた。

「……………」

すると咲希は無反応。

おいおい……。

「出るの？」

のぞみが恐る恐る訊ねる。

すると咲希は静かに口を開く。

「幽霊やお化けの類は、出ません……」

するとのぞみは安堵の表情を浮かべる。

「でも、一升瓶を抱えて、泣きながら島を彷徨っている智子おばさんは、たまに出ます……」

「……………」

一同、沈黙……。

ある意味、幽霊よりもレア……もとい怖いかもしれない。

誰か、誰か智子おばさんに愛を！

そんな本当にあった怖い話(?)をしているうちに十五分が過ぎた。

「咲希、俺たちもそろそろ行くか」

「そうですね……」

そして俺たちは島の奥へと伸びる道を進み始める。

「こーへー、気をつけてね」

「ああ、のぞみたちもな！」

俺は振り返り、のぞみたちに向かって手を振る。

「……………」

咲希は振り返りもせず、ただ道を進んでいった。

……………

「……………」

「……………」

俺と咲希は真っ暗な道を進む。

俺と咲希の足音以外、何も聞こえてこない。

俺は全然土地勘がないので、最初はビクビクしながら歩いていた。しかしだんだん目が暗闇に慣れてきたので普通に歩くことができるようにま で な っ た。

奥へと続く道は当然のことながら整備されていないので、所々悪路になっている。しかし俺たちはズンズン前に進んでいた。

「浩平君、ここ段差、あります」

「そこ、穴があります」

「あの木、前に智子おぼさんが、回し蹴りでなぎ倒しました」

何故なら咲希が先頭に立ち、俺をしっかりとナビゲートしてくれていたからだ。

つーかスゲえな、智子おぼさん……。

「咲希、けっこう田島に詳しいんだな」

俺は先頭に行く咲希の背中に向かって話す。

「はい、よく、来ますから……」

「へえ、何でまた？」

「それは、秘密です……」

「ああ、そっか」

「はい、そうです……」

咲希のすごい所は、これで会話が成立してしまうことだ。つーかこんな会話咲希との間ではもう日常茶飯事だし、もう違和感はなくなってしまうた。

「よく、来ますから……」

そういえば春に砂浜で会った時も、咲希は田島にいた。あの時田島で何をやっていたかは、結局聞けずじまいだったな。

俺は前を進む咲希の横に並んでみる。

「……………」

ケンが田島へ行こうと言った時、俺はのぞみのことを考えて正直迷っていた。

でもあの時、咲希が行くと言って席を立った時、俺は田島へ行くことを決めた。大袈裟かもしれないけれど、咲希が行くと言った時、俺も田島へ行かなきゃいけないんだって感じたのだ。

何故なら、行くと行った時咲希の見せた瞳の色が、あの時と同じだったから。

悲しみと苦しみを含んだ、どこまでも深い深い瞳だったから。

「なあ咲希、怖くないのか？」

俺は静かに訊ねる。

「怖く、ないです……」

咲希は表情を変えずに答える。咲希の視線は俺の方を向くことはなく、前に行ったきりだ。

「ここは私にとって、とても、とても大切な場所ですから……」

「大切な場所？」

その時、遠くの方で波が弾けるような音が聞こえた。

「えっ？」

俺は思わず立ち止まり周りを見回す。しかし辺りは真っ暗なので何も判らない。たださっきまで何も聞こえなかったのに、今はかすかに波音が聞こえる。

俺たちは島の中央部に向かって歩いていたはずなのに、何で波音が聞こえるんだ？

そういえばさっきから結構歩いているのに今だサボテンに到着し

ない。田島は小島だ。こんな時間がかかるわけ……、

「ごめんなさい、浩平君……」

すると咲希がこちらを向いていた。

「さ、咲希？　ここは……」

俺は訳が判らず咲希の方を見る。

「さ、咲希？」

俺は思わずドキッとした。

咲希が、咲希の瞳が……、あの時と同じだ。

今まで幾度となく見てきた、悲しみと苦しみが入り混じった、あの瞳。

「実は、少し、道を、外れさせてもらいました……」

「な、何だって？」

すると咲希は俺の元へ近付いてくる。

「ごめんなさい、浩平君。ちょっと、大事な話が、あるんです……」

その時、咲希の表情は、哀しく歪んだように見えた……。

Episode Summer 8 告白

「浩平君……」

俺と咲希は三十センチくらいの間隔で向かい合う。今まで暗いからよく判らなかったが、近くで見ると咲希の頬は薄っすらと紅潮していた。

「さ、咲希」

俺はドキドキしていた。

でもその想いはすぐに消え去る。だって咲希の瞳は、あの哀しみと苦しみが入り混じった深い瞳だったから……。

俺はそんな咲希の瞳の前に、どんな反応を示していいのか戸惑う。「ありがとう、ございます……」

咲希が口を開く。

「田島に、来てくれて……」

「え、な、何が？」

俺は咲希の言葉にますます戸惑う。

「あの時、浩平君が行くと言ってくれなければ、今日ここへ来ることは、なかったでしょう……」

「で、でも最初に田島へ行こうって言ったのはケンだせ？」
すると咲希は少し目を伏せる。

「あれは、私が村田君に提案していたんです……」

「咲希が？ 何でそんなこと……」

俺の問いかけに咲希はしばしの沈黙。

風の音はなく、遠くで波の音だけが聞こえる。

そして……、

咲希の瞳が再び俺を捉えた。

「浩平君、私は、あなたのことが、ずっと、気になっていました……」
「……」

このカンジ、何か前にもあったような気がする。

咲希の瞳に捉えられ、俺は何もできない、話せない……。

「最初は、私と同じ瞳をしているから、私と同じ、辛く、哀しい過去を経験したから……、そう思っていました……」

「……………」

「でも、それは次第に変わっていきました。あの、浩平君が映画に誘ってくれて、一緒に遊びに行ったあたりから、少しの間ですが私は、哀しみや辛さを忘れることができました。それは浩平君と一緒にいるからでした……」

咲希は溢れだすように言葉を紡ぐ。話し続ける咲希の瞳は潤んでいた。

「そして、私は以前とは違う理由で、浩平君のことが、気になり始めていました……。こんな私と一緒にいてくれる、気にかけてくれる。浩平君と一緒にいると私、普通の女の子でいられるって……」

そして俺は、咲希の頬の紅潮が一層増していることに気付いた。

「だから、だから……」

「さ、咲希……」

俺は絞りだすように、やっと咲希の名を呼ぶ。

「あ……」

そして俺は、咲希の身体を抱き寄せていた。

何故かは判らないけれど、そうしなきゃいけないと思った。

「こ、浩平君……」

咲希の鼓動を感じる……。

俺の中にいる咲希は、目を閉じて身体の全てを俺に預けてきていた。

「俺も同じだよ」

そして俺も、今まで胸の奥に閉まっていた。出すこともないだろうと諦めていた想いを溢れ出させる。

「あの時、俺が咲希を映画に誘った時、俺は咲希の知らない一面を知った。普通の女の子なら誰もが持っている、ごくありふれた可愛さを感じた。本当に、本当に楽しかった」

「浩平君……」

俺の言葉が恥ずかしいのか、咲希は俺の胸に顔をさらに埋める。咲希にも、俺の鼓動が伝わっているだろうか？ 俺は咲希の表情を窺う。咲希の頬は限りなく紅くなっている。目を閉じているからその瞳の色までは判らないが、その表情に苦しみや哀しみは一切感じない。

この時俺は咲希のことがとても可愛く、愛らしく、そして愛しく感じた。

こんな気持ちになるのは、初めてだ。

「咲希……」

俺の口から自然と咲希の名が出る。俺の声を聞いて咲希は目を開けて顔を上げる。

そして俺たちは見つめ合う。

「浩平君……」

そして咲希の瞳が俺に近づく。

「浩平君の気持ち、確かめてみても、いいですか？」

一瞬の間があり、咲希は瞳を閉じる。

そして……、

「好きです、浩平君」

咲希は再び俺の胸に顔を埋める。

俺は一瞬躊躇ってしまうが、自分の想いに嘘はつけない。これだけギュッと抱きしめてしまっただけは、俺の波打つ鼓動は隠せない。

俺は抱きしめる力を強める。

「俺も、咲希の気持ちを確かめてみたい」

もう遠くからの波音も聞こえない。

聞こえるのは俺たちの鼓動だけ……。

俺は告白する。

「俺も、咲希のことが……」

その時、

「うがっ！」

突然俺の身体に電気が走った。その電気は身体の中を隅々まで駆け巡ると、まるで粘着テープのように俺の身体をピッタリと締め付けた。

「ぐあっ……」

あまりの苦痛に俺は咲希を放し、その場に蹲る。全身は痺れ、締め付けられるような不快感が襲う。

俺は息を荒くする。心臓の動悸が激しくなったかと思えば、逆に心臓が停まってしまったと思うてしまう程小さくなってしまったりする。もう呼吸すらままならない。とても苦しい……。

そして何故か目もかすんでくる。あまりの苦痛に意識が遠のいてきていた。

（さ、咲希！……）

俺は薄れいく意識の中で、咲希の姿を必死に探す。

「……………」

すると咲希は俺のすぐ正面に立っていた。俺は咲希の表情を追う。そしてかすむ目で捉えた咲希の姿、それはただただ呆然と立ち尽くす姿であった。

そして咲希の口元が動く。

「どうして……。もう、もう大丈夫だと思ったのに。どうして、どうして……」

咲希の瞳から大粒の涙が流れる。

俺は感じる。今咲希の瞳は、あの哀しみと苦しみを滲ませる深い瞳だ。しかしそれは今まで俺が感じてきたものの比ではない。まるで咲希の何かが開放されたようで、全て感覚が薄らいでいく今の俺でも痛いくらい感じる事ができた。

「ダメなの、やっぱり、やっぱりダメなの……。また、大切な人を……っ！」

咲希は言い終わるのと同時にどこかへ走り去ってしまった。身体の動かない俺は、その姿を追うことができない。

そしてこの場には身動きのできない俺と、咲希の流した涙の痕だけが残された。

（くそっ、咲希！）

俺は必死にもがく。

全身は痺れ、目はかすみ、そして先程から自分の鼓動を感じない。俺は死ぬのだろうか？

否、死ぬという感じはしない。まるで俺という存在が消えてなくなってしまうような感覚だった。

俺は咲希を追いたい。咲希に会いたい！ 今追わなければ、全てが終わってしまうような気がする。

咲希はずっと哀しんで、苦しんで、ずっとずっと、泣いている。そんなこと、させない！

「咲希っ！」

俺は最後の力を振り絞るように、全身の神経を脳へと集中させ、「動け！」と末梢にまで命令という名の信号を送る。

「咲希、咲希っ！」

俺は体中の力を振り絞り、やっとの思いで立ち上がる。そして咲希の後を追いつづけた。

「はあ、はあ……」

俺は暗闇へと消えた咲希の姿を追いつづける。

途中何度も躓いて転び、身体の至る所に擦り傷を作った。でも痛みなんかまるで感じない。俺はただ、咲希を追うことに全神経を集中させていた。

「咲希、咲希！」

咲希に会いたい！

満身に動かない身体、俺はただこの感情だけで暗闇の中を彷徨いつづけていた。

そして彷徨い続けてどれくらい経った頃であろうか。

不意に目の前の暗闇が開けた……。

ザーッ、ザーッ……

そこには波の弾ける音。足元をよく見るとそこはゴツゴツとした岩場になっている。

どうやら俺は外海の磯場へと出てきてしまったようだ。ここは吾郎さんに危ないから近付いちゃダメだと言われており、釣り人も殆ど近寄らない場所だ。

「……………」

俺は夜空を見上げる。かすむ目でも光る星は何とか確認できる。

しかし今日は新月なので月は見えない。

俺は咲希を探すため、ゴツゴツした岩場を歩き始める。まだ身体が痺れているから足元はおぼつかない。こんな所で転んだら擦り傷どころじゃ済まないだろう……。

「咲希、咲希！」

俺は咲希の名を呼びながら歩く。

……………

……………

……………

「あれ？」

しばらく岩場を歩いていると、岩場の途切れている場所を見つけた。

さらに近付いてよく見てみると、途切れた岩場の先には砂浜があった。

「こんな所に砂浜なんてあったんだ……」

こんな所に砂浜があるなんて全然知らなかった。

俺は恐る恐る砂浜へ降り立つ。辺りを見回してみると、この砂浜は周囲を岩場に囲まれた小さな入り江になっていて、それ程広くはない。おそらく海からじゃこの砂浜は岩に隠れて見えないのだろう。

「……………」

俺は砂浜を一步一步踏みしめながら歩く。一步一步踏みしめる毎に、砂はジュワツという音を立て、靴には海水を含んだ砂がまとわりついてくる。もしかしたらこの砂浜は、干潮の時しか姿を現さないのかもしれない。

俺は重くなった靴を気にしながら、砂浜の奥へと進んでいく。もう真っ暗で一メートル先も見えない。

「？」

その時、俺は暗闇の向こうに何かの気配を感じた。

俺はとっさに咲希の名を呼ぶ。

「……………」

しかし何の返答もない。俺は恐る恐る気配のする方へ歩を進める。

「咲希？　咲希なのか？」

すると暗闇の中に一つ、何かの影が姿を見せる。

「さ、咲希！」

俺はその影が咲希のものであると確信し、早足で近付いた。

「えっ？」

俺はその影の前に立った。しかしそれは咲希の影ではなかった。

というか、それは人ではなかった。

「な、なんだよ、これ、社か？」

漆黒の砂浜に浮かび上がった影。その正体は古ぼけた小さな祠であった。もう何年も人が訪れていないのだろう、木でできた祠は殆ど朽ちて屋根にはフジツボがくっついていた。

「これって、もしかして……」

この時、俺は以前吾郎さんから聞いた『海美子姫』の話を思い出した。

これがおそらく、海美子姫の忘れられた祠なのだろう。

俺は屋根についたフジツボを取ってやろうと思い、屋根に触れてみようとした。

その時だった……。

.....

.....

.....

おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん……

.....

おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃん……

.....

俺の身体を「誰か」の感情が、声が、駆け巡った。

そして俺の中に、ある映像が流れる。

それは小さな女の子の姿……。

満面の笑みを見せる、少女の姿……。

おにいちゃん………

「ああ………」

何故、何故なんだ……、

何で、俺、この子のこと知ってんだ。

会ったこともないはずなのに、なんでこの子のこと、知っているんだ。

何でこの子は、俺のことを、おにいちゃんって呼ぶんだ。

なんで俺、こんなに泣いているんだ？

おにいちゃん

「あああーっ！」

俺はその場に崩れ去る。そして何かの堰が決壊したかのように、俺は泣くことしかできない。

おにいちゃん

俺の中に現れた一人の女の子。

俺が見た映像、

それは俺の過去。

俺の……俺の消された記憶だった……。

「ん……」

気が付くと、そこには古ぼけた白い天井と、今にも泣き出しそうなぞみの顔があった。

そして俺とのぞみの視線があった瞬間、のぞみの表情が一気に崩れた。

「こーへー、気が付いた……。こーへーっ！ 良かった、よかった！……」

表情の崩れたのぞみの瞳から、大粒の涙がボロボロと流れ落ちた。

「ここは、病院？……」

何となくではあるが、今の状況は判ってきた。

どうやら俺は今、町の診療所のベッドで横になっているようだ。た。

のぞみはベッド横に置かれたパイプ椅子に座り、俺を看病してくれていたのか……。

でも……、

あれ、ここに寝る前までの出来事が、いまいちはっきりしない。

確か俺は、みんなと田島へ渡って、そして咲希と……、

ズキッ！

「うっ！」

その時、俺はひどい頭痛に襲われた。俺は思わず側頭部を抑える。

「こーへー！ 大丈夫？」

俺は恐る恐る手を離す。どうやら頭痛は一瞬だけのようだ。

「ああ、大丈夫だ」

「そう、よかった……」

のぞみは安堵の表情を浮かべるが、まだ心配なのか目は笑っていない。

俺は手足が動くかどうか確かめるため、ベッドから身体を起こし

てみる。

「ダメだって起きちゃ！ 良くなるまで安静にしていなきゃ！」
すると慌てたのぞみに身体をベッドへ押し戻された。

「ああ、判った」

ここは素直に応じておく。ここに至るまでのぞみにかなり心配させてしまったようだから。

それに正直、身体はまだ完全に言うことを聞いてくれないみたいだ……。

「なああのぞみ、俺はいつからこんな状態だったんだ？」

「ここへ運ばれてきてから三日間……」

何てことだ……、俺は三日間眠り続けていたのか。

「そうか、田島へ渡ってから……」

ズキッ！

その時再び頭痛が俺を襲う。

「だ、大丈夫？」

のぞみが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「いや、何でもないよ、ちょっとビックリしただけだ……」

どうやら田島でのことを思い出そうとすると頭痛が走るようだ。

もしかしたら、軽い記憶喪失なのかもしれない。

「なああのぞみ、俺は一体？」

俺はのぞみに田島での出来事を訊ねてみる。

するとのぞみの表情は一気に曇る。

「あの時、みんな一緒に田島へ渡って肝試ししたじゃない？ 最後の私と美奈ちゃんペアがスタートして、その後三十分くらいでゴールしたらさ、ポケ村と隆君しか到着していなかったから、みんなビックリしちゃって……、それでみんな得手分けして捜したんだけど全然見つからなくて。その後、みんなで相談して、一旦家に戻って、こーへーたちが朝までに戻ってこなかったら警察に連絡しようって決めたの」

この時、のぞみの手は小刻みに震えていた。俺たちがいなくなっ

てしまったことが、とても怖かったのだろう。

「でも朝になってもこーへーたちは帰ってこなかったから、警察に連絡したの。警察だけじゃなく消防団の人たち、お父さんやお母さん、ボケ村や美奈ちゃん、隆君も一緒に捜してくれた」

けっこう大掛かりに捜されていたようだ。みんなに迷惑をかけてしまい、とても申し訳ない……。

「そしてお昼頃、もしかしたら海に落ちたかもしれないって話になって、警察の人がボートで島の周りを捜したの。そして外海の磯場で倒れているこーへーを見つけてくれたの」

ここでのぞみの言葉が詰まる。のぞみの瞳からは再び涙が流れ落ちる。

それで俺は病院へと搬送されて、今に至るというわけか……。よく見ると腕には絆創膏が何枚も貼られていた。

俺はのぞみの言葉を自分の記憶の断片と合わせてみる。

……………

そうだ……、

俺は肝試しをしていて、それで途中、道はずれて……、

そうだ！

あの時俺は、咲希と一緒にだったんだ。

あの時、急に身体の調子がおかしくなって、それで俺をおいていった咲希を追って、あの磯場へと行ったんだ。

そこで、俺は……、

ズキッ！

「うっ！」

「こ、こーへー！」

「だ、大丈夫だ……」

俺は再び激しい頭痛に襲われたが、のぞみには気丈にふるまった。これ以上心配させるわけにはいかない。

「な、なあのだ、咲希は？ 咲希はどうなったんだ？ あいつは俺と一緒にいたはずだ」

するとのぞみは俺から視線を外す。

まさか、咲希の身に何かあったのか？

「お、おい、のぞみ……」

「まだ、見つかっていないの……」

そ、そんな、バカな……。

「島では見つからなかった……。家にも行ったらしいけれど、反応がなかったらしいの」

「反応がない？」

誰もいないっていうのか？ それはおかしくないか。

だって……、

いや、待てよ……、

そういえば、咲希のことはよく知っているが、咲希の家族のことについて何も知らない。

「長谷川さん、独り暮らしらしいの。お母さんがいるそうなんだけれど、何でも事情があって他県で勤めているそうなの」

咲希はずっと独りで暮らしていたのか。全然知らなかった。

「だから長谷川さんは今も搜索中。田島は今も草の根一本の間まで調べられているわ」

まだ一人見つかっていないんだ。咲希がまだ見つかっていない。

どこに行っただ、咲希！

「あとね、こーへーを捜している時、ボケ村まで迷子になったの。

その時ボケ村が偶然西側の崖で洞穴を見つけたらしいの。もしかしたらここにいるかもしれないって洞穴内へ入ったら、そこで昔の銃や爆弾を発見しちゃったの」

「銃や爆弾？」

おいおい……。

「警察が言うには旧日本軍のものらしいって。ここら辺って昔軍の基地とかあったから。ほら、特攻隊とか知ってるでしょ？」

「そうなんだ。そりゃ大変だな」

俺が言うのも何だけど。

「うん、今田島は大騒ぎだよ。警察の他に自衛隊まで来てる。当分田島へは行けそうにないよ」

のぞみは少し苦笑いを浮かべる。もうのぞみの瞳から涙が流れることはなくなったが、頬はまだ湿り気を帯びていた。

「でもよかった、こーへーが無事で……」

「悪い、心配かけちゃって」

俺は横になりながらではあるが、のぞみに向かって頭を下げる。

「ううん、私たちのことは気にしないでいいよ。こーへーは早く元気になることだけ考えてくれていたらいから」

のぞみは優しい口調で俺に告げる。

「それじゃ、私お父さんとお母さんに、こーへーの意識が戻ったって言うてくるから、ちょっと待っててね！」

のぞみはそう告げると、今まで座っていたパイプ椅子から立ち上がる。

そして振り向くと思いきや、俺の手を握ってくる。

「もう、どこにもいっちゃだよ……」

のぞみは笑顔でそう告げ、部屋を出て行った。

久しぶりを見る、望みの笑顔だった。

そう思えるくらい、長い間眠っていたような気がした。

俺が目を覚ましてから、手足の痺れと頭痛が取れるまで十日程かった。俺の症状は全くの原因不明、街の中央病院で精密検査を受けても原因は判らず、担当した医者はただただ首を捻っていた。

そして身体の調子がほぼ戻ってから数日後、俺は久しぶりに外を散歩してみた。出かける際の際のぞみが一緒について行こうかと言ってきたが、俺は何となく一人で歩きたかったので、のぞみの誘いを丁重に断った。

俺は海外沿いの道を学校方面へと歩く。向こうに見える田島には未だ自衛隊の船舶が停泊している。新聞によると田島にはかなりの規模の秘密武器庫があったようで、自衛隊による調査と処理が続い

ていた。こんな状態だから釣り客は殆ど姿を見せない。しかし變わりに報道関係者が大挙してやって来たため、釣り宿「ゆかり」は宿泊客で連日賑わっていた。

「……………」

海からの風が俺の髪の毛を揺らす。今日の風はいつもと違う。何でも台風が近付いてきているらしい。しかしいくら風が強くても、南国の太陽を和らげるまでにはいかない。

俺は刺すような陽射しの中を歩き続ける。車は殆ど通らないから、聞こえるのは波の音とセミの声。

セミの大合唱の中を俺は歩き続ける。暑くて目の前が黄色くなってきたそうなのに、俺は歩き続けた。

俺は、そうしかかった。

でないと、自分自身が壊れてしまいそうだった…………。

咲希…………

あの時以来、俺はずっと咲希のことばかり考えている。

好きだから…………、

行方不明だから…………、

でも、俺が一番気になっていることは…………、

あの時…………俺が自分の想いを伝えようとした時、俺の身体はおかしくなった。

そして咲希が言い残していた言葉、

「また…………大切な人を…………」

ボンヤリとした記憶の中で、俺はこの時の言葉を鮮明に覚えている。あの咲希の瞳…………、あの苦しみや哀しみが入り混じった瞳が、あの時決壊した。

俺は咲希を、救いたい…………。

苦しみと哀しみの渦に飲み込まれていく咲希の瞳を救いたい。

同じ瞳を、同じ哀しい過去を持つ者同士、過去を共有し一緒に歩

いていこう、前に進んで行こうと、俺たちは約束したのだから。

俺はいつの間にか咲希の影を探していた……。

学校、駅前、商店街、砂浜、俺は咲希と出会った場所を順番に歩いていく。

咲希に会いたい！

ただそれだけの想いで、俺は夏の太陽の下を歩く。

そして、俺は最後の場所に辿り着く。そこは最も俺が咲希と出会った場所。咲希の影が、匂いが一番強い場所……。

もしかしたら、俺は無意識のうちにここを最後の場所にしたのかもしれない。

その場所とは、町と田島を一望できる展望台。

ここは俺と咲希の秘密の場所。俺は何かに誘われるように、展望台の中へ足を踏み入れた。

俺は展望台の手すりにもたれかかる。俺はいつもこうやってベンチに座る咲希を見下ろし、二人でどうでもいいような話を交わす。そして特別な話をする時は咲希も俺の隣で手すりにもたれかかる。俺が体勢を変えると、咲希も同じように体勢を変える。遠くの海を眺め、どちらかが話し、どちらかが泣いた。尤も、泣くのは圧倒的に咲希の方。泣いている時の咲希はとても小さく見えた。俺はそんな咲希をいつも抱きしめる。その時は今みたいな感情がなかったから、仲間を支え励ますという感じだった。俺は咲希の苦しみや哀しみを共有するために、咲希へ寄り添った。

でも今は違う。

俺は咲希のことが好きだ。咲希を守ってやりたい。咲希を苦しみや哀しみから解き放ってやりたい。

そして二人で一緒に、どこまでも歩いていきたい……。

咲希、今どこににいるんだ？ まさか死んだなんてことはないよね？ もしそうだったなら、俺はお前を許さないぞ……。

俺たちは一緒に前に進んで行くって約束したのだから……。

もし今咲希に会えたなら、俺はお前を思いっきり抱きしめる。どこにも行かせない。

咲希……

その時、風が吹いた。

暑さを感じない。セミの声も聞こえない。

……………

俺は全神経を集中させていた。感情が込み上げてくるのを必死に耐えた。理性の堤防が決壊してしまいそうになるのを、必死に耐えた。

「……………」

俺は背中の方こうに、気配を感じていた。

それはとても懐かしくて、とても愛しい……、

俺はその気配の主を、知っていた。

「……………」

「……………」

「待ちましたか？……」

「いや、今、来たところだ……」

そして俺は振り向く。

「浩平君……」

そこには、涙目で……今にも壊れて無くなってしまいそうな……、

そして笑顔の咲希がいた。

「咲希！」

「浩平君！」

俺と咲希……、俺たちは互いの言葉を確かめる前に、互いを抱きしめ合った。

もう、どこにも行かない。

もう、どこへとやらないと……。

「全て、お話しなければ、ならないようですね……。私のこと、田島でのこと、浩平君の身体のこと……」

展望台の手すりにもたれかかった咲希は、そう切り出してきた。

「でも、その前に……」

咲希は足元に視線を落とす。俺はその視線の先を無意識に追った。そこにあるのは、泥で薄汚れた咲希の白い靴。

それはまるで、何十年もの間放浪の旅をしてきた旅人のような靴であった。

「私の昔話を、聞いてもらえませんか？」

俺には咲希の真意は判らない。

でも、俺は咲希の話を聞きたい。

俺は、全てを知りたい。

咲希は視線を落としたまま話し始める。

「昔、今から十年程前ですが……この町に一人の男の子と、一人の女の子がいました……。二人は幼馴染みで、海で泳いだり、虫を捕ったり、よく一緒になって遊んでいました……」

咲希は淡々と言葉を紡いでいく。俺はただ黙って聞くことにする。

「そんなある日、男の子が明け方に女の子の家までやってきました……。いきなりやって来たので、女の子はとても驚きました……。

そんな女の子の姿を見て、男の子はニコツと笑いこう言いました……」

——いまから、すごいのみせてやるから、いっしょにいこう！——

「そして女の子は家をこっそり抜け出し、男の子のあとをついていきました……。そしてかなり歩いた後、二人はある場所に辿り着きました……。そこはゴツゴツとした岩場の中に、ポツンとある小さ

な砂浜でした……」

ドクン……

俺は思わず自分の胸を押さえる。

俺の鼓動が速くなってる？

何だ？ 俺は咲希の話に何を感じているんだ？

言葉では形容できないような感覚が、俺の胸を締め付ける……。

咲希はそんな俺に目もくれず、話を続ける。

「男の子は立ち止まると、そこには小さな古い祠がありました……。そして、男のは言いました……」

――ほら、たいようがのぼってきたぞ――

「すると、その古い祠が、キラキラと光りはじめました……。何故かは判らないけれど、太陽の光を受けることにより、その祠はとても綺麗に輝きました……」

ポタ……ポタ……

咲希の汚れた白い靴に、雫が落ちる。

咲希、泣いているのか？

「女の子は、その輝く祠にふれ、とても感動しました……。そしてその時、女の子は男の子に、今までにない感情を、初めて抱きました……」

「さ、咲希……」

俺はいたたまれなくなり、思わず咲希の名を呼ぶ。

しかし、俺の声は咲希には届かないのか……。

「それは、初恋でした……」

咲希は目を瞑る。その時今まで雫として滴っていたものが、一本の細い糸となって頬をつたう……。

咲希……。

「女の子は感動のあまり、満面の笑みで男の子の方へ振り向きまして……。すると、そこには男の子の姿はありませんでした……。ま

るで最初から誰もそこにいなかったかのように、消えて無くなっていました……」

咲希、もしかして、それが、お前の哀しみなのか……。

「女の子は泣きながら、男の子を必死に捜しました……。でも、男の子は、どこにもいませんでした……。女の子はずっと泣いていました。ずっとずっと、泣き続けていました……」

ここで咲希の言葉が切れる。しばらく沈黙が流れ、俺が口を開こうとした時……、

「その時、女の子は、あるチカラを身につけてしまったのです……」
咲希は言葉と同時に、その瞳を開く。

「その女の子は、神様にふれてしまったことにより、奇跡を起こすチカラを身につけてしまった……」

瞳は開かれたが、その瞳は、俺のことは見ていない。

「奇跡を起こす、チカラ？」

「女の子の起こすチカラの奇跡……。それは、女の子が好きなった男の子の存在を、永遠なものにするといううものでした……。それは女の子にとって、とても苦痛で、不幸なチカラでした……」

俺は再び胸を押さえる。

また、また胸が締め付けられる……。

「女の子は、泣き続けました……。年月を重ね、成長していくのに、ずっと、ずっと……」

「……………」

ここで咲希の言葉が終わり、そして沈黙が流れる……。

聞こえるのは、風の音とセミの声だけ……。

俺は咲希の瞳を追う。

「咲希、その昔話の女の子って……」
すると咲希の瞳が俺の顔を捉える。

「はい……」

咲希はそう、一言だけ俺に告げる。その一言が、俺の疑問全てに応えてくれていた。

「信じられないですか……」

俺は目を瞑り、首を振る。

「普通はな。でも俺は一度存在が消えかけたから、信じるよ」
すると咲希は再び視線を落とす。でも俺は視線を切らない。

「だから、俺はこんな身体に？」

すると咲希は小さく頷く。

「なあ、田島のどこかに奉られている海美子姫の祠って？」

「はい……。浩平君もご覧になったでしょう……」

あれが……。あれが海美子姫の祠……。本当にあったんだ。

「もしかして、十年前に行方不明になった男の子ってのは……」
すると咲希の瞳が潤む。

「そうです、原因は私です……。私が存在を消してしまったから、
いなくなってしまったんです……」

咲希はまるで自分自身を咎めているような様子。咲希の身体は今
にも崩れてしまいそうだった。

俺は一步咲希へと近付く。

すると咲希は俺から離れようとした。

「咲希……」

咲希の哀しみと苦しみに満ちた瞳が、俺を見つめる。

「私が、好きになってしまったばかりに……」

次の瞬間、咲希の身体が崩れる。俺はとっさに咲希の身体を支える。
咲希のその身体は、まるで全身の骨がなくなってしまったかのような脆さ。
このまま俺が咲希の身体を受け止めていなかったら、咲希は凍った花が地面へ落ちるように、バラバラに壊れていたのかもしれない。

「うう、うう……」

俺の腕の中、咲希の小さな鳴咽が聞こえる。俺はただ小さく脆く
なってしまった咲希の身体をただ支えてやることしかできなかった。

「それからでした……。私がああ夢を見るようになったのは……」

咲希が見るようになった夢、それって確か……、

「その夢って前に話してたヤツだよな？」

俺の言葉に咲希は一瞬こちらを見て、そして頷く。

「そうです。私が見ていた夢に出てきた人、それは海美子姫です……」

海美子姫……。ここで繋がってくるわけか。

ということは、咲希も海美子姫の伝説を聞いたことがあるということか。

「浩平君も、知っていますよね？」

俺は咲希の瞳をしっかりと見据え、頷く。

「ならば、魔女の奇跡のことも、知っていますよね？」

「ああ、知っている」

すると咲希は哀しげに目を細める。

「実は、一般的に伝わっている魔女の奇跡と、本当の魔女の奇跡は、一つ違う点があるのです……」

「違う点？」

「はい……。生贄となるはずだった女を守った男性、実は死んでいなかったのです……」

その時、咲希の瞳の色が濁る。もう咲希には抱えきれない哀しみの量だ……。

「村人に追われ、田島へ逃げのびた時、男も女も重傷を負っていました……。そこで二人は来世での幸せを誓い合いました……。すると、男はまるで空気に融け込むかのように、消えてなくなってしまったのです……」

淡々と話し続ける咲希。

俺は話し続ける咲希の瞳を追うが、もうどこを掴んでいいのか判らない。それ程、咲希の瞳は哀しみに濁ってしまっている。

「それが、巫女の呪い……。二人を幸せにしないがため、巫女が女にかけて奇跡という名の呪い……」

俺は再び咲希の肩を抱く。

「それが本当の海美子姫の伝説ってわけか」

「はい……。そしてこれは、祠に宿った女の意志が、私に宿ってしまったために、起こってしまったのです……」

咲希は俺の腕からスルリと抜け出し、そして展望台の手すりにもたれかかる。

「浩平君……、私は昔、大切な人を、失った過去があります……」

「ああ……」

「今話したことが、その全てです……」

そして咲希の身体が小刻みに震え出す。俺は慌てて咲希へと近づく。

「私は、好きになった人の存在を、消してしまう……。最初はそんなつもりなんて、なかった……」

咲希の言葉は俺の方を向いていない。自分自身へ向かって放っていた。

「でも、私は、好きになってしまった……。浩平君こと……。ダメだと思っていたのに……」

そして咲希の瞳が決壊した。

大粒の涙が溢れ出す。

「咲希……」

「だから、だから、もう！……」

「咲希！」

俺は咲希の名を叫ぶ。

俺は怖かった。

咲希がこれから、俺に何を言おうとしてるか、判ってしまったから。

「ありがとうございます……。でも、でも……。もう仕方ないので……。私が、浩平君のこと、好きになってしまった、ばっかりに……」

そうだ、咲希がここへ現れた理由……。それは俺への別れを告げるため……。

しかし咲希の言葉は途切れ途切れで聞き取ることができない。涙が溢れて言葉にならないのか、

それとも……。

俺はどうする？

俺は、俺は……

俺は！

「咲希」

俺は咲希の身体を抱きしめる。

「あ……、だ、ダメです、浩平君……」

咲希は俺の腕を振り払おうとする。

でも、俺は放さない。

もう、放さない。

「もうダメなんです！ 私は浩平君を、好きになってしまいました……。だから、だから……」

咲希は必死に抵抗する。

俺のシャツはいつの間にか湿っていた。俺の腕も、俺の靴も、咲希の瞳から溢れ出る涙で濡れていた。

「咲希……」

俺は咲希の名を呼ぶ。それしか言わない、言えない。

俺は咲希の身体をさらに強く抱きしめる。

「あ……」

俺のチカラに、咲希の動きが停まる。

そして咲希は、俺に身体を全てあずけてきた。

「こう……へい……くん」

俺には見えないが、咲希はもうこれでもかというくらい、泣いていた。次第に湿り気を増していくシャツの感触が、それを俺に教えてくれていた。

「咲希、言いたいことは判るよ。でも、でも俺は……」

俺は……、

「俺は、咲希が、好きだ」

咲希は俺の胸の中から顔を出す。泣いて泣いてその瞳は真っ赤に染まっていた。

「咲希は好きになった人の存在を消してしまう奇跡を、身につけてしまったのかもしれない。でも、でも……」

俺は弱々しくなった咲希の瞳を捉える。

「でも……その奇跡があったからこそ、俺たちは出会えた。咲希と出会えた、咲希と話ができた、咲希と一緒に歩めた」

「こ、浩平君……」

「だから俺は、咲希のことを、好きになることができたんだ。それは奇跡がここまで導いてくれた。俺はそう思っている……」

すると咲希の瞳から再び涙が溢れ出す。

でもそれは、哀しみを含んだものではない。

真っ赤な瞳から俺が感じたのは、目一杯の幸せだった。

「だから、俺と一緒にいてくれよ。一緒に前に進んでいくって、約束しただろ？」

俺は笑ってみせる。咲希と幸せを分かち合うために。

「俺は、咲希じゃないと、ダメなんだよ」

「浩平君！」

そして咲希も笑顔になってくれた。

俺と咲希、笑顔の俺たちは互いの笑顔を見つめ合う。そして互いの瞳を見つめ合う。

「浩平君……わたしも、わたしも……」

「咲希……」

「私も、浩平君じゃないと、ダメです。ずっと、ずっと、一緒にいたいです」

気が付くと、俺も涙を流していた。咲希に負けなくらい、俺もいっぱい……。

それは咲希と一緒にいたいという、俺の想いがそうさせていた。

「ずっと、ずっと一緒にいてください……」

「咲希……」

俺は咲希を少しだけ身体から引き離す。

何故か？

それは……

「あ……」

……………

風の強い展望台で、俺と咲希は初めて唇を重ねた。

俺の中で、咲希と離れたくない、ずっと一緒にいたいという気持ちが爆発していた。

そしてお互い唇を離す。

「好きです、浩平君」

そして咲希は再び俺の胸の中に身体をあずける。まるで俺と一体化でもしそうなくらいに。

そして、おれも、だきしめる……

「えっ？」

とつぜん、咲希がこえをあげた。

「う、嘘？ そんな……」

おどろく咲希のおが、みえる。おれは、もうわらうしかない。どうやら、もう、おわりのようだ。

からだに、かんかくがない。

でも、おれは、まだ、きえない。

咲希といっしょにいたいという、おれの、つよいきもちが、じか
んを、あたえてくれているようだ。

「そ、そんな、嫌……。浩平君、ダメ、ダメよ！」

だめだ、もう、こえが、でない。

「お願い行かないで！ 私と一緒にいてくれるって言ったじゃない
！ 私のこと、好きって言うてくれたじゃない！」

しだいに、おれのからだが、すきとおり、くうきのなかに、とけ
こんでいくような、きがする。

「私も浩平君と一緒にいたい！ だからお願い、行かないで！」

咲希

「え……」

おれは、すべてのしんけいを、しゅうちゅうさせる。

そして、みぎうでで咲希のなみだをふき、

ふたたび、おれは、咲希と、キスをした。

このとき、おれたちは、めをあけていた。

そして、おれは……

「こ、こうへいくん……」

そして、おれは……、

わらった……。

そして

おれは

きえた……

Monologue: My Assertion

池澤のぞみ

「今日、のぞみちゃんの従兄が来るからね」

私……池澤のぞみがこーへーと初めて会ったのは、今から八年前。初めて会う当日の朝、大好きなオレンジジュースを飲んでいる時、お母さんから教えられた。

私に同じ年の従兄がいるのは知っていたが、それまで会ったことも電話で話したこともない。何でもこーへーのお母さんは色々と問題を起こして一族から嫌われているらしく、私たちとは疎遠となっていた。でも今回、その色々な問題に一応のケジメがついたとかで、お母さんがこーへーたちを家へと招くことにしたそうなのだ。

従兄が来る……。それを聞いた私はとてもワクワクしていた。私は昔から活発な少女で、誰とでも打ち解けることができ、小学一年生になった時は本気で友達百人作ろうとしていた。

従兄ってどんな子なんだろう？

背は私より高い？ 痩せてるのかな？ 好きな食べ物？ 趣味・

特技は？ 好きな野球チームは？ 好きなタレントは？……………

知りたいこと、聞きたいことが、いっぱいある。

お母さんから話を聞いてから、私はこーへーたちが来るのを玄関ですつと待った。途中雨が降ってきて、お母さんから家の中で待つように言われたけれど、私はお気に入りピンクの傘をさして、ひたすら外で待ち続けた。

そしてお昼過ぎ、海岸通の向こうから一台のタクシーがこちらへとやって来て、そのタクシーは私の前で停まる。そしてドアが開くと中からお母さんと顔のよく似た女の人と、一人の男の子が出てきた。

すると私の後ろからお母さんの声が聞こえてきた。お母さんは外に出てきて二人を笑顔で出迎える。

この男の子がこーへーくん……。

私はドキドキしながらお母さんの横へと並び、お母さんのような笑顔を作る。

「……………」

こーへーと目が合う。

これが私とこーへー、初めての出会い。この時はまだお互いのことを全然知らない。

でも私はこーへーと仲良くなれる気がしていた。理由はない。私の直感だ。そうやって私は今までたくさんの友達を作ってきた。

「私、のぞみ。よろしくね!」

私はこーへーの方を見て、笑顔であいさつする。

「……………」

するとこーへーは、こーへーのお母さんの後ろに隠れてしまった。

「……………」

そしてこーへーは私のことをじっと見つめる。その表情は、年の割りに幼いものだった。

恥かしがり屋さん

それが私のこーへーに対する第一印象……。

その後、お母さんたちは玄関から居間へと場所を移す。居間ではお父さんとお母さん、そしておじいちゃんがこーへーたちを出迎えた。

私は廊下からお姉ちゃんと一緒に居間の様子を覗き込んだ。するとこーへーのお母さんが色々話をしているようだった。

その時、横でちょこんと座っているこーへーと何度か目が合う。

私が笑うとこーへーは目をそらした。

「あなたたち、こっちへいらっしやい」

いつから気付いていたのか、お母さんが私とお姉ちゃんを呼ぶ。

私とお姉ちゃんはエヘへと笑いながら、居間へと入っていった。

そして私たちはこーへーたちにあいさつをする。お姉ちゃんは初めてで、私は二回目。今度はきちんとお辞儀をしてあいさつをした。「ほら、アンタも挨拶なさい」

こーへーのお母さんが、こーへーの肩を叩く。

するとこーへーは少しの間、口をもごもごさせた。

「こ、こんにちは……、のじま、こうへいです……」

それが初めて聞くこーへーの声。

声も、ちょっと幼い感じだった。

あいさつが終わると、私はお姉ちゃんに促され居間を出て行く。

こーへーも一緒と思ったけれど、こーへーはお母さんの傍を離れようとしなかった。

「浩平君、恥かしがり屋さんなのね」

お母さんが笑いながらそう言っていた。

お姉ちゃんはそのまま部屋へと戻っていったが、私はどうしてもこーへーのことが気になり、少し時間をおいてから再び居間へと向かった。

すると今まで開いていた居間の扉は、キッチリと閉められていた。何故か開けることを躊躇ってしまった私は、扉に近付き聞き耳を立てる。

すると、かすかだが大人の話し声が聞こえた。

「そ、そう。そんなことが……」

「ええ、新聞にも載っちゃって……」

「足、大丈夫なのか?……」

「……普通に生活するくらいなら……」

「葬儀とかは大丈夫だったのか?……」

「ええ、なんとか……。ごめんなさい、言い出せなくて……」

「私たちは……、姉さんのこと心配してた……」

「……、でも私は、浩平をあんな風にしてしまった……」

「気の毒に……」

……

私はジッと聞き耳を立てる。

しかし聞こえてくる会話の内容は、意味が全く判らない。まさに大人の話のようだった。

「のぞみ、こんな所で何してる？」

突然後ろから声がして慌てて振り向くと、そこにはおじいちゃんが立っていた。

そして……、

「……………」

そのおじいちゃんの後ろには、こーへーが立っていた。

「どうしたんじゃ？」

私の表情を見て、おじいちゃんは顔をしかめる。

この時私の表情は、おそらく驚きと喜びが混ざり合った、非常に表現の難しいものだったのだろう。

「え、えーと、こ、こーへい君を捜していたの」

とりあえずその場を取り繕う。

「浩平君を？」

するとこーへーはおじいちゃんの後ろに隠れてしまう。今日何度もこのリアクションをされているので、ちよつと複雑……。

「のぞみ、これから浩平君と一緒に、おじいちゃんの離れへ来るか？」

「う、うん！ 行く！」

渡りに船とはまさにこのこと。

私たちはおじいちゃんの離れへと向かう。おじいちゃんの離れは裏庭にあるため、一旦玄関から外へ出ないといけない。私たちは雨を避けながら外へ出る。

「ねえ、こーへい君」

その途中、私はこーへーと打ち解けようとするため、色々と話しかけてみた。

「今、何年生？」

最初は戸惑っていたが、そのうちにこーへーは口をもごもごさせる。

「さ、三年生……」

私と一緒に。

「好きな食べ物？」

「……たいやき……」

「あー、美味しいよねー。私はカレーが好きかな。特にお母さんが作ったものが！」

「……」

「好きなタレントとかいる？」

「………いけの めだか……」

………誰、それ？

「ご、ごめん。ちよつとわかんないかな……。ほら、この辺で田舎だからTVもあんまりやっていないし、ハハ……」

「……」

「……」

こういう感じが続き、あまり会話として成立しなかった。「活発で誰とでも友達になれる子」として売っていた私に、この状況はちよつとショックだった。

こんなはずじゃないのに……。

その語、私たちはおじいちゃんの部屋で、おじいちゃんの昔話を聞いた。私は小さい頃からずっと聞かされていた話だから特に感動はなかったが、意外にもこーへーは興味津々な様子。そしてこーへーはおじいちゃんの持っている昔話の本を楽しそうに読み始めた。

「浩平君は本が好きなんだな。ワハハハ……」

おじいちゃんは嬉しそうに笑っていたが、私は反対に複雑な気分。私のこーへーに対する懸命な努力が、一冊の本に負けてしまったかと思うと、何だか悔しかった。

「……………、ふんふん……………」

こーへーは、時折判らない字をおじいちゃんに聞きながら本を読み続ける。

そうしているとお母さんと、こーへーのお母さんが離れへとやってきた。

もうこーへーは帰ってしまうらしい。お母さんはゆっくりしていけばと言っていたが、こーへーのお母さんの仕事があるらしく、今日中に帰らなければいけないらしい。

そして帰りのタクシーが家の前に到着し、こーへーたちは行ってしまった。

去り際、私とこーへーの視線が合った。私が笑いかけると、こーへーも少しだけ口元を緩めてくれた、……………ように見えた。

私はだんだん小さくなっていくタクシーの後姿を、雨の中ずっとずっと見送った。

また、会えるよね？

私はタクシーに乗るこーへーに向かって、そんなテレパシーを送っていた。

これが、私とこーへーの出会い。

そして、私がこーへーと出会ってから、八年の月日が流れた……………。

その間、私とこーへーには色々なことがあった。

あれ以来、こーへーは何度も池澤家を訪れた。その度に私は積極的にこーへーへのアプローチを続けていった。そして次第にこーへーの方からも話しかけてきたりしてくれるようになっていった。

そして一緒に海で泳いだり、砂浜で花火したり、商店街にお買い

物へ行ったり、隣町まで映画を観にいたり……。

中学へ進学する頃には従兄妹というよりも、仲の良い兄妹という感じになった。出会った頃は私の方が年上だったのに、いつの間にかこーへーの方が年上みたいになっていた。

でも一度だけ、こーへーが幼く見えたことがあった。中学の時、おじいちゃんが死んだ時だ。この時は私だけでなく家族みんなが泣いた。そしてこーへーは私たちの何倍も、まるでこの世の終わりのみたいに人目をはばからず泣いた。もう声変わりを済ませた年頃の中学生男子が、顔を涙と鼻水でクシャクシャにしていた。この時のこーへーは、まるで大好きな人と離れ離れになった小さな男の子のようだった。

それからこーへーは池澤家にぱったりとこなくなった。お母さんは受験で忙しいと言っていたが、高校に進学してもこーへーは来るどころか電話のひとつも寄こしてこなかった。この頃だろうか、こーへーのお母さんが問題を起こしたという噂を聞いたのは。お母さんの親類の人が来て、そのようなことを話していた。

私はこーへーのことが気になっていた。あの……私の従兄は今どこで何をしているのだろう……。いつか気になってこっちから電話をかけてみるが、いつの間にか電話番号が変わっていた。手紙を出すように住所が判らない。まさに音信普通であった。

高校一年の夏、私は遅い初恋をした。相手は同じ高校の同じクラスで、バスケット部の背の高い男子だった。最初はちょっと気になるくらいだったけれど、周りに焚きつけられて思い切って告白をした。

結果は……、惨敗だった。

ただフラれるだけならそれはそれでよかった。でも……、

「何か池澤ってさ、普通に男子としゃべってるよな。俺そういうの嫌なんだ。そういう軽い奴、嫌なんだよ」

ただフラれるだけじゃなく、私の人格を全否定されてしまったのだ。

私はひどく落ち込んだ。そして泣いた……。まるで世界の終わりのみたいに、あの時、おじいちゃんが死んだ時のこーへーみたいにならずとずっと、泣き続けた。

私は今の私の性格が大好きだった。誰とでも仲良くなれる私が、大好きだった。だからショックだった。そして一気に自分のことが大嫌いになった。本当に、世界が壊れてなくなってしまえばいいとさえ思った。

自分を全否定され、自分のことが嫌いになった。だからフラれたショックはずっと尾を引いていた。周りの友達にはずっと隠していたけれど、本当は辛い、かなりツライ……。私が誰かと話すことにより、誰かが私のことを嫌いになっていく……。それがとても辛かった。

そして高校一年の三学期の終業式が終わった。つまり高校一年が終わったということだ。成績は一年を通してクラスのトップを維持してきた。

学校が終わりに家に戻ると、お母さんがどこかと電話をしていた。その隣には珍しくお父さんもいた。いつもこの時間帯は船に乗っているはずなのに……。

そして程なくして、それがただの電話でないことを私は感じた。お母さんは目に涙を浮かべ、お父さんはとても険しい表情だった。それらはどちらも初めて見る光景だった。

そしてお母さんは受話器を置いた。

「あら、のぞみ……」

「お母さん、どうしたの？」

するとお母さんとお父さんは互いの顔を見合わせた。

この時、私はまた誰か亡くなったのかと思った。

でも、違った。

そしてお母さんが口を開いた。

「のぞみ、いいニュースがあるわよ」

「え？ いいニュース？」

するとお母さんは涙目で笑顔を見せた。

「実は四月から、この家に新しい家族が増えるの」

「ええっ？」

「浩平君が、四月から池澤家の一員になるのよ」

その時、私の中で何かが動いた。動き始めた……。

嫌なこと、悲しいことが続いて停滞していた私が、再び動き始めようとしていた。

そしてその日が……こーへーが池澤家の一員になる日がきた。ずっと心待ちにしていた日だ。

前日私はこーへーの部屋になるおじいちゃんの離れを掃除した。いらない物を押し込んで以来誰も足を踏み入れなかった開かずの間。私はゴミやホコリや得体の知れない虫と格闘し、何とか片付けることに成功した。

「やっとこれで、こーへーも安心してこの家で生活できる！」

その時の私は何とも言いようのない達成感を感じていた。

そしてその気持ちを抱きかかえたまま、その場でパタッと眠りについてしまった。何となく、今日はこの部屋にいたかったから。

そして私は夢を見た。それはこーへーと一緒に学校へ行く夢だった。とてもワクワクする夢だった。

しかしその夢を見過ぎてしまい、起きたらお昼の三時。こーへー

が駅に到着する時間だ。私はシャワーも浴びずに服も着替えず、そのまま家を飛び出した。

私は駅まで全力疾走で走った。寝坊してしまったからという理由もある。でもそれ以上に早く高校生になったこーへーに会いたかった。

そして遠くに駅が見えてきた。すると駅のロータリーにある桜の木の下に、大きなカバンを肩にかけた男の子がたっていた。

確かめることなく、考えることなく、私は叫んだ。

「こーへーっ！」

するとその男の子は私の方を向いた。そして私に向かって右手を上げて合図した。

そう、そこにいたのは高校生に成長したこーへーだった。最後に会った時よりも格段に大人っぽく、そして男ぽくなっていた。でも私の知っているこーへーの面影もかすかに残っていた。

家までの帰り道、私たちはくだらない話をしていて。からかわれてちょっと恥ずかしかったりしたけれど、久しぶりにこーへーとこんな会話ができて、とても楽しくて嬉しかった。

そしてこの時私の胸の中で、何かが大きく膨らんで、そしてポンと音を立てて弾けていた……。

その日の夜、私はこれから始まるこーへーとの生活が楽しくてなかなか眠れなかった。楽しくて、嬉しくてどうしようもなかった。だから朝、トイレで寝てしまっただけでかなり恥ずかしい思いをしてしまった。でもそんなことはちっぽけなことで、こーへーとの通学にとってもワクワクしていた。

……………

でも、でも……、こーへーは違った。学校に着くまでは、確かに

私のことをずっと見ていてくれた。でも学校に着いてから始業式の間、教室に入ってから……、こーへーは私のことは気にしてくれていなかった。話しかけてはきてくれるけれど、私には全然気が向いていなかった。

もしからしたらこーへーはそんなこと意識していなかったのかもしれない。でも私には判った。こーへーは明らかに私じゃない何かを気にしていた。

そしてその正体が、翌日の帰りの校門で判った。その正体とは同じクラスの長谷川咲希さんだった。

実は長谷川さんとは一年のときも同じクラスだった。私は誰とも気軽に話す性格だから、最初は長谷川さんにも積極的に話しかけていった。

でも長谷川さんは殆ど応えてくれなかった。それどころか、私に向かつて「構わないで」と視線を送ってくる始末だった。次第に私は彼女と距離を置くようになってしまった。それは私だけじゃなく、他のクラスメイトも同じであった。最初はその容姿とミステリアス雰囲気で男子の間では密かに人気があったが、いつの間にか誰も長谷川さんのことを話題にはしなくなっていた。

だからこーへーの視線が長谷川さんに向いていることを知った時、とてもビックリした。そして何故かホッとした。こーへーも他の男子と同じようにシカトされて終わるんだって。他の女子が気になるより、ずっと安全だと思った。

でもそれは違った……。あの長谷川さんはこーへーに視線を合わせた。こーへーと長谷川さんは、惹かれ合っている。私は校門で出会ったあの時、そう感じていた。

校門でのあの一件以来、こーへーは変わってしまった。こーへーは目の前の誰かを見たり話しているのではなく、目に見えない何かをずっと追い求めているようだった。

私は校門でのことをお母さんに話した。するとお母さんは……、

「そう……………」

いつも笑顔のお母さんの表情が、一変して暗くなった。

そして私は聞かされた。こーへーにはわからないって言っちゃったけれど、本当は知ってしまった。こーへーの隠された悲しい過去……………」

「今話すと、浩平君壊れちゃうかもしれないから……………」

こーへーが壊れる。それくらいこーへーにとって辛い過去だった……………」

だから私はこーへーのことを守ってあげたかった。私が家族としてこーへーを包み込んであげたかった。

だから、だから…………砂浜で長谷川さんをひっぱたいちゃった。その時の私には、長谷川さんがこーへーの幸せを潰そうとしている魔女にしか見えなかったから……………」

でもそれが私の本人だった。今まで辛いことを経験してきたこーへーを家族の力で幸せにしてあげたかったから。私の知っているあの頃の、学校に行く前までのこーへーに戻ってほしかったから。

でも、でも…………こーへーは私の目を見てはくれなかった。その視線はずっと遠くの見えない何かだった……………」

砂浜での一件以来、こーへーはたまにフラッとどこかへ行ってしまうことがあった。こーへーは散歩って言っていたけれど、どこか不自然だった。私は部活があるからあんまりこーへーと一緒に帰ってはいないのだけれど、家に帰るのが遅いのはいつもこーへーだった。ある日、私の友達からあることを聞かされた。

「ねえ、野島君ってさあ、長谷川さんと付き合っているの？」

内心ドキッとした。はつきり言って、一番されたくない質問だった。

心のどこかで「もしかしたら？」というものがあった。もしかし

てっこーへーは密かに長谷川さんと会っているんじゃないかって。もしそれが本当なら、とても嫌だった……。

私はこーへーと一緒にいたいのに、こーへーのことを誰よりも気にかけているのに、こーへーは私のことを見てはいない。それどころか、こーへーの幸せを壊そうとした長谷川さんと一緒にいるなんてことになったら、私は、私は……。

だから学校でこーへーと長谷川さんが一緒にいるのを見た時、本当にショックだった。それからしばらく、私はこーへーを避けてしまった。

私何バカなことやってんだろって思った。でも、私、そうしないとダメだった。こーへーと長谷川さんが親しく話をしていると、私を見ると、そういう光景を想像すると、私が壊れてしまいそうだった。

そして私は自覚した。

私は、こーへーのことが、好きなんだ……って。

その後色々あって、色んな人から慰められたり、説得されたりして、私と長谷川さんとの距離は近くなっていった。でも友達っていう感覚はなかった。そう思ったら負けだと思ったから……。

夏になっても、こーへーは相変わらず長谷川さんと一緒だった。

本当は私がこーへーの横にいたいのに……。

たまに長谷川さんを遮って、こーへーを半ば無理矢理に私の横へ引き寄せても、こーへーの視線は私を通り越し、後ろにいた長谷川さんの方を向いていた。

私のこと、見ていてほしいのに……。

夏休み、こーへーはボケ村と一緒に映画に行くって出かけていった。そしたら夕方、長谷川さんと一緒に駅から出てくるのを買い物

途中で偶然見てしまった。

私が一緒に行きたかったのに……。

それからみんなが集まった時、田島で肝試ししようってポケ村が言ってきた、私は嫌だったのにこーへーは長谷川さんについていてしまった。

私の方についてほしかったのに……。

肝試しの時、こーへーは長谷川さんとペアになって行ってしまった。

私はこーへーと行きたかったのに……。

こーへーが気を失っている間も、私がずっと看病をして、早く目を覚ましてとずっと願っていたのに、目を覚ましたこーへーは長谷川さんのことを気にしていた。

私は「ありがとう、のぞみ」って言ってほしかったのに……。

好きだよ、のぞみ……って言ってほしかったのに……。

なのに、なのに、こーへーはどうして長谷川さんのことばかり……。

……。

こーへーは、長谷川さんのことが、好きなの？

どうして長谷川さんのことを名前で呼んでいるの？

どうして、どうして……？

こんなにこーへーのことを想っているのに、どうして？

どうしてこーへーは私の気持ちに応えてくれないの？

こーへーは長谷川さんのことが、好きなの？

私はこんなにこーへーのことが好きなのに……。

……………

どうしてっ！

Monologue: My Sacrifice

長谷川咲希

私……長谷川咲希と浩平君との出会いは、突然でした。

あの朝、いつもように起きて、制服を着て、家を出て、いつものように歩いて学校へ行きました。そして校門の所まで着てきた時、私の後ろから疾風が通り過ぎていきました。後で知ったのですが、それは自転車に乗っていた池澤さんでした。

私はその風に驚いて、思わず立ち止まってしまい振り返ってみました。

すると……、

「だーっ！」

自転車に乗った男子生徒が、今まさに私に向かって衝突しようとしていました。

それが、浩平君でした……。

浩平君は気付いていなかったようですが、この時私と浩平君は目が合いました。すると私の瞳は浩平君の瞳に引き付けられました。

瞳……。

浩平君は私と同じ瞳をしていました。私と同じ、苦しみや悲しみを含んだものでした。そう頭で認識した時、私は自転車もろとも転倒する浩平君を背に駆け出してしまっていました。

逃げ出した……。そういった表現が正しいと思います。

私の悲しい過去。それは今から十年くらい前に遡ります。

私の家族、私を知っているのはお母さんだけでした。元々一人っ

子ですし、祖父母や親戚の方々にも一度も会ったことはありません。何でも私の両親はかつて東京の方で暮らしていたそうなのですが、周囲に交際を強く反対されたため、この町まで駆け落ちをしてきたのだそうです。それから二年後に私が生まれたのですが、それから間もなく父は亡くなりました。当時この町を直撃した台風に起因する土砂災害に巻き込まれたのでした。

それから母は、女手一つで幼い私を育ててくれました。田舎でまともな仕事の無い中、それは大変な思いだったことでしょう。

そして私は母のおかげで人並みに学校へも行けるようになりました。でも私にとって学校は嫌なところでした。私は片親で、母はいつも仕事で家にいませんでした。だから学校でクラスメイトに「何でお前には親がいないんだ？」と心無い言葉をかけられました。こういうことはよくあることだと皆さんは思うかもしれませんが。でも当事者にはあまり気持ちのいいものではなく、特に小学生の頃はとても耐えられないものでした。

家には暖かい家族が待っている……。そんな当たり前の日常が私にはありませんでした。それは私にとってコンプレックスとなっていました。

そんなある日、私はある一人の男の子と知り合いました。名前は中原浩君。家が近所で、同じクラスでした。でも、最初から知っていたわけではありません。

きっかけは新学期になったある雨の降る朝。学校へ行く途中、傘が風にあおられて私は転んでしまいました。そしてその拍子に持っていた手提げカバンの中身を雨で濡れた地面に放り出してしまいました。私は転んで身体中が痛いのと恥ずかしいので、その場に座り込んで泣いてしまいました。

すると私の背後に気配を感じたかと思うと、今まで私に降り注いでいた雨粒が、何かに遮られました。

「ほら、持てって」

振り向くと、そこにはクラスで見たことのある男の子が立っていました。

「立てるか？　どっか痛いのか？」

私は首を振り、静かに立ち上がりました。

「ほら」

男の子は私に持っていた傘を手渡してきました。そして、

「うわー、派手にぶちまけちゃったなあ。もうびしょ濡れだし」

男の子は地面に散らばった私のカバンの中身を一つ一つ集めてくれました。

「これで全部だよな？」

男の子は集め終えたカバンの中身を私の前に持ってきました。

私は首を一回、縦に振りました。

「おっけー！」

男の子はそう言うのと、それらを手提げカバンに全部入れて渡してくれました。

「気いつけるよ。今日は海風が強いから」

私は服についた泥を手で払い、男の子にお礼を言いました。

「なあ、君って同じクラスの子だよな。俺、わかる？　中原浩だ」

「うん……」

「ああ、よかったあ。わかんないって言われたらどうしようかなって思った。君の名前は、えっと……」

「さき……。長谷川、咲希」

これが私と浩君との出会いでした。

唐突といえば唐突で、何でもないといえば、何でもないものでした……。

それ以来、私と浩君はよく一緒にになりました。私は今まで友達と

呼べる人がいなかったので少し戸惑いがありましたが、浩君はそんな私をまるで兄のようにリードしてくれました。かくれんぼや鬼ごっことか、普通の少年少女なら経験している遊びも浩君が教えてくれました。そうやっていくうちに、私は次第にクラスメイトとも解け込んでいけるようになりました。

そして私の好きな遊びが「探検ごっこ」でした。

最初は浩君が田島に行こうと私を誘ってきたのがきっかけでした。私は田島には行ったことがなかったので少し怖かったのですが、ここでも浩君がリードしてくれました。

そして私は、探検ごっこが大好きになりました。知らない場所を知っていくというドキドキ感が、まだ幼い頃の私にはたまらないものでした。田島・駅前の商店街・森の中の廃屋・山の洞窟等、色々な場所を探検しました。いつの間にか私が先頭を切って入っていくこともありました。

そしてある夏の夕方、その日も私と浩君は探検ごっこをして遊んでいました。

「なあ咲希、今週の土曜って大丈夫か？」

「え、うん大丈夫だよ」

私はいつものように遊ぶ約束をするのだと思いました。

「よし、おっけー！ 実はさ、今度咲希に俺のとおきのおき場所へ案内してやろうって思ってたんだ」

「とおきのおき場所？」

「ああ、今までの中でとおきのおき、多分俺しか知らない場所だ」
浩君はそう言って自慢気に胸を張りました。

「それって、どこ？」

すると浩君は口元に人差し指を立て、ウインクをしました。

「それは秘密。とおきのおき場所だから、俺が今度特別に連れて行ってあげる」

「本当！ 行ってみたい！」

すると浩君はニカッと笑いました。

「よし決まりだ！ 今度の土曜、咲希の家まで迎えに行くからさ、待っててくれよ！」

「うん！」

「楽しみに待っててくれよ！ そこでな、咲希に見せたいものがあるんだ」

「え、何それ？」

すると浩君は再び口元に人差し指を立てました。

「それも秘密。行ってからのお楽しみ！」

その日、私と浩君はそんな約束をして、私の家の前で別れました。

そしてその週の土曜日の明け方、浩君は私の家へとやってきました。

その時、私はこれからとてつもなく、そしてどうしようもない運命の渦へと巻き込まれていくことを、全く気付いてはいませんでした。

あの日……浩君がいなくなって以来、私は泣き続けていました。浩君が突然私の前からいなくなったというとても受け入れ難い現実を目の当たりにして……。

そしてしばらくして、浩君が家族からも姿を消し大規模な捜索が行われました。その頃はTVカメラをかかえた人達がこの辺りを行き来するのを、家の窓から見ていました。学校も集団登下校となりましたが、私はそれに参加しませんでした。

とても学校へ行けるような精神状態ではなかったですから。

またこの頃でしょうか。今まで私に対してとても優しくった母が、急に私を避け始めました。

そして私が中学二年の時、母は「仕事の都合」という理由で私を

残して家を出て行きました。何故母が変わってしまったのか、理由は未だに判りません。

でもその時の私にとって、それはどうでもよかったことでした。母と疎遠になったことよりも、大好きだった浩君を失ってしまったことの方が、はるかにショックだったのです。

その後私は高校へ進学しました。浩君のこと、まだ引きずっていましたが、時間が徐々に私の心を癒してくれていました。

高校一年の春、私は成長した自分の姿を母に見てもらいたくて、私は母の元へ向かいました。

でも、母は会ってくれませんでした。母の住んでいるアパートへ向かうと居留守を使われ、勤務先へいくと「仕事中」と断られ……、ならばと終業を待って門のところで待っていました。

するとしばらくして前方からやってきた母は、満面の笑みをつくり出迎える私を、まるで見ず知らずの人間のように扱い、無視して通り過ぎていきました。

「誰、あの子？」

「え、知らないわよ、あんな子」

立ち尽くす私の後方から、そんな声が聞こえてきました。

私のことを知らないと言った声、それは間違いなく母の声でした……。

そして私は再び泣き続けました……。

母が私を……、

私はその現実を受け入れることができませんでした。だから私は、母の本心を確かめたかった。高校一年の夏、私は母宛に一通の手紙を送りました。

『九月一日までに帰ってきてくれないと、私は死にます』

八月一日、私は便箋にこれだけを書いて、ポストに投函しました。それから一週間、十日……二十日……と夏の日は無常に過ぎていきました。明日来る、今日は仕事で忙しいのだ、でも……でも明日になればきつと帰ってきてくれる。八月の終わりが近付いてくる中、私はそんな小さな希望だけを持っていました。

そして八月三十一日……、

今日こそ、今日こそ母が帰ってくる日だと私はそう頑なに信じていました。もしちょっとでも疑うと、私は壊れてしまいそうでした。私は仕事で疲れて帰ってくるであろう母のために、めいっぱいの料理を作りました。「上手くなったね」と言われたかったから、一生懸命に作りました。

少し汚れていた部屋を隅々まで掃除し、お風呂も沸かし、居間はまるでお誕生日会のような飾り付けをしました。

居間の壁には、「おかあさん、おかえりなさい」と書いたポスターを貼りました。

そして夕方、私は全ての準備を整えて料理を居間へ運び、万全の体制で母の帰りを待つことにしました。

午後五時……六時……七時……。

まだ外は明るい、もうすぐ帰ってくる。

午後八時……九時……十時……。

あともう少し、もう少し待ては、母は疲れた表情で帰ってくるんだ。

私は一人部屋の中、すっかり冷え切ってしまった料理を見つめ、ただ信じ続けていました。

そして……、

何も感じない無機質な空気の中で、時計の日付が変わりました。

午前0時を過ぎても、私の家の玄関から一切の物音はしませんでした。

した。

真っ暗なこの家の中で、音を刻んでいるのは居間のエアコンの音と、私の嗚咽だけでした。

そしてこの後、私は自分のとった行動をよく覚えていません。

覚えているのは、キッチンに向かったことと、包丁を左手首に押し付けたことでした……。

その後、どうやってここまで生きてきたのか、私はよく覚えていません。覚えていないというか、実感が無いというか、どうでもいいというか……。だから高校一年の時は殆ど学校へ行かず、留年してしまいました。二年目の春、取りあえず高校だけは出ておこうと思ひ、再び学校へ行き始めましたが本当に自暴自棄でした。

そんな中、私は心に決めたことがありました。

それは「もう誰も愛さない」ということでした……。

浩君に母……、今まで私は自分が愛した人を失うことで不幸になってきました。だから私はもう不幸にならないために、もう泣かなくてよいために、人を愛するという感情を捨てました。私はその感情を犠牲にすることにより、成長していこうと決めたのです。

少し寂しいかもしれないけれど、年頃の女の子には一番辛いことかもしれないけれど、でもそうやって生きていかなければいけない、そうするしかないと思いました。

そうやって私は殆ど誰とも接触することなく、二年間の高校一年生を終えました。ずっとこのままでいけばいい、そうすれば、もう悲しむことはない。

そう思っていた時……、

私は浩平君と出会いました……。

すべては きせきの ために… 野島浩平

「おにいちゃん、おにいちゃん……」

「ん、どうした？ みさき」

「あのね、あのね……、おなかが、いたい……」

「またかよ、トイレは？」

「ううん、そんなじゃないの」

「どれどれ、ちょっとみせてみる」

「……………」

「ううん」

「どう、おにいちゃん」

「どのへんがいたいんだ？」

「わかんない。すぐおくのほう」

「そんなんじゃないって」

「でも、いたい……」

「おいしゃさん、いくか？」

「みさき、おいしゃさんきらい……」

「やっぱりか……」

「ごめんね、おにいちゃん」

「おれこそごめんな、みさき。にいちゃん、どうすることもできなくて」

「ううん、いいよ。ありがとう、おにいちゃん」

「ねえねえ、おかあさん」

「何、浩平」

「みさきがおなかいって、いつているんだけど……」

「美咲が？」

「うん、ずっとおなかがいたいって」

「……………」

「みさき、びょういんにつれていったほうがいいのかな？　おかあさん」

「……………」

「おかあさん？」

「え、ああ……。浩平、美咲は大丈夫よ。そんなに心配しないで」「ホントに？」

「ええ、本当よ。心配なくて、いいから……」

「うん、わかった。あれ？　おかあさん、おでこケガしてる？」

「え……。ちよ、ちよつとね、角にぶつけちゃったのよ」

「いたくない？」

「ええ、全然痛くないわよ」

「そっか、よかった！」

ガチャッ

「ただいまあ」

「……………」

「あれ、おとうさんだ」

「チッ！」

「わっ！」

ボタン！

「わお、ビックリした。おとうさんどうしたんだろ？　いきなりでていつて。ひさしぶりにかえってきたのに……」

「……………」

「ねえおかあさん。こんどおとうさん、いつかえってくるのかな？」

「……………」

「あれ？　おかあさん……。どうしたの？　ち、でてるよ」

「え、あ、ああ……」

「おかあさん、だいじょうぶ？　いたい？」

「う、ううん、大丈夫よ。ちょっと、転んだだけだから……」
「いたくない？」

「ええ、全然痛くないわよ」
「そっか、よかった！」

「ねえねえ、おにいちゃん」
「ん、どうした？ みさき」

「あのね……」
「ん、なんだ？」

「おとうさん、こわくない？」

「え？ おとうさんが？」

「うん。みさきね、おとうさん、こわい……」

「うーん、そうかなあ。あんまりかえってこないから、よくわからないけれど」

「そう、なんだ……」

ガシャーン！

「もういい加減にして！」

「何だと！」

……………

「これ以上、あの子達を不幸な目にあわせないで！」

「ウルせええ！」

……………

「アンタ判ってるの？ アンタはあの子達の父親なのよ。 自分が
まだ十代だからって甘えてないで！」

「ウルせえって言ってんだろがっ！」

「きゃあぁっ！」

ガシャーン！

「いちいち俺に指図すんじゃないよ、このクソアマ！」

「痛い！ やめて、乱暴しないで！」

ガシャン！ ドタン！ バキッ！

.....

「ねえ、浩平」

「なに？ おかあさん」

「.....」

「どうしたの？」

「.....あのね」

「うん」

「浩平はお父さんとお母さん、どっちが好き？」

「うーん.....」

「どっちが好き？」

「うーん、うーん.....」

「.....」

「どっちかっていうと、おかあさんかな」

「.....そう」

「おとうさんは、あんまり会ったことないし、よくわかんないや」

「そう.....」

「それが、どうかしたの？」

「え、ううん.....。何でもないの、何でも.....」

「ふーん」

「ごめんね、変なこと聞いて。後ね、浩平」

「うん？」

「浩平は、美咲とずっと一緒にいたい？」

「うん！ みさきは、いもうとだから！」

「そうね。そうよね.....」

ガチャ

「ただいま」

「ぐっ！」

「あ……！」

「あれ？」

「こ……浩平！」

「どうしたの、おとうさんとおかあさん」

「チッ！」

「おとうさん、どうしてバットなんかもっているの？」

「浩平っ！」

「あ、おかあさん。あ！ おかあさん、あたまから、ち、でてるよ」

「グッ！」

「浩平！ 逃げなさい！」

「え……」

「早く、逃げてっ！」

「え？ え……」

ドサ……………

「……………ちゃん」

「え、あっ！ みさき！」

「……………いちゃん……」

「みさき、どうしたんだ！ ひどいケガじゃないか！」

「浩平、逃げて！」

「……お、おにいちゃん……………」

「みさき！ おい、しっかりしろよ！」

「おにいちゃん、いたいよ……。おなか……いたいよ……」

「みさき！ みさきっ！」

「いたいよ、おにいちゃん……。いたいよ、いたいよ……」

「みさき、だいじょうぶだ！ ほら、おにいちちゃんがついてるぞ！」
「おにいちちゃん……おにいちちゃん……おにいちちゃん……」

「みさきっ！ みさきっ！」

「二人とも、逃げてえっ！」

「おにい……」

「え、みさ……」

……

グシャッ

……

「え……」

「美咲いっ！」

……

「うわあああああーっ！」

……

「先生、どうなのでしょうか？」

「うーん、健康状態には問題ないが、やはりかなりのショックを受けているようですな」

「そ、そうですか……」

「実はな、これはうちの看護師が言っていたんだが、どうやら息子さん、軽い記憶喪失になっているようですわ」

「記憶、喪失？」

「ああ、ショックが強すぎたんだろう。かわいそうに……。特にあのことは完全に喪失しているようだ。病室に来てた刑事が頭抱えてたわ」

「そ、そうですか……」

「まあ無理もなからう。自分の目の前で、実の父親に妹を殴り殺さ

れたんだからなあ」

「……はい」

「医者の方がこんなこと言っちゃいかんのかもしれんが、この記憶は、戻らんほうがいいだろう。小さな子には惨すぎる……」

「そう、ですね……」

「どっちにしろ、後はあの子次第だ。身体的にどうこうってわけじゃないから、地道にカウンセリングして精神面を回復していきますわ。今お母さんは、自分の左足のことを考えなさい。バットで殴られた左膝は半月版がぐちゃぐちゃだ。こっちの方が長くかかりそうだぞ」

「はい、よろしく願います……」

おにいちゃん………おにいちゃん………おにいちゃん………

………

おにいちゃん

………

かなしいこと、つらいこと

にげだしたくて、とけいのはりをとめてしまった、あのひ

あのひから、なっていたひから、じかんはとまったまま

でも、

まえに、すすんでいききたいと、ねがっているから

たとえ、かなしくて、つらいげんじつが、そこにあったとしても

まえにすすんでいきたいから………

とけいのはりに、ふれてみた

ねがいを、おもいをこめて

そして、

とけいのはりは、ふたたび、うごくきはじめた……。。

Episode Miracle..1

「犠牲」ということ

「それでは、次のニュースです」

.....

「……県で、高校生の野島浩平君が行方不明になって今日で三週間となりました。これは八月十日……県在住の高校生、野島浩平君が散歩に行くとき家を出たまま行方が判らなくなっているものです。現在二百人体制で捜索にあたっていますが、依然有力な手がかりは見つかっておらず、浩平君が何らかの事件に巻き込まれた可能性もあるとのこと……」

ブチッ……

TVを切ると、電灯をつけていない私の部屋は真っ暗になってしまった。

浩平君が私の目の前で消えてしまっただけ以来、TVのニュースでは連日の浩平君のことを報道していました。田島の秘密弾薬倉庫の一件がなかなか公開されず、マスコミがイライラしている中でこのことを特ダネとして広まっていきました。

「神隠し伝説、再び！」と銘打たれ、今年の八月はこの不思議な話題で持ちきりでした。

そう、あの日……。あの日から私の時間は停まったまま。

浩平君が私の前から消えた、あの時……。私はあの時から、ずっと泣き続けていました。

泣き続けていたのは私だけではない。それは池澤さんも同じ……。毎日浩平君の姿を捜している。

その池澤さんが先日、私の家に来た。

でも私は、池澤さんの前に出ることはできませんでした。何を言

われるのか、どう答えていいのか判らず、怖くてできなかった。

何度も何度もインターホンを押したり、ドアを何度もノックしていたけれど、私は池澤さんにどんな顔をしたらいいのか、判りませんでした……。

「……………」

私はこの三週間、ずっとこの真っ暗な家の中で、ほとんど動くことなく、ただうずくまって泣いていました。

何故私ばかりこんな目に遭うのだろうか……。正直、自分の運命を呪いました。

今まで私は「人を好きになる」という、最も普通で最も人間らしい行為を犠牲にして生きてきました。

ずっとこのまま……。私はそう思い続けていました。

でもそんな時、浩平君が現れました。そして私に、一緒に前へ進んでいこうと言ってくれた。私のことが好きだと言ってくれた。

私はこれから、普通の女の子として生きていける……。そう、信じていました。

でも、でも……。運命は私を解き放ってはくれなかった。私の目の前で、再びあの「奇跡」が起こった。

「……………」

私はこれから浩平君と一緒に前に進んでいくと決めています。

そして、そう信じていました。

でも私の横にいてくれるはずの浩平君がは、いない……。私は前に進むどころか、もうどこにも行けなくなっていました。ただ暗い部屋の中で、一人で泣いているだけででした。

プルルル……

ある時、電話が鳴りました。もう何年振りの出来事だろうか。で

も私はとても電話で何かを話せるような気分ではなかったので、そのままやり過ごすことにしました。

プルルルル……プルルルル……プルルルルル……

でもその電話の呼び出し音は、一向に鳴り止む気配はありませんでした。

私はとうとう根負けして、電話の前に立ってその受話器を取りました。

「……もしもし」

そして受話器の向こうから聞こえてきた声は……、

「え……？」

それはあまりにも懐かしい声でした。もう忘れてしまいそうでしたが、一言その声を聞いた途端、あの頃の記憶が堰を切ったかのように溢れ出てきました。

「元気？ 咲希……」

それはお母さんからの電話でした。

そしてあの頃から停まっていた時計の針が、今動き出そうとしていました……。

お母さんからの電話……、

それは私にとって、とても大切なものでした。

「今までごめんね、咲希」

お母さんのその一言の謝罪が、私の心を動かしてくれた。私は泣き虫だけど、この時は何故か涙は出ませんでした。

私はお母さんとの電話を置くと、家を飛び出していました。外はいつの間にか真っ暗になってしまいました。

私はひたすら走り続けました。私とお母さんとの今まで停まっていた時間が動き始めた……。それはお母さんが前に進みたいと強く願ったからでした。

お母さんは電話で、何故あの中から私に強くあたったのか。何故家から出ていったのか語ってくれました。

でも今の私にとって、理由などどうでもよかった。お母さんは自ら停めてしまった私との時間を、自らの手で再び時計の針に触れて動かした。

だったら、私もできる。しなくてはいけない！

私が停めてしまった浩平君との時間……。それを刻む時計の針を、再び動かすことができるのは私自身しかない。

だって、私は浩平君のことが、好きだから……。一緒にいたいから！

浩平君との時間は、私にとってかけがえのないものだから、だから……！

「はあ、はあ……」

私は足を止めた。目の前には、田島がぽっかりと浮かんでいました。

私は潮が引ききっていない海の中を、懸命に走りました。今日は大潮、これからほとんど潮が引いていく。

チャンスはこの時しかない！

私はただそう思いながら田島へと向かいました。

現在も調査が続いている田島ですが、夜間は秘密弾薬庫近辺以外に人は殆どいない。幸い、私は誰にも見つからず田島に上陸することができました。

そして私はズブ濡れのまま、あの場所へ向かった……。

「……………」

そして、あの場所へと着いた。

誰にも見つからないように、普段通る道から外れてまるで獣道のようなところを走ってきたから、手足には無数の擦り傷や切り傷を作ってしまった。でも、今は痛みなんか感じなかった。

「まだ、潮が完全に引いていない……」

私の目の前の場所、それは私の運命の始まった場所……、海美子姫の祠がある秘密の砂浜でした。

でも今は、その砂浜は見えない。この砂浜は大潮の干潮時にしか姿を現さない幻の砂浜です。依然はこの祠ができた頃はいつも存在していたことでしょう。でも地球温暖化の影響で水位が上昇し、いっしょか海の中に沈んでしまいました。

おそらく海美子姫の祠が忘れ去られてしまったのも、それが原因でしょう。

私は砂浜へと降り立ちました。まだ完全に潮が引いていないため、膝くらいまで海水に浸かりました。

「……………」

私は砂浜の奥のほうへと向かいました。目的地はただ一つ、海美子姫の祠……。

あてなんかありませんでした。行って、どうなるということは判りませんでした。

ただ、私はそうせずにはいられなかったから……。

今私がすべきことは、停まってしまった時間を再び動かすこと。

そして時間が停まってしまったのは、この田島であり、あの祠なのだから。

そして砂浜の奥、小さな入り江となっていているところに祠は佇んでいました。まるで私が来るのを待っているようにも思えました。

「……………」

私は朽ちてフジツボだらけとなった祠の屋根に触れてみました。そういえば十年前のあの時も、こうしていたような気がする……。

あの時もこうして、好きな人を想っていたような気がする。

でもあの時と、今は違う……。今まで私は自分の運命と奇跡の前に何もできず、ただ泣いていました。いつここにきてしていることは、ただ泣くだけだった……。

でも、今日は、今日は違う。

大好きな人と一緒にいたい、前に進んで行きたい！

その想いを実現するため、再び奇跡を起こすために、私はここにいます。

「お願い……」

私は祠の屋根に触れる指に、全神経を集中させました。

「あなたは以前、私に一つの奇跡を与えてくれた」

「それは大好きな人の存在を消してしまうというものでしたね」

「奇跡は、人を幸せにしてくれると、誰がいいます」

「でも、私にとってこの力は、人を不幸にする奇跡です……」

「私はこの奇跡で、ずっと、ずっと泣き続けてきました」

「海美子姫……。あなたは好きな人の存在を消して、その存在を永遠のものにすることで、好きな人と一緒になれたのかもしれない。幸せになれたのかもしれない……」

「でも私にとって、好きな人が私のそばにいれくれないことは、とても耐えられないことなのです。少しでも離れ離れになると、私は壊れてしまいそうになります」

「好きな人が……浩平君がそばにいないと、私……ダメなんです」

「だから、お願い！」

「お願い……。浩平君と一緒にいさせて。浩平君と、一緒に、いたいの……。一緒に前に進んでいくの。だから、だから……」

「……おねがい……」

そして私は祠にすぎるようにしがみつきました。

想いを、私の想いを伝えるために……。

十年前、「好き」という想いが伝わり、浩君の存在を永遠のものとしてしまったのならば……、

私は伝える。浩平君と一緒にいたいという想いを。

再び、奇跡を起こすために……。

次の日。

今日、九月一日は二期の始業式です。

この夏は色々騒ぎが起きましたので、平常通り行うかどうかかなり話し合われたようですが、田島の調査も殆ど終了したということもあり、始業式は行われることとなりました。

ただ浩平君の事件が考慮され、小中学生はしばらくの間集団下校となりました。

今日から二期といっても、私は学校に行くような気分にはなりませんでした。

浩平君がいない学校なんて、私には何の意味もないから……。それに学校で池澤さんたちにどんな顔したらいいか判らないですし。でも私は一日中家にいるというわけではありませんでした。私は田島から戻ってきてから家には帰らず、ある場所にいました。そこは昔から大好きで、町や田島を見下ろすことができる、海風が気持ちのいい場所。

この場所は浩平君曰く「俺と咲希の秘密の場所」。そして私と浩平君との思い出がいっぱい詰まった、大切な場所。

存在の消えてしまった浩平君の匂いが、一番残っている場所。

そして、浩平君の存在が消えてしまった場所……。

私はあの展望台に足を踏み入れていました。

夜が明け、太陽が昇ってきてても、私はここいました。離れたくありませんでした。

「……………」

私はここに来てからずっと展望台の手すりに頬杖をついて、遠くに浮かぶ田島を眺めていました。それが私のいつものポジションで

した。このとき、私の横にはいつも浩平君がいた。

そう、あの時まで……。

「……………」

太陽が空の真上へと差し掛かってくるにつれて、セミの大合唱が次第に声を増してきました。もう九月とはいえ、南国の残暑は厳しい。見た目には、まだ夏は終わっていませんでした。

「……浩平君……………」

頬を汗が滴る中、私はずっと浩平君のことを考えていました。

最初の出会いは唐突でした。校門のところで危うく衝突しそうになって……。

でも今考えたら、あれは運命だったのかもしれない。

同じクラスで席が隣になった時、初めて浩平君の顔を間近に見ました。その時、浩平君が私と同じ瞳の色をしていて、本当に驚きました。私と同じくらいの悲しみや苦しみを背負っている人がいるなんて信じられなかった。

そして私が田島から帰ってきた時、偶然砂浜で会った。この時、私は自分の考えばかり言ってしまった、結果池澤さんを怒らせてしまいました。

でもこの時確信しました。浩平君にも悲しい過去があるって。

そう、この直後くらいからだと思う。私が浩平君に興味を抱き始めたのは。でもこの時はまだ気になるだけで、恋愛感情なんかありませんでした。

私が浩平君に恋愛感情を抱き始めたのは、浩平君と一緒に映画を観に行った時でした。

映画を観て、大好きなたこ焼きを食べて、他愛もない話をして笑って……。

普通の女の子には何でもないことでも、私にはかけがえのない一時でした。それを何でもないように感じさせてくれたのは、浩平君でした。浩平君と一緒にいるととても楽しかった。だから、離れたくなかった。

私は浩平君と一緒にいたいって、思うようになっていました。

この展望台にも、色んな思い出があります。

ここで私達は、一緒に前へ進んでいくことを約束しました。ここでは泣いたり笑ったりしました。いっぱい浩平君と話した……。

ここで私は、私には浩平君がいないとダメだって気付いた。私は浩平君のことが好きだってことを感じました。

浩平君と一緒にいたいって、心から思った。

最初は正直怖かった。また存在を消してしまうのではないかって……。

でも今は違う。浩平君に会いたい。好きだと言いたい。ずっと一緒にいてほしいと言いたい。

浩平君！

.....

その時、風が吹いた。

海風ではない、どこか遠くの方からこの展望台を目指して吹いてきたような……。

セミの声が止んだ。日差しが緩んだ。

一瞬、時間が停まった。

全てが、虚無となった……。

私は全神経を集中させていた。感情がこみ上げてくるのを、必死で堪えた。

涙が鉄砲水のように、理性という名の堤防を決壊しようとするのを、必死で堪えた。

「……………」
「……………」

私は……後方に感じる気配の持ち主を、知っている……。とても懐かしくて、とても愛しい、そんな気配。

「待たせたかな？」

「……、いえ、今……来たところです……」

そして私は振り向いた。

「咲希……」

そこには涙目で、今にも壊れて無くなってしまいそうな私に、いつも見せてくれていたような笑顔で見つめる、浩平君がいました。

「浩平君！」

「咲希！」

私と浩平君、私達は互いの名を呼び終える前に、全てを言い終わる前に、互いを抱きしめていました。

もう離れたくないという想いで……。

私と浩平君の奇跡

停まっていた時計の針が今、再び動き出す……。

九月二十日。

この日私は浩平君に呼ばれ、浩平君が入院している病院へと向かいました。

浩平君が戻ってきてから、町は大騒ぎとなりました。浩平君曰く、家に帰ると池澤家全員に泣きながら抱きしめられたそうです。

ただ浩平君の体調はよくありませんでした。浩平君はその日のうちに病院へと搬送され、色々な検査を受けたそうです。長い間存在が消えていたせい、身体と精神のバランスが崩れ、激しい頭痛と動悸に襲われたのだそうです。勿論医学的には原因不明で町の病院ではどうしようもなく、隣町の大学病院へと入院しました。

私もすぐにお見舞いへ行きたかった。でも病院には池澤家の方々、特にのぞみさんがいるから、行くことができませんでした。

別にやましい思いがあったからではありません。家族の団欒を壊したくなかったからでした。

そして前日に浩平君から電話がありました。

「明日来れる？」

私は最初行くかどうか迷いましたが、浩平君に会いたいという気持ちが強くて、OKしました。

「あの時、聞こえたんだ……」

大学病院のベッドで横になる浩平君が語り始めました。

私は浩平君の横に座る。浩平君の容態が安定しているということ、今日池澤家の方々は夕方から来るとのことでした。

「あの時、俺が消えてしまってから、俺はどこで何をしていたか全

く判らなかつた……。ただ、何も無いところを無感情に、幽霊みたいに浮遊しているって感じだったんだ」

浩平君は離している間、時折頭痛に見舞われるらしく、痛みに顔をしかめていました。私は氷水で絞ったタオルを浩平君の額に当ててあげていました。

「そんな時、遠くの方から声が聞こえてきたんだ。最初はよく聞こえなかったけれど、その声を聞いていたって感じるようになって、その声が鮮明に聞こえ始めたんだ」

「何て、言っていたのですか？」

私は浩平君に訊ねました。

「……」

浩平君は、一拍置いて答えました。

「おにいちゃん……。そう聞こえた。俺はその声に導かれて、この世界に戻ってくる事ができた」

「おにいちゃん……？」

「ああ、俺実はさ、妹がいたんだよ」

「妹……」

浩平君は優しい表情で話してくれました。

「ああ俺、思い出したんだよあの時……。咲希を追っていったあの砂浜で、海美子姫の祠を触った時、目の前で映画を上映しているみたいに、俺の、小学校以前の記憶が……。俺の中から飛び出してきたんだ」

浩平君は私の方を見つめ話す。

「その時知ったんだ。俺には昔、妹がいたってことを……」

「昔……？」

そして浩平君の瞳が一瞬、曇る……。そう、私が感じたのはこの瞳の色……。

「ああ、今はない。もう、この世にはいないんだ」

「どうして……？」

浩平君の瞳に、哀しみが宿る。

「殺されたんだ、父親にな……」

その言葉に、私は持っていたタオルを落としてしまいました。

「恭子さんからも聞いたんだけれど……。俺の妹は生まれつき身体が弱くて、ずっと家に閉じこもっていたんだって。どういうわけか父親にはその妹の姿が癪に障ったらしく、よく虐待を受けていたらしいんだ。それを止めに入った母さんもバットで殴られたりしていたそうだ……」

「……………」

「そして、あの時……、俺は幼稚園から帰ってきた。その時、俺は血まみれになって倒れている妹を見つけて駆け寄ったんだ。そして妹を抱きかかえようとした時、父親が妹の頭を、バットで……」

浩平君の目尻には光るものがありました……。

「浩平君……」

この話を聞いて、私は確信しました。浩平君の辛く悲しい過去とというのは、自分の目の前で妹を父親に殺されたということ……。私は涙が出そうになるのを必死に我慢しました。でも私の目尻から雫がポロツと零れ落ちてしまいました。

「その妹が、俺を、導いてくれたんだ……」

「……はい……………」

「この世界に戻る寸前、妹はこう言っていたんだ……。おにいちゃん、しあわせになって……って」

その時、遂に浩平君の瞳から大粒の涙が溢れ出してきました。

「浩平君……」

私は浩平君を抱きしめました。私も泣くのを我慢しませんでした。

「咲希……」

浩平君が私の名を呼ぶ……。

「ありがとう、奇跡を起こしてくれて」

「え……?」

「咲希のおかげで、俺はここに戻ってくることができた。それに、妹にも……会うことができた。最後に見えたんだ、妹の……美咲の

笑顔が……」

浩平君は私の肩を引いた。その表情は涙で濡れてはいますが、浩平君は満面の笑顔でした。

「私はただ、浩平君と一緒にいたいから、だから……」

そして、私も満面の笑みで応えました。

「咲希、俺はこうして戻ってくることができた。だから、あの時展望台でした約束を守るよ」

「浩平君……」

「俺は咲希と一緒に、前へ進んでいく。俺は守るぞ、絶対に……」
勿論、私の気持ちも同じでした。

「私も、守ります……」

そして私達は、展望台以来のキスを交わしました。

一緒に前へ進んでいく。

私はこの時、浩平君と一緒にいることの幸せを痛いほど噛み締め
ていました。

もう、どこにも行かないで……。

エピローグ 「奇跡」ということ

それから三日後の朝、再び病院の浩平君から電話がかかってきました。

「外出許可が下りたから……」

内容はそのような感じでした。私は少し戸惑いましたが、とにかく病院へと行ってみることにしました。

「よう咲希！」

私が病室へ入ると、パジャマではなく普段着の浩平君が立っていました。

「こんにちは」

「……………」

そして浩平君だけではなく、池澤さんと池澤さんのお母さんも一緒にいました。

池澤さんのお母さんは私の姿を見るとニコリと笑ってくれましたが、池澤さんは口を真一文字に結んでいました。私はそんな光景に少し戸惑ってしまいました。

「ホホ……」

その姿を見て、池澤さんのお母さんが笑う。

「す、すみません……」

「咲希、何で謝ってるんだ？」

本当に、何で謝ってしまったんでしょうか……。

「ところで浩平君、どうしたんですか、その格好……」
すると浩平君はニカッと笑い両手を広げる。

「見りゃわかるだろ、秋の新作だ！」

「それと同じ服を、五月頃見たような気が……」

「き、気持ちの問題だ、気持ちの！」

……………

何だか、こういう会話を久し振りにしたような気がする……。

私と浩平君の時計は動いている。私は心の中でそう確信しました。

「そんなことはどうでもいいって。電話で話したろ、外出許可が下りたって」

「え、あ……はい」

「というわけで、行くぞ咲希！」

「え、きゃっ」

すると浩平君はいきなり私の手を引っ張り、病室から出ようとする。

「咲希さん」

池澤さんのお母さんから声をかけられる。

「浩平君のこと、よろしくお願いしますね」

池澤さんのお母さんは笑顔で私に話す。手を引っ張られながら私はただ頷くことしかできませんでした。

そして浩平君に引っ張られ病室から出たところで、

「長谷川さん！」

私達の後を追うように、池澤さんも病室から出てきて私を呼び止めた。

でも私は浩平君に引っ張られているため止まることができませんでした。

「きよ、今日だけだからねっ！」

池澤さんの口元は緩んではいましたが、その瞳は笑ってはいませんでした。

それに対しても、私はただ頷くことしかできませんでした。

そして私は浩平君に連れられて、病院を後にした。

「外出許可が下りた」

浩平君がそう言うので、私は以前したように、映画を観たり、食事をしたりというのを考えていました。

でも私のその予想は外れていました。

浩平君は駅に着くと在来線のホームではなく特急列車のホームへと進んでいきました。

私は浩平君にどこへ行くのか訊ねてみました。

「秘密」

しかし何度聞いてもそのように返されました。

そして本当に訳の判らないまま特急へと乗り込むこととなりました。

新幹線の中で、私は浩平君に特急のチケットを見せてもらいました。そこには行先が書かれていました。

「あれ……」

その行先は、浩平君が以前住んでいた都市でした。

「浩平君、これって……」

「咲希、行ったら判るよ。これは、大事なことなんだ」

真顔で話す浩平君の言葉に、私はただ頷くしかありませんでした。

お昼頃に目的地へと到着しました。ここは日本有数の大都市で、高層ビルが立ち並ぶ街並みを眺めていると、私達の住む町がとても田舎のように感じました。

そこから初めて見る地下鉄に乗り、降りた駅から今度はひたすらバスに乗り、やっとバスを降りたら今度は歩き……。周りの風景は大会から私たちの町のそれを大して変わらなくなっていました。

「ちょっとここで待っててくれ」

道の途中、浩平君が足を止める。すると私達の左手にポツンと立っている商店へと入っていきました。

何を買うに行ったのだろうかと思議そうに私が待っていると、

ほどなく浩平君は戻ってきました。

そして商店から出てきた浩平君の手には、仏花が抱えられていました。

「さあ、行こうか」

そして浩平君は再び歩き始めました。

この時、私は浩平君が何をしようとしているのか、凡その見当がつきました。

そう、今日は九月二十三日、お彼岸の中日でした……。

私の予想通り、浩平君は小さな霊園へと入っていき、そして一つの小さな墓石の前で足を止めました。

そのお墓はもう長い間、人が訪れていないようで、墓石の周りには墓石よりも背の高い雑草が茂っていました。

野島 美咲

小さな墓石には、そう名前が彫られていました。

浩平君は花と水の入ったバケツを足元に置いた。

「これが俺の妹、野島美咲の墓だ……」

浩平君が小さな声で呟く。そして墓石の前にしゃがみ込みました。

「なあ咲希、少し頼みがあるんだけど」

「はい？」

「一緒に、美咲の墓、掃除してくれないかな？」

浩平君は少し申し訳なさそうな口調で言いました。

私はそれに対し二つ返事でOKしました。

一時間後、美咲さんのお墓はすっかりキレイになりました。浩平君が雑草を抜き、私が墓石を水で拭いて、お花を供えました。そして最後に浩平君が墓前に線香を供え、一緒に手を合わせました。

「恩返しだよ、美咲。ありがとう、ありがとう……」

手を合わせている間、浩平君はそう呟いていました。私も同じ想いで手を合わせていました。

「さて……」

しばらくして、じっと手を合わせていた浩平君が立ち上がりました。

「行くか、咲希」

「はい……」

私は浩平君の後に続きました。

「これから、どうするのですか？」

私の問いに、浩平君は少し苦笑いをしました。

「実はさ、これから会いに行くんだよ……母さんに」

浩平君の意外な言葉に私は驚いた。

「まあ驚くわな……。でも会っておきたいんだ。もっと美咲のことが知りたい。俺が覚えている美咲は、泣いて苦しんでいるだけ……。でも絶対それだけじゃなかったと思うんだ。楽しかった思い出だって、きつとあるはずなんだ。それを母さんに聞かせてもらうんだ」

「浩平君……」

「進ませてやりたいんだ、美咲も……。哀しい人生だったで、終わらせたくないんだ」

私は浩平君の瞳を見た。もうその瞳に悲しみや苦しみなんかありませんでした。

そこにあるのは、強い決意でした。

浩平君は、前に進んでいる……。私はそれを肌で感じました。

「あのね、浩平君……」

「ん、何だ？」

私は「あること」を浩平君に切り出した。

「実はですね、私も今度久し振りに会うんです、お母さんと……」

「え、そうなのか？」

「はい……。先日お母さんから久し振りに連絡がありまして、色々

と話しました……。何故、私のことを避けていたのかも」

「咲希……」

「お母さん、お父さんが亡くなってから、私を育てることに一生懸命になりすぎて、育児ノイローゼになってしまっていたそうなんです。それが私を避けていた理由でした」

「咲希……………」

「でもお母さんも、それ自体が重く押し掛かっていたそうです。このまま自分が大切にしなければいけないことから目を逸らし続けたもいいのかって……。もしかして、まだ私がずっと泣き続けているんじゃないかって……」

思わず涙目になってしまった私の肩を、浩平君は優しく抱いてくれました。

「咲希のお母さんも、前に進みたかったんだろう。でも一度停めてしまった時間を再び動かすことは簡単じゃない。そのきっかけを掴めず、長い間苦しんでいたんだろうな……」

「はい……」

私は涙目で頷きました。

「でも進みたいって思い続ければ、必ずその願いは叶う。俺たちの奇跡のように」

「浩平君……」

私は浩平君の胸に顔をうずめる。

「奇跡は、やっぱり人を幸せにするために、起こるんだよ」

この浩平君の言葉が、私の心の奥底まで響いてきました。

私は今まで、奇跡は人を不幸にするもの……奇跡なんか起こってほしくないって思い続けてきました。

でもそれは私が時間を停めてしまったから、前に進むことをやめてしまったから……。何気ないことでも、そういう風に感じてしまっていたのです。

奇跡は人を幸せにするために起こる……。

でもそれは前をしっかり向いていないと、それを実感することが

できないもの。

私はそう思います……。。

「そろそろ行こうか」

浩平君が私にそう促しました。

「そう、ですね」

私は浩平君の胸から離れた。

そして浩平君は空になったバケツを持って歩き始めました。

「あの……、手をつないでも、いいですか？」

ちよっぴり恥ずかしいけど、私から思い切って言ってみました。
すると浩平君は、

「ああ、いいぜ」

そして私に左手を差し出してくれました。

そして、私は初めて浩平君の手を握った……。

「さ、行こうぜ！」

「はい！」

そして私達は歩き始めました。

私と浩平君は、着実に前へと進んでいる。

今、新しい時間が刻まれていく。

私達の奇跡が生んだ、新しい時計の針によって……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9443f/>

みらくる

2010年10月8日14時09分発行